2018 Annual report

一般財団法人京都地域医療学際研究所

Kyoto interdisciplinary institute of community medicine

平成30年度　年報

一般財団法人　京都地域医療学際研究所

設 立 趣 意 書

（昭和56年11月）

20世紀後半における世界共通の重要な社会問題の一つは、老人問題であるといわれておりますが、わが国もその例外ではありません。

特に、わが国の老人人口の増加は、実に目覚ましく、西欧諸国に例をみない速さで高齢化社会へ移行しており、そのため、わが国は、来るべき高齢化社会への対応を短期間のうちに準備しなければならないという厳しい情勢に直面しています。

とりわけ、老人は、加齢に伴う心身の機能低下から疾患に罹患しやすく、慢性化する傾向にあるため、老人の健康を保持することは、老人福祉の向上を図る上で基礎になる重要な課題であります。そのためには、疾病の予防に力点を置きつつ、治療からリハビリテーションに至る一貫した対策が、老人の生活の場である地域における家族、老人クラブ、自治会、診療所、病院等のあらゆる力によって総合的に推進されることが望ましいことは言うまでもありません。

同時に、老人は、稼働能力の喪失や核家族化の進行に伴う扶養意識の減退といった社会情勢の変化の影響を受けており、老年期を迎えての様々な心理的特性についても、十分配慮した医療が必要となっています。

このような状況の中で、様々な医療機関や人々の手で老人に対する医療と介護が行われてきましたが、本格的な高齢化社会を目前に控え、社団法人京都府医師会は、老人に対する地域医療について、医学、経済学、社会学、心理学といった多くの境界領域の専門知識を結集し、新しい医療のあり方を研究し、その実現を進めていくことが必要であるとの認識の上に立って、ここに「財団法人京都地域医療学際研究所」を設立することに致しました。

本法人は、京都府・京都市をはじめ、地区医師会等関係団体並びに諸機関の協力・援助を得て、高齢化社会における地域医療のあるべき姿を究め、もって、住民の健康の増進と福祉の向上に寄与しようとするものであります。

目　　次

設立趣意書　1
目　　次　2
巻　頭　言　5

第1章　一般財団法人　京都地域医療学際研究所組織の概略

基本理念・基本方針 …… 8
法人中期vision …… 9
沿　　革 …… 10
事業所一覧 …… 11
理事・監事・評議員名簿 …… 12
組織体制図 …… 13
役職者名簿 …… 14
年度末職員数 …… 15

第2章　がくさい病院

病院理念・基本方針 …… 18
病院中期vision …… 18
平成30年度の活動 …… 19
病院概要・施設基準 …… 20
医師体制 …… 21
医療統計 …… 22
整形外科部門 …… 25
A病棟 …… 26
スポーツリハビリテーション科 …… 27
外来・手術室 …… 28
回復期リハビリテーション部門 …… 29
B病棟 …… 30
リハビリテーション科 …… 31
看護部門 …… 32
医療技術部門 …… 33
薬剤科 …… 34
放射線科 …… 35
臨床検査科 …… 36
栄養科 …… 37
事務部門 …… 38
医事課 …… 39
地域医療連携課 …… 40
システム管理課 …… 41
総務課 …… 42
医療安全管理部門・医療安全管理委員会 …… 43
訪問リハビリテーション …… 44

感染防止対策委員会 …… 46
院内教育委員会 …… 47
栄養管理委員会 …… 48
褥瘡防止対策委員会 …… 49
診療録管理委員会 兼 システム委員会 …… 50
企画広報委員会 …… 51
衛生管理委員会 …… 54
倫理委員会 …… 55
学会発表実績 …… 56
外部研修参加実績 …… 57
実習生受入状況 …… 64
京都府リハビリテーション教育センター実地研修 …… 65
京都府立医科大学 クリニカルクラークシップ …… 66
地域活動［がくさい健康塾］ …… 67
患者アンケート調査結果（入院） …… 68
患者アンケート調査結果（外来） …… 70
京都市域京都府地域リハビリテーション支援センター …… 72
新入職員について …… 76
病院機能評価受審について …… 77
子育て世代職員の働き方検討ワーキンググループ …… 78
人事評価制度再検討ワーキンググループ …… 79
ユニフォーム変更について …… 80

第3章　介護老人保健施設「がくさい」

基本理念・基本方針 …… 82
平成30年度の活動 …… 83
老健中期vision …… 84
施設概要 …… 85
職種別職員数 …… 85
事業統計 …… 86
生活支援部門 …… 88
入所療養科 …… 89
リハビリテーション部門 …… 90
リハビリテーション科 …… 91
通所リハビリテーション科 …… 92
事務部門 …… 93
総務課 …… 94
相談課 …… 95
褥瘡・感染対策委員会 …… 96
身体拘束人権委員会 …… 98
安全対策・リスク管理委員会 …… 99
行事・ボランティア委員会 …… 100
生活向上委員会 …… 101
外部研修参加実績 …… 102

施設内研修開催一覧 …… 103
地域貢献活動 …… 104
実習生受入状況 …… 106
DWAT活動報告 …… 108
業績発表会 …… 109
京都市北区地域介護予防推進センター …… 110

第4章　在宅関連部門
訪問看護ステーション「がくさい」 …… 114
居宅介護支援事業所「がくさい」 …… 117
京都市鳳徳地域包括支援センター …… 119

第5章　法人運営等
法人事務局 …… 122
理事会・定時評議員会 …… 123
法人運営会議 …… 124
クラブ活動：野球部 …… 125
クラブ活動：フットサル部 …… 126
クラブ活動：バレーボール部 …… 127

年　　表 …… 128

巻　頭　言

理事長　森　　洋一

平成30年度の報告書を発刊するのにあたり一言ご挨拶を申し上げます。

昭和57年の財団創設から37年が経過し昭和、平成を経て今年は令和元年を迎えることとなりました。この間、社会の変化、医療、介護の置かれている状況は劇的に変化してまいりました。当病院も開設当初101床から、現在は90床となり、整形外科、回復期、リハビリテーション中心の特徴ある病院へと変貌してまいりました。高齢社会を見据え、老人保健施設の設置や在宅部門への対応が求められるために訪問看護ステーション、包括支援センター、居宅介護支援事業所、京都市域京都府地域リハビリテーション支援センター、京都市北区地域介護予防推進センターなど京都府医師会により設立された財団としての取り組みを進めてまいりました。

これも偏に当研究所の運営にご理解をいただいてまいりました多くの病院や医師会の先生方のご支援の賜物と感謝申し上げます。少子化の進展、医療介護分野での人材不足は深刻となっており、医療者の働き改革も大きな課題となっています。生き甲斐を持ち長く働ける職場の提供が喫緊の課題となってきています。一層取組を強化し、地域の皆様のご期待に添えるよう努めてまいりたいと考えております。

今年は、御代代わりで令和元年、新年のスタートとなりました。当研究所におきましても、新年に相応しく京都地域医療学際研究所の所長として京都府立医科大学　運動機能再生外科学・整形外科学　名誉教授久保俊一先生をお迎えすることが出来ました。また、附属病院であるがくさい病院の移転にご尽力をいただきました小西院長が退任され、上島圭一郎副院長が病院長に就任、令和元年に相応しいスタートが切れました。宜しくお願い申しあげます。

本年も業績集を発刊することになりました。詳細は本書でご確認をいただけたらと思いますが、平成30年度のがくさい病院は、病棟の一部を改修し回復期病床を4床減、整形外科病床を4床増床しました。手術数も増加して順調と思っておりましたが、年末に予期せぬ麻疹感染患者の外来受診により対応に追われ入院を制限しなければならない事態となり多くの関係各位にご迷惑をおかけすることになりました。幸いにも大きなトラブルもなく、また患者さんへの感染も拡大せずに対処できたことは適切な危機管理業務が実施できた結果と安堵しております。今後も危機管理に十分な対応がとれるよう日常的に研修を実施し、患者様、関係医療機関の皆様に安心してご利用いただけるよう努めてまいりますとともに、財団の理念でもあります安心で質の高い医療、介護の提供に務めてまいりますのでご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第1章

京都地域医療学際研究所の概略

一般財団法人　**京都地域医療学際研究所**

基本理念

安全で、質の高い、信頼される医療と介護を目指します。

基本方針

1. 安全で安心な医療と介護を提供します。
2. 思いやりの心で患者・利用者本位の医療・介護を進めます。
3. 急性期から生活期まで切れ目のないサービスを目指します。

一般財団法人　京都地域医療学際研究所　中期vision

（策定　平成30年4月1日）

［方　　針］

医療・介護報酬同時改定に向けて、強固な組織作りを継続する

［強化項目］

1. 安定した経営基盤の強化

前年度から改善しつつある経営基盤を更に強化し、持続可能な経営基盤を構築する。財務状況を健全化し、計画的な投資が出来る環境を整備する。そのためには予算計画に沿った法人運営を強化する必要がある。

2. 医療と介護における質の強化

医療と介護サービスの質を強化していく。そのためには、その基本となる医療安全管理や感染対策・接遇等の質も同時に向上させなければならない。質を担保する各種委員会の機能向上が必要である。

3. 連携（チームアプローチ）の強化

回復期におけるチームアプローチだけでなく、整形関連部署による整形チームの連携強化、また地域医療機関との連携強化が必要である。老健・在宅部門においては、地域包括ケアシステムにおける事業所の役割を認識し、法人内や地域との連携を強化する。

4. 組織体制と人材育成の強化

既存の組織体制に囚われず、いま必要な組織体制を構築する。また法人内の管理職とその候補者育成を強化する。

5. 働き甲斐のある職場環境の強化

適切な人事評価を導入し、頑張っている職員が働き甲斐を持てる環境を整備する。また法人運営に関する職員の前向きな意見を積極的に取り入れ、職員参加型の法人運営を目指す。

一般財団法人　京都地域医療学際研究所沿革

昭和56年 6月	京都地域医療学際研究所　設立（京都府医師会による）
昭和59年 1月	がくさい病院　開設（病床数50床）
昭和59年10月	病床数変更（101床）
昭和59年 2月	健康診査事業部　設置
昭和60年	高齢者栄養生態調査事業（京都市保健センター委託事業）
昭和61年	スポーツ選手の筋力測定診断事業　開始
昭和62年	高齢者の体力に関する調査
平成 4年 9月	老人訪問看護ステーション開設（京都府第1号）
平成 7年 4月	スポーツ医科学センター開設
	アスリート体力測定・相談事業開始
平成 8年 9月	京都市在宅介護支援センター開設
平成10年12月	A棟3階病棟（21床）を「療養型病床群」に変更
平成11年10月	診療科目　放射線科・耳鼻咽喉科・リハビリテーション科を追加
平成12年 4月	介護保険事業開始（京都府知事指定）
平成17年 1月	介護老人保健施設「がくさい」 開設
平成18年 4月	健康スポーツクラブ「がくさいウェルネス」事業開始
	京都市鳳徳地域包括支援センター　受託経営開始
平成19年 7月	A棟4階一般病床（40床）を「障害者病床」に変更
平成23年 7月	A棟3階療養病床（21床）を「一般病床」に変更
平成25年11月	がくさい病院移転（中京区）
	整形外科40床（一般病床）、リハビリテーション科50床（回復期リハビリテーションⅢ入院料）
平成28年 4月	リハビリテーション科50床　回復期リハビリテーションⅡ入院料へ類上げ
平成28年10月	リハビリテーション科50床　回復期リハビリテーションⅠ入院料へ類上げ
平成29年 4月	がくさい病院　訪問リハビリテーション事業開始
平成30年 5月	病棟改修工事（回復期病床50→46床，急性期一般病床40→44床）

令和元年5月現在

一般財団法人京都地域医療学際研究所　事業所一覧

がくさい病院
京都市域京都府地域リハビリテーションセンター
〒604-8845
京都市中京区壬生東高田町１番９

介護老人保健施設「がくさい」
京都市北区地域介護予防推進センター
〒603-8465
京都市北区鷹峯土天井町54

訪問看護ステーション「がくさい」
居宅介護支援事業所「がくさい」
〒603-8214
京都市北区紫野雲林院町76

京都市鳳徳地域包括支援センター

〒603-8145
京都市北区小山堀池町10

理事・監事・評議員名簿

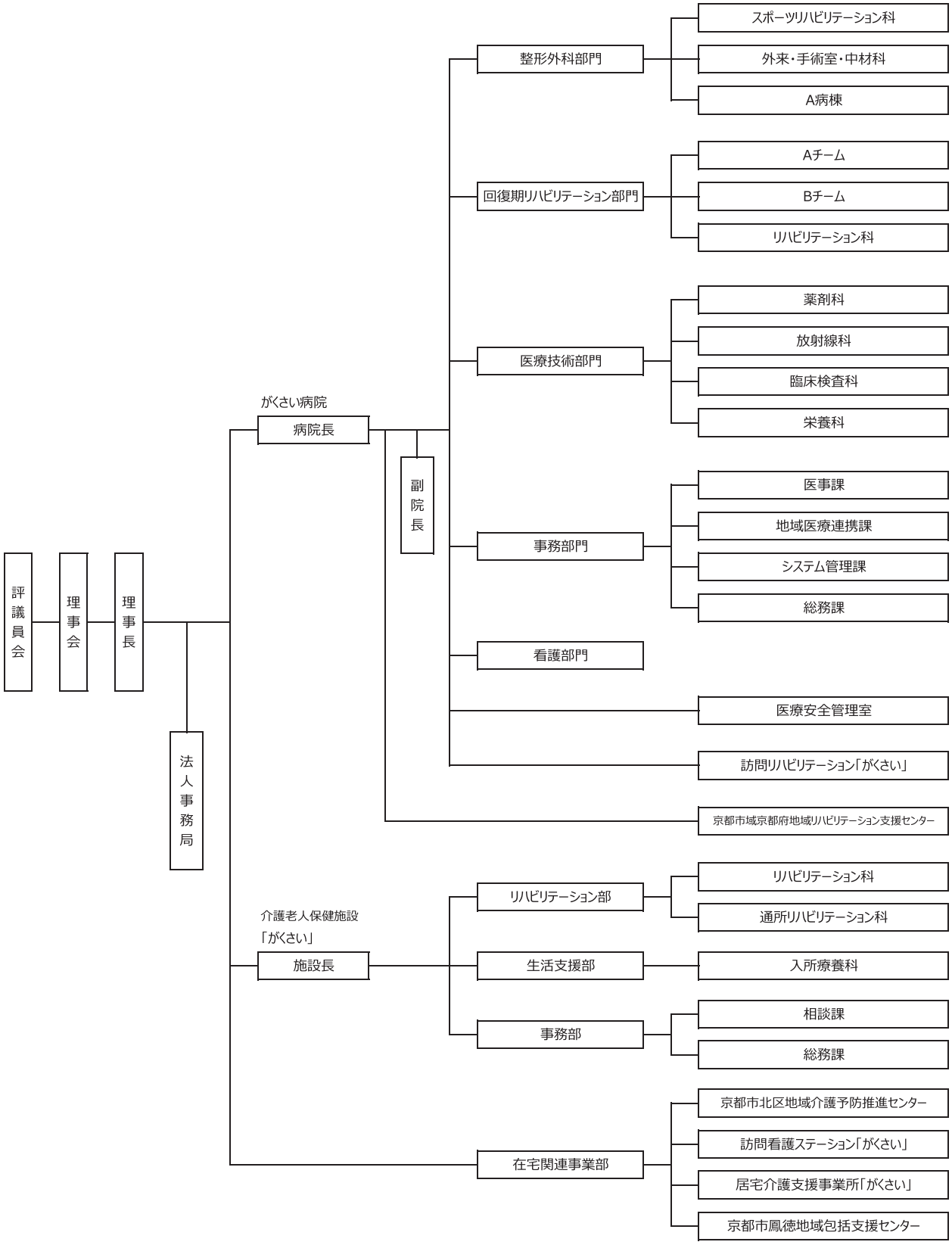
役職名	氏　　名	備　　考
理事長 (代表理事)	森　　洋一	京都府医師会顧問、前京都府医師会会長
副理事長	立入　克敏	京都府医師国民健康保健組合理事長
理　事	久保　俊一	京都府立医科大学大学院教授、公益社団法人日本リハビリテーション医学会理事長
理　事	城守　国斗	京都府医師会副会長、医療法人三幸会理事長
理　事	小西　哲郎	がくさい病院病院長
理　事	土井　　渉	介護老人保健施設「がくさい」施設長
理　事 (常務理事)	竹村　淳一	京都地域医療学際研究所事務局長

役職名	氏　　名	備　　考
監　事	安達　秀樹	安達消化器科・内科医院院長
監　事	近藤　一郎	近藤公認会計士税理士事務所　代表

役職名	氏　　名	備　　考
評議員	田中　彰寿	田中彰寿法律事務所代表
評議員	田中セツ子	元市議会議員、田中セツ子京都結婚塾代表
評議員	加藤　アイ	上京地域女性連合会会長
評議員	髙奥　英路	紫竹自治連合会会長
評議員	柴垣　一夫	中京西部医師会顧問
評議員	山下　　琢	京都府医師会理事、下京西部医師会監事
評議員	斉藤　憲治	右京医師会監事

平成31年3月31日 現在

一般財団法人 京都地域医療学際研究所 組織図



平成31年3月31日 現在

役職者名簿

1. 京都地域医療学際研究所

理事長	森　洋一
事務局長	竹村　淳一

2. がくさい病院

病院長	小西　哲郎	副院長	上島圭一郎		
整形外科部門部長	菅　寛之	回復期リハビリテーション部門部長	前田　博士		
整形外科部門副部長	日野　学				
看護部門部長	稲田祐美子	医療技術部門部長	中井登代美	事務部門部長	吉田　潤
看護副部長	細越万里子				
スポーツリハビリテーション科科長	吉田　昌平	外来・手術・中材科師長	谷田砂登美	リハビリテーション科科長	中西　文彦
A病棟　師長	今井千賀子	B病棟チームマネジャー	角田　公啓	B病棟チームマネジャー	中尾　元美
薬剤科　科長	中井登代美（兼務）	放射線科　科長	吉川　友晴	医事課　課長	林　亮治
地域医療連携課課長	鈴鹿　三郎	総務課　課長	新谷　圭由	システム管理課課長	髙田　賢悟
医療安全管理部門担当科長	山田　美香	訪問リハビリテーション科科長	中西　文彦（兼務）	京都市域京都府地域リハビリテーションセンターセンター長	小西　哲郎（兼務）

3. 介護老人保健施設「がくさい」

施設長	土井　渉				
生活支援部　部長	丹羽智佳子	リハビリテーション部部長	岡　徹	事務部　部長	竹村　淳一（兼務）
事務部部長代理	井上　洋一（兼務）	入所療養科　科長	中島由希子	通所リハビリテーション科科長	井上　淳子
総務課　課長	矢田　圭吾	相談課　課長	井上　洋一		

4. 在宅関連事業所

在宅関連事業部門部長	竹村　淳一（兼務）				
京都市北区地域介護予防推進センターセンター長	藤林　通代	訪問看護ステーション「がくさい」所長	藤原美智子	居宅介護支援事業所「がくさい」所長	下山　照美
京都市鳳徳地区地域包括支援センターセンター長	竹内　卓巳				

※課（科）長色以上を記載している。

平成31年3月31日 現在

年度末職員数

平成31年3月31日現在

	病　院	介護老人保健施設	訪問看護ステーション	居宅介護支援事業所	地域包括支援センター	合　計
医師	9名	1名	0名	0名	0名	10名
看護師	55名	14名	5名	0名	1名	75名
准看護師	4名	1名	0名	0名	0名	5名
薬剤師	4名	1名	0名	0名	0名	5名
管理栄養士	4名	2名	0名	0名	0名	6名
栄養士	0名	0名	0名	0名	0名	0名
放射線技師	3名	0名	0名	0名	0名	3名
臨床検査技師	2名	0名	0名	0名	0名	2名
理学療法士	27名	8名	2名	0名	0名	37名
作業療法士	14名	6名	1名	0名	0名	21名
言語聴覚士	5名	0名	0名	0名	0名	5名
介護福祉士	7名	38名	0名	0名	0名	45名
介護士	7名	18名	0名	0名	0名	25名
社会福祉士	4名	1名	0名	0名	1名	6名
ケアマネジャー	0名	3名	0名	5名	3名	11名
事務員	23名	15名	0名	1名	0名	39名
合計	168名	108名	8名	6名	5名	295名

第2章

がくさい病院

がくさい病院

病院理念

私たちは、医療・介護・福祉の専門分野の知識を結集し、学際的な視野で地域医療に貢献し、患者様を大切にあたたかく包み込み、質の高い日常生活を過ごせるよう、そして患者様の喜びをともに分かち合える医療・リハビリテーションを提供します。

基本方針

1. 安全で良質な医療・リハビリテーションを提供し、地域に信頼される病院を目指します。
2. 患者様本位の医療を実践し、思いやりの心を大切にし、全職員がチーム医療を推進するとともに、明るく楽しい環境でともに歩める医療をつくります。
3. 全職員が日々進歩する医療に対し自己研鑽を怠ることなく、知識の習得と技術の向上を目指し、最新で最良の信頼される医療・リハビリテーションを提供するよう努力します。
4. 地域医療に貢献するため、他の医療機関や保健・福祉・介護システムとの連携を密にして医療を行います。
5. 患者様に納得がいくまで充分な説明を行い、必要な診療情報を開示するとともに患者様のプライバシーを守り、個人情報を保護します。

がくさい病院　中期vision

（策定　平成30年4月1日）

一般およびスポーツ整形外科医療と、運動器スポーツおよび回復期リハビリテーション医療に特化した、安全で質の高い病院を目指す

［強化項目］

1. 良質で安全な医療の向上
   ① 患者目線のチーム医療の強化
   ② 各種委員会機能の強化
   ③ 各種連携の強化
2. 計画的な組織運営の強化
   ① 適切な目標設定による組織の活性化
   ② 適切な時間外労働の管理
   ③ 予算計画に基づく組織運営
3. 組織風土の改革
   ① 人材教育の強化
   ② 人事評価制度の導入
   ③ 職員の意見を募集する仕組みを創設

平成30年度の活動

がくさい病院ではここ5年間は整形外科・スポーツ整形外科診療と回復期リハビリテーション診療を病院の柱として病院運営を行ってきた。さらに診療の質の向上と健全な病院を継続していくために、がくさい研究所の基本理念である「安全で、質の高い、信頼される医療」を目指して、平成30年度は今後5年間の「病院のあるべき姿」としてがくさい病院中期visionを策定した。

平成30年度の病院運営

［診療実績］

整形外科診療では年間延患者数は43,577名，新規入院患者数1,082名，年間手術件数は人工関節置換術や関節鏡下手術を中心に1,235件と高い水準を達成した。整形外科・スポーツリハビリテーションでは年間42,500単位を超える施療を実施できた。

回復期リハビリテーション診療では、専従医師のもとチームマネージャー制による患者中心のチームアプローチを実践した。リハビリテーション総単位数は139,397を実施し、94.8%の病棟稼働率を達成した。在宅復帰率も脳血管疾患で80.5%，整形外科疾患で90.7%と高い水準を達成できた。

［診療体制の充実］

がくさい病院では多職種によるチームアプローチを重視しており、ユニフォームからも意識できるよう平成30年9月に職種毎に統一されたユニフォームへ変更された。専門職によってカラー分けされていて，患者側からも職種が分かりやすくなり、病院内全体的にも明るく、活気のある環境に整備された。

11月に京都府立医科大学整形外科から上島圭一郎医師が副院長として着任し、病院運営、整形外科診療体制の強化を図った。さらに平成31年2月には公益財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価リハビリテーション病院(3rdG:Ver2.0) / 付加機能　リハビリテーション機能（回復期）V3.0を受審した。本受審に際して1年以上前から小西院長のもと各部署の管理職で構成するワーキンググループが組織され、計画的に受審準備が進められることによって、がくさい病院の管理運営、医療安全のさらなる充実に繋がった。（令和元年6月7日付でリハビリテーション病院(3rdG:Ver2.0) / 付加機能リハビリテーション機能（回復期）V3.0の認定を取得した。）

［地域交流活動］

平成30年6月に地域住民向け健康講座として京都商工会議所において、がくさい健康塾を開催した。ロコモティブシンドロームをテーマに京都府医師会健康日本21対策・スポーツ医学委員会委員、日本整形外科学会公認ロコモアドバイスドクターの劉 和輝先生にご講演をいただいた。

平成30年11月には第1回がくさい病院・京都市立病院リハビリテーション科合同症例検討会を開催し，双方の病院から医師、療法士をはじめ60名を超える参加者を得て、交流、意見交換を行い、病院間の連携を深めることができた。

策定したがくさい病院中期visionにもとづき、職員全員の努力により平成30年度の病院運営目標を達成することができた。病院機能評価の受審を経て、さらなる診療体制の充実と病院の理念である安全で、質の高い医療の実践に今後も継続して取りくんでいきたいと考えている。

病院概要

住　　所　京都市中京区壬生東高田町1番9
開　　設　昭和59年1月（平成25年11月移転）
敷地面積　2,406.13㎡
延床面積　4,739.41㎡
構　　造　鉄筋コンクリート造・鉄骨造　地上4階（一部5階）
病 床 数　90床
駐 車 場　18台

施設

・1階　受付・外来診察室・処置室・検査室・放射線科・事務室・売店・京都市域京都府地域リハビリテーション支援センター
・2階　リハビリテーション室（約500㎡）・薬剤室・事務室・会議室
・3階　整形外科病棟 44床（個室8部屋・4床室9部屋）浴室・相談室・食堂・ナースステーション
・4階　回復期リハビリテーション病棟　46床（個室2部屋・4床室11部屋）介護浴室・浴室・相談室・食堂・ナースステーション
・5階　手術室（2室）・厨房

認定

日本整形外科学会研修施設
日本リハビリテーション医学会研修施設
京都府リハビリテーション教育センター 教育指定病院

施設基準

基本診療料

・急性期一般入院料6
・医療安全管理加算2
・医療安全対策地域連携加算2
・感染防止対策加算2
・診療録管理体制加算2
・データ提出加算1
・回復期リハビリテーション病棟入院料1
・体制強化加算1
・退院支援加算1（地域連携診療計画加算有）
・入院時食事療養（Ⅰ）

特掲診療料
・薬剤管理指導料
・CT撮影及びMRI撮影
・脳血管リハビリテーション料（Ⅰ）
・運動器リハビリテーション料（Ⅰ）
・骨移植術（軟骨移植術を含む）（自家培養軟骨移植術に限る）

平成31年3月31日現在

医師体制

院長

小西　哲郎（こにし　てつろう）

日本内科学会　総合内科専門医
　　認定医
日本神経学会　専門医

副院長

上島　圭一郎（うえしま　けいいちろう）

京都府立医科大学　臨床教授
日本股関節学会　学術理事
日本整形外科学会　専門医
　　指導医
　　認定リウマチ医
　　脊椎脊髄病医
日本リハビリテーション医学会　専門医
医学博士

整形外科

部長

菅　寛之（かん　ひろゆき）

京都府立医科大学　客員講師
日本整形外科学会　専門医
　　指導医
日本リハビリテーション医学会　臨床医
日本スポーツ協会　公認スポーツドクター
日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会　関節鏡技術認定医
医学博士

副部長

日野　学（ひの　まなぶ）

日本整形外科学会　専門医
　　指導医
　　認定リウマチ医
　　認定スポーツ医
日本スポーツ協会　公認スポーツドクター

医長

小牧　伸太郎（こまき　しんたろう）

日本整形外科学会　専門医
　　運動器リハビリテーション認定医
　　認定スポーツ医

医師

下村　征史（しもむら　せいじ）

日本整形外科学会　専門医
医学博士

リハビリテーション科

部長

前田　博士（まえだ　ひろし）

京都府立医科大学　臨床講師
日本リハビリテーション医学会　専門医
　　指導医
日本摂食嚥下リハビリテーション学会　認定士
義肢装具適合判定医師

医師

横関　恵美（よこぜき　えみ）

日本リハビリテーション医学会　専門医
　　認定医
日本摂食嚥下リハビリテーション学会　認定士
日本神経学会　専門医
日本内科学会　認定医

医師

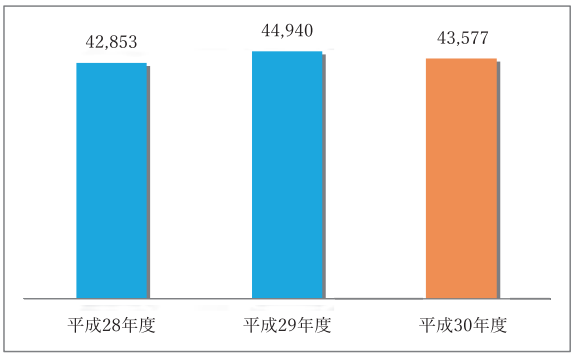
久保　元則（くぼ　もとのり）

日本リハビリテーション医学会　会員

平成31年3月31日 現在

医療統計

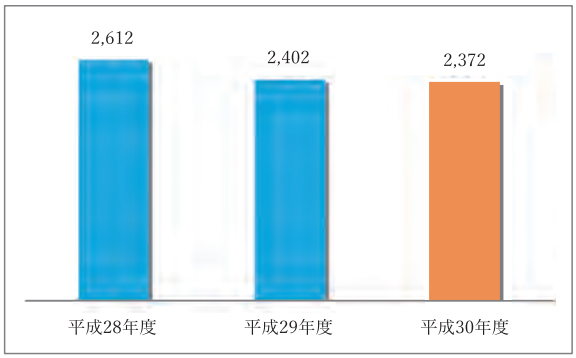
① 外来延患者数



（単位：人）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
外来延患者数	42,853	44,940	43,577

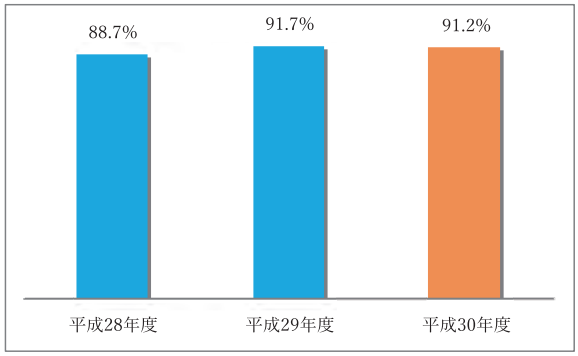
② 新規外来患者数



（単位：人）

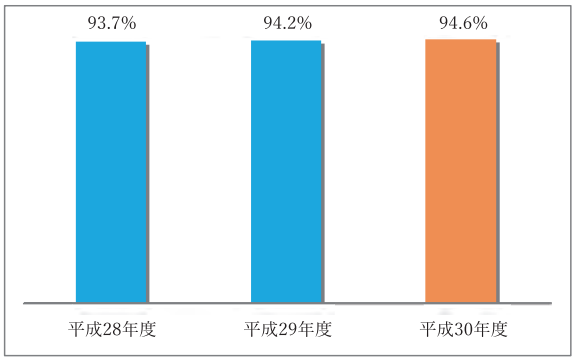
	平成28年度	平成29年度	平成30年度
外来新規患者数	2,612	2,402	2,372

③ 病棟稼働率（A病棟）



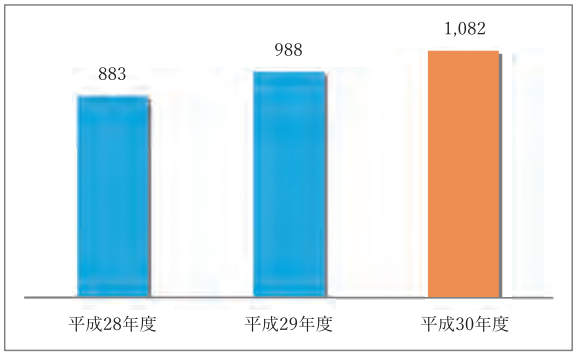
	平成28年度	平成29年度	平成30年度
稼働率（A病棟）	88.7%	91.7%	91.2%

④ 病棟稼働率（B病棟）



	平成28年度	平成29年度	平成30年度
稼働率（B病棟）	93.7%	94.2%	94.6%

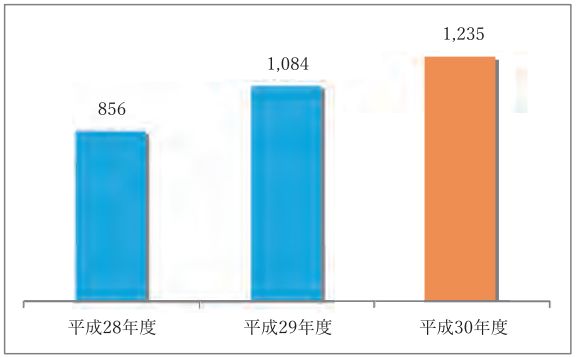
⑤ 新規入院患者数



（単位：人）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
新規入院患者数	883	988	1,082

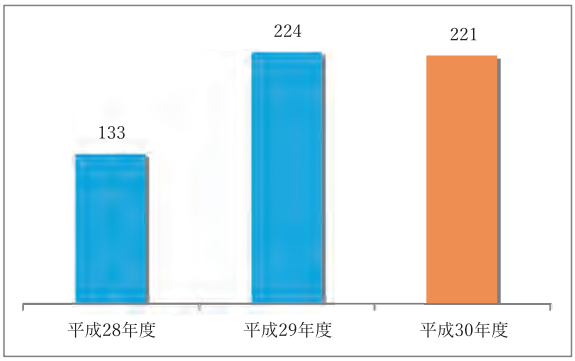
⑥ 年間手術件数



（単位：件）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
年間手術件数	856	1,084	1,235

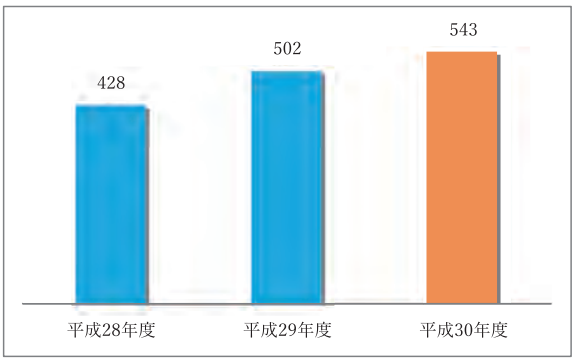
⑦ 人工関節置換術（膝，股関節）



（単位：件）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
人工関節置換術	133	224	221

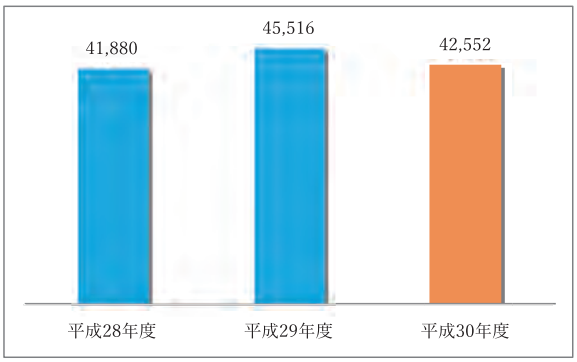
⑧ 関節鏡手術



（単位：件）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
関節鏡手術	428	502	543

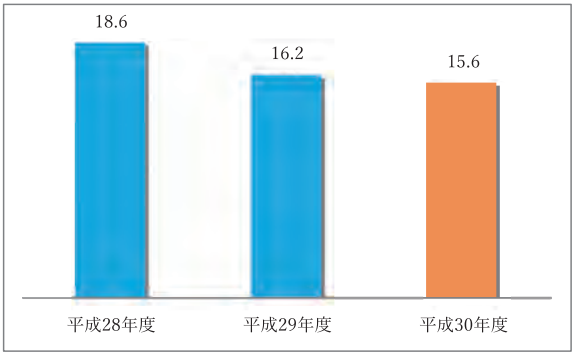
⑨ リハビリテーション総単位数：整形外科リハビリテーション



（単位：単位）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
整形外科リハビリテーシ	41,880	45,516	42,552

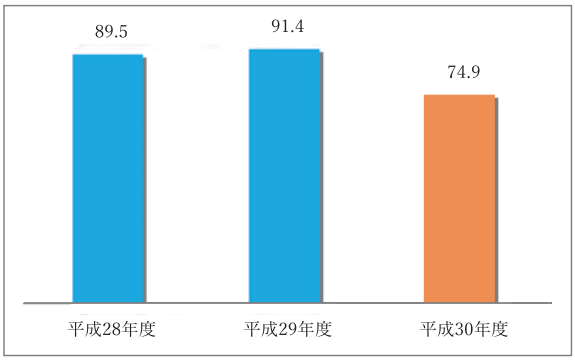
⑩ 平均在院日数：A病棟（整形外科病棟）



（単位：日）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
平均在院日数	18.6	16.2	15.6

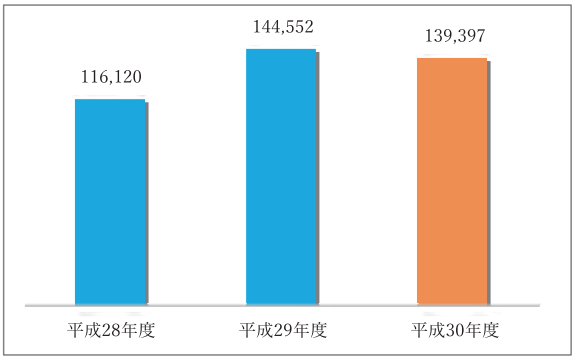
⑪ 平均在院日数：B病棟（回復期リハビリテーション病棟）



（単位：日）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
平均在院日数	89.5	91.4	74.9

⑫ リハビリテーション総単位数：回復期リハビリテーション



（単位：単位）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
回復期リハビリテーショ	116,120	144,552	139,397

⑬ 在宅復帰率：回復期リハビリテーション病棟（疾病区分別）

	脳血管疾患	整形外科疾患	廃用症候群他
平成28年度	82.9%	91.7%	55.6%
平成29年度	79.3%	96.2%	85.7%
平成30年度	80.5%	90.7%	85.7%

⑭ 患者1人1日リハビリテーション単位数：回復期リハビリテーション病棟

（単位：単位）

	脳血管疾患	整形外科疾患	廃用症候群他
平成28年度	6.8	6.6	6.7
平成29年度	8.4	8.7	7.6
平成30年度	8.7	8.8	6.8

⑮ リハビリテーション総単位数：回復期リハビリテーション病棟

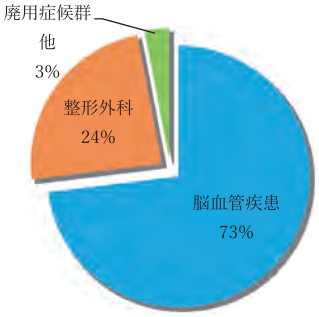
（単位：単位）

	脳血管	整形外科	廃用症候群他
平成28年度	81,638	28,356	6,042
平成29年度	108,773	30,362	5,417
平成30年度	101,194	33,632	4,442

⑯ 施設基準項目：回復期リハビリテーション病棟

	平成29年度	平成30年度
ADL改善 重症者割合	45.0%	55.0%
FIM	－	39点

⑰ 疾患別割合（平成30年度）



	脳血管疾患	整形外科	廃用症候群他
疾患別割合	73%	24%	3%

整形外科部門

記載者：菅　寛之

整形外科部門
　部門長：菅　寛之　　副部長：日野　学
スポーツリハビリテーション科
　科長：吉田　昌平　　科長補佐：相馬　寛人　　主任：金村　朋直、吉田　純
A病棟
　師長：今井千賀子　　主任：鈴木貴美子
外来手術室中材科
　師長：谷田砂登美　　主任：進士　香織

［方針］

『各専門職は整形外科チームの一員として、高度かつ良質な医療技術をもって全人的医療を提供する』

［主な活動］

平成30年度の整形外科部門は，前年度同様に上記の部門方針を掲げ，医局・スポーツリハビリテーション科・A病棟・外来手術室中材科が一体となって方針の実現に努めた。当部門の組織体制は，4月から整形外科部門　副部長・A病棟　看護師長及び看護主任・スポーツリハビリテーション科主任2名・外来手術中材科　看護師長及び看護主任を新たに選任し体制を一新してスタートした。選任された者は，新しい役割となり不安も大きかったと考えるが，大きなトラブルもなく，それぞれの役割を果たしてくれたと考えている。

医局体制については，昨年度に引き続き医師4名体制でスタートしたが期中において市丸医師が異動となり，一時期は3名体制の難しい時期が続いた。市丸医師の異動は非常に残念ではあったが平成31年1月より下村医師が着任し以前の4名体制をなんとか確保することができた。下村医師は，患者や診療に対して人一倍真剣に取り組んでおり今後の活躍に期待をしている。また11月からは副院長として上島先生も着任され，整形外科部門は一層活性化されたと考えている。

手術件数は医師体制が少なかったにも関わらず年間1,235件（前年度1,084件・伸長率114%）を実施することができた。この件数は前年度に記録した過去最高実施件数を大きく更新するものである。なかでも人工関節置換術（膝）の手術件数が京都府で最も多い病院として雑誌に紹介されたことは，大きなモチベーションとなっている。これは医局及び手術室スタッフをはじめとする整形外科部門の職員全員が一丸となって取り組んだ成果であり，その尽力に心より敬意を表します。またこの件数を実現するために御支援を頂いた京都府立医科大学の運動機能再生外科学・整形外科学及び麻酔科学教室にこの場をお借りして御礼申し上げたい。

A病棟は，病棟改修工事により4床増床となった。急性期病床が増床となることは，現場職員にも大きなプレッシャーと負担であったと思うが，平成30年度の1日平均入院患者数は37.0名（前年度34.4名・伸長率108%）となり前年度より増加した。新看護師長と主任の下で看護スタッフ全員が尽力してくれた結果だと考えている。スポーツリハビリテーション科においては，職員の産休・育児休業により欠員の状態が続いたが，他リハビリスタッフの協力により患者リハビリ単位数は大きな減少をすることはなく患者治療体制は維持されている。また外来看護部においては，新看護師長と主任の下で，前年度からの課題であった手術室と外来看護の協力体制が進展され，外来と手術室でお互いに業務フォローする良い関係が構築されている。

このように平成30年度の整形外科部門は，難しい局面もあったが新しい体制の中で職種に関係なくチームワークを発揮し，昨年度を上回る活動ができたと考えている。

A病棟

部　門：整形外科部門
記載者：今井千賀子

師長：今井千賀子　　主任：鈴木貴美子

［年間目標］

①安定したベッドコントロールを確保し、部門運営に貢献する
②専門職業人として、安全・安楽なケアを実施し、患者満足度があがる

［主な活動］

整形外科部門の強化項目「良質な看護ケアの提供と安定したベッドコントロール」を目指し、A病棟では上記の年間目標を掲げ、職員一丸となり日々の看護ケアに努めた。

手術件数増加に伴い、多くの入院患者様を迎えるため、病棟では各部署と連携をはかりながら、病床稼働率目標値80％を達成できるよう、日々調整に努めた。結果、A病棟の平均病床稼働率は、91.2％（前年度91.7％）、平均在院日数15日（前年度16.2日）となり、目標を達成することができた。これは、整形外科各部署や各部門の協力が得られた事、何よりA病棟全職員一人一人が、部門運営に貢献するという意識を持ち、日々の業務に努めた結果であると考える。しかし同日入退院により、患者様には退院日、朝9時には部屋を空けて頂くこととなった。この件の説明を、入院日に病院の窓口である医事課からと、病棟に来られてからも看護師からおこなった。また、退院日の前日にも再度、患者様へ説明したことで、患者様の満足度を下げることはなかったと考える。

安全・安楽第一に、良質な看護ケアを実践するために、定期的な学習会や伝達講習を開催し、専門職業人としての知識・技術・を各自が研鑽した。また、職員の提案を取り入れ、手術件数増加に伴い夜勤看護師を3人体制にした等、その他業務の見直しをおこなった。次年度も安全・安楽で良質な看護ケアを提供できるよう、努力していく。

インシデント件数は、61件／年。そのうち薬剤に関するものが、29件／年とインシデントの約半数を占め、昨年度に引き続き件数は多かった。与薬業務には多くの医療従事者が携わっているが、看護師のエラーは防護されにくく、与薬課程の中でも最もヒューマンエラーの危険性が高いと思う。薬剤に関連した看護事故を防ぐにはどのようなシステム改善や看護業務が必要かを考察し、安全な医療提供を目指して、次年度も取り組んでいきたい。

スポーツリハビリテーション科

部　門：整形外科部門
記載者：吉田　純

科長：吉田　昌平　　科長補佐：相馬　寛人
主任：金村　朋直、吉田　純

［方針］

『質の高い運動器リハビリテーションを提供する』

［主な活動］

【体　　制】

平成30年度は理学療法士10名で業務を行っていた。
理学療法士1名が育休中であるため、実際は9名体制であった。

【業務実績】

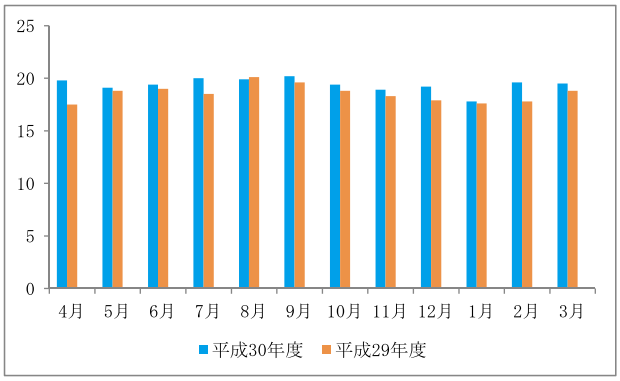
月あたりの単位数：3548単位（3400）
各セラピストにおける月あたりの単位数：19.4単位／人（18）
離脱率：4.3%（＜10）　　※　括弧内は目標値

前年度と比較すると、人員が1名少ないため、運動器リハビリテーションの実施単位数は減少している。一方で、各セラピストにおける単位数は増加しており、セラピスト各々が不足している人員数を補っている。また、前年度に引き続き、質の高いリハビリテーションを提供するため、十分な説明を行い患者様個別のリハビリテーションを実施することに努めた。その結果、離脱率は前年度の6.3%より2.0ポイント減少し、平成30年度離脱率は4.3%であった。セラピストあたりの実施単位数は増加しているにもかかわらず、離脱率が減少しているということは患者様に対し、より質の高いリハビリテーションが提供できたのではないかと考える。

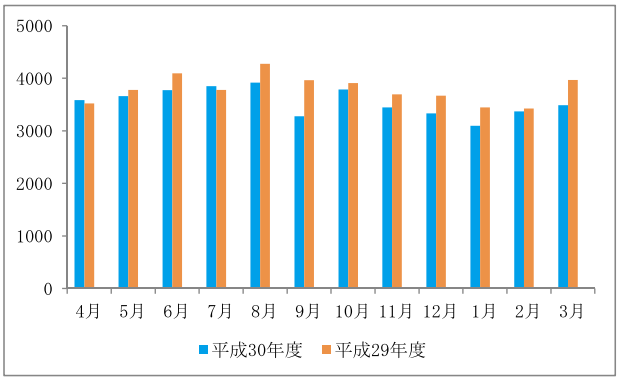
科内では全員が協力し、リハビリテーション室内の患者様全体を把握することで、平成30年度アクシデント発生件数は0件であった。しかしながらインシデントは4件発生しているため、今後も引き続きインシデント発生件数減少を目標としていく。

理学療法士個々としては、研修会・学会に参加することで治療における知識・技術を研鑽し、他部署との連携をはかりチームとして患者様一人一人によりよいリハビリテーションを提供できるように努めている。

各セラピストにおける月あたりの単位数



月あたりの単位数



外来・手術室

部　門：整形外科部門
記載者：谷田砂登美

師長：谷田砂登美　　主任：進士　香織

[年間目標]

①チーム医療を行うためのシステムを構築し病院経営に貢献する
②安全で質の高い看護を提供する

[主な活動]

平成30年度の目標①に対する取り組みとして、まず「外来・手術室看護師の一体化」を目指しました。

昨年度は手術室スタッフが中心となり行っていた、術前オリエンテーションを今年度より全ての看護スタッフで行いました。また部署会を1回/月行い情報を共有すると共に、勉強会を開催することで個々の知識を深める事ができ、外来での手術オリエンテーション時に、より深い説明が出来る様になりました。

また1回/週の整形外科カンファレンスでは、外来での患者さまとの関わりの中で得た情報を提供することで、チーム医療や継続看護に貢献できたと考えています。

この活動を今後も続けていき、より連携のとれたチーム医療体制の構築を目指したいと考えています。

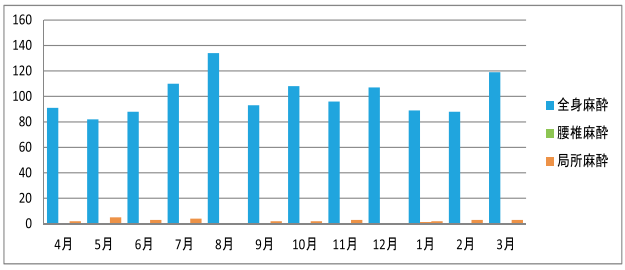
次に②に対する取り組みとして、「エビデンスに基づいた安全な看護の提供」でインシデントレポート提出数5枚/週をあげていました。しかし、インシデントレポートの提出件数は前年度と比較して急増したとは言いがたい数字でしたが、提出された全てのレポートに対しては、複数人で検証したのちに対応策をたて、カンファレンスで発表しました。全てのスタッフが共有することで、同種のインデントの発生が予防できました。

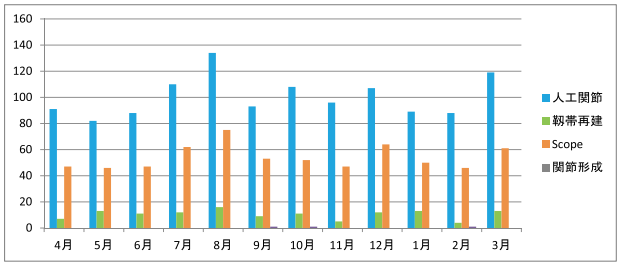
今年度は他のスタッフに促されて記入することが多かったレポートですが、提出する意義や必要性をスタッフが理解して自らが進んで記入出来る様に意識づけて行かなければならないと考えています。そのためには、検証報告や分析結果のフィードバック方法、タイミングも考える必要があり、次年度の課題です。

一番の目標に掲げていた病院経営への貢献では、手術件数が目標件数である840件を大きく上回り、1235件行うことが出来ました。看護師は直接手術件数を増加させることは出来ませんが、チームの連携や情報の共有により達成できたものと考えます。今後も増加すると思われる手術件数ですが、より安全で質の高い医療が提供出来るよう、スタッフ一人一人のスキルをアップし、他部署との連携強化、スムーズな対応を目標として、さらなる手術件数の増加に貢献していきます。

[活動データ]

年間手術件数





回復期リハビリテーション部門

記載者：前田　博士

部長：前田　博士
チームマネージャーA：角田　公啓　　チームマネージャーB：中尾　元美
科長：中西　文彦　　課長補佐：髙野　麻美、森本　雅之
主任：小林　剛、宮本　宗明

［方針］

『京都府における回復期リハビリテーション病棟のモデルとして、チームアプローチを強化し、質の高いリハビリテーションおよびケアを提供する。』

［主な活動］

平成30年度は部門方針の作成からスタートした。京都府リハビリテーション医学教育センターの教育指定病院であり、リハビリテーション科専門研修を実施する病院として府内トップレベルを目指す意図を込めて作成した。

今年度も京都府立医科大学リハビリテーション医学教室から大きな支援を受けた。新たに三上教授に外来を週1回ご担当いただくことになった。平成29年度に引き続き沢田講師に臨床面と教育面での支援を受けた。年度末には横関医師がリハビリテーション科専門医を取得した。リハビリテーション科専門医4名による手厚い診療体制が整った。専攻医であった根本医師は11月で退職し、新たに専攻医の久保医師を迎えた。

部門として今年度の大きな実績の一つは病院機能評価のための準備に取り組んだことである。昨年度の時点では、システムやマニュアルの配備など、病院機能評価の認定を受けるには不足部分が多く、当部門内だけでも問題は山積していた。しかし、角田TMを中心として担当者らが一丸となって、かつ根気よく問題に取り組めたことで、最終的に認定を得ることができた。輝生会からの出向スタッフのアドバイスも多いに参考になった。

日常の診療としては、回復期リハビリテーション料I算定のための最後の障壁であった実績指数37以上を達成できたことが大きかった。FIMの評価を正しく行えたこと、入院中の患者の活動を最大限高めることができたこと、そして入院期間を短縮できたことが実績指数の向上につながった。これらは、チームアプローチの強化と質の高いリハビリテーションとケアが行えていた根拠として捉えることができる。6月には病棟の改修工事があり、食堂スペースを拡張し、調理訓練に使用できる高さ調整式のキッチンを配備することができた。これらのスペースは日常活動だけでなく作業療法にも有効利用でき、患者の活動をより高めるための環境が整った。またTOYOTAのWelwalkを導入し歩行訓練を効率的に進めることができるようになった。4月から輝生会からの出向スタッフ数は大幅に減り、また最後の1年となった。軸となるべき新たな役職者の選定と教育に髙野課長補佐らと共に取り組み、次年度以降の体制を整えることができた。

第55回日本リハビリテーション医学会学術集会、第5回京都リハビリテーション医学研究会学術集会などで多数の研究成果を発表した。次年度は、京都府立医科大学との共同研究をはじめ、本年度以上の発表を予定している。

京都府リハビリテーション教育センターの教育指定病院として計4名の医師の実施研修を受け入れ、京都府立医科大学リハビリテーション医学教室を通じて、学部学生の実習と初期研修医の研修を多数受け入れた。11月には京都府立医科大学リハビリテーション医学教室主催で、京都市立病院リハビリテーション科との合同カンファレンスを院内で実施した。

平成30年度は、工事、新機器の導入、新たな取り組み、機能評価受診、新体制への移行と昨年度以上の変革の年であった。次年度は京都府立医科大学との連携をとりながら、体制をより熟成させたものしていきたい。

B病棟

部　門：回復期リハビリテーション部門
記載者：中尾　元美

Aチーム	チームマネージャー：角田　公弘	主任：吉田　幸世
Bチーム	チームマネージャー：中尾　元美	主任：津野真奈美

[年間目標]

『チームアプローチを強化し、質の高いリハビリテーション及びケアを提供する』

[主な活動]

今年度の目標は、診療報酬改訂後の入院基本料2を1（実績指数37点以上）にしていく事と、病院機能評価を受審し認定を受ける事であった。

病院機能評価を受審する事が決まった時は不安もあったが、出向という形で協力していただいていた輝生会のスタッフと一緒に、病棟全体が同じ目標に向かって一丸となり組織体系を築き、多くの業務改善に取り組む事ができ認定につながった。

入院基本料1の条件を満たすために取り組んだ具体的な内容は、①入退院調整②入院期間の短縮③FIM評価の制度向上である。入退院調整に関しては、1日1入院1退院を行うため、入退院時間の固定化や同ベッドでの入退院対応が出来るように処置室に待機ベッドを導入した。

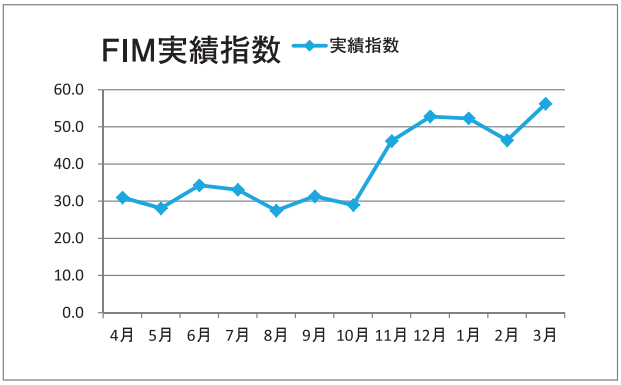
入院当初から、入院見込み期間を厳密に評価し退院時期の目標を明確にすることで、個々のスタッフも入院期間を意識した介入を行うようになり、入院期間の短縮へとつながった。

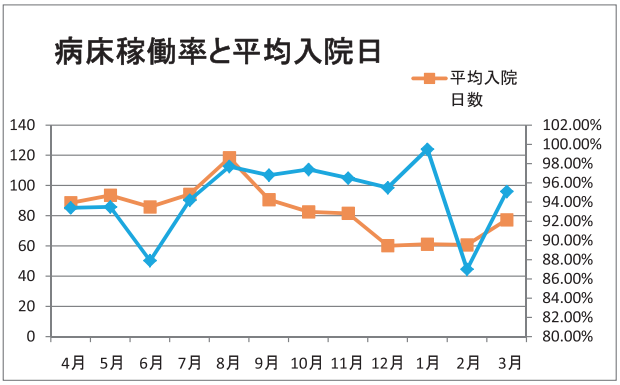
またFIMについて勉強会を行い個々の評価制度を上げるとともに、カンファレンスや実績判定会議で実際の能力が正しく評価されているかを確認する事で、FIM利得を上げていくことができた。

①～③の取り組みにより、入院期間は80日以下となり、病床稼働率は90%前半であったものが90%後半になることが増えてきた。実績指数は30点前後であったものが、40点後半から50点台となり、結果、平成31年1月に入院基本料1の条件を満たす病棟へと成長する事ができた。

チームアプローチの強化に関しては、ケアワーカーのチーム参加が不充分であり、ケアワーカーの業務見直しや教育体制の確立が次年度への課題として残っている。また、患者の高齢化だけでなく、急性期病院でも入院期間が短縮されている事から、1日3時間（9単位）のリハビリテーションを提供していく中で、全身状態の管理にも注意を払いながら介入していき、周辺の他病院・他施設と連携を図っていく事が重要となってきている。

3年にも及ぶ輝生会スタッフの出向期間が終了し、来年度はその期間で作り上げてきたものを、がくさい病院のスタッフが維持だけでなく、がくさい病院らしさを加味しながら、回復期リハビリテーション病棟として質をさらに向上させていきたい。





リハビリテーション科

部　門：回復期リハビリテーション部門
記載者：中西　文彦

科長：中西　文彦　　科長補佐：高野　麻美　　科長補佐：森本　雅之
主任：小林　剛　　主任：宮本　宗明

[年間目標]

『回リハビリテーション病棟チーム制の充実と専門性を高めることで、質の高いリハビリテーションとケアを提供する』

[主な活動]

平成30年春にはPT2　OT4　計6名が入職および復職した。訪問リハビリ兼務者と併せ、PT17　OT15　ST6の総勢38名体制でスタートした。年度内に2名の入職と6名の退職があった。

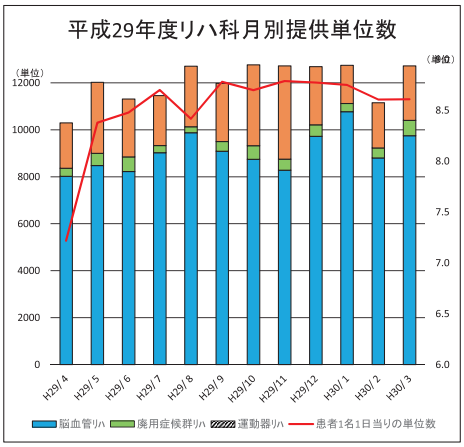
質の高いリハビリテーションを提供するには、集中的な関わりにより早期に機能回復とADLの自立が求められる。適切な方法で全職員が病棟生活に関わるにはチームアプローチが重要になる。その為にはカンファレンスでの計画が大切であり、昨年度サブリーダー制が導入された。リハビリテーション科医がリーダーとしてケース管理を行う中、カンファレンス前にサブリーダーが他職種のアプローチ状況を確認、カンファレンスでは改善の見込みを考慮しながらチームとして方針出すことが重要である。主任は各チーム内の業務全般の把握、カンファレンス前には各職員から相談を受けてアドバイスすることが出来てきた。

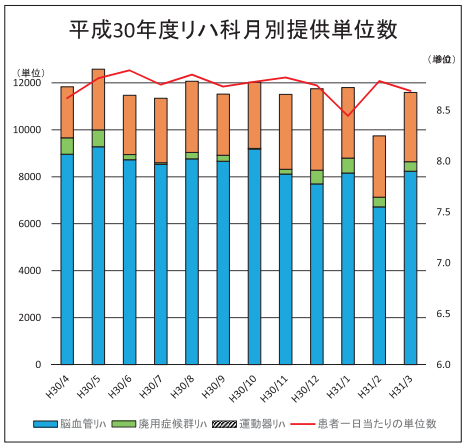
各療法士は20分1枠、一日20枠の管理で直接・間接業務を行い、リーダー、主任、チームマネジャーと相談しながらチーム医療に携わっている。その中で担当ケースのサブリーダーを積極的に担うことでチーム医療に貢献している。今年度サブリーダーを担当できなかった療法士も徐々に視野を広げ、多くの療法士がサブリーダーを担うことが期待されている。

日頃の業務を遂行する中での疑問を解消する目的で計38回の研修会へ参加した。また、10演題の学会発表が行われた。出張後には伝達講習に努め、参加していない職員に伝達することで更に理解を深め専門知識を高める職員も増加している。

平成31年2月の病院機能評価を受審に向けて、年度当初より各種マニュアルの再確認とルールに基づいた実施を図り、来年度への体制作りを行った。輝生会からの出向最後の年でもあり多くのことを学んだ。平成31年度は新体制をより充実させることが求められる。

[活動データ]





看護部門

記載者：稲田祐美子

看護師長：稲田祐美子　　副看護部長：細越万里子

［方針］

『専門職として個々の能力を発揮しチーム医療に貢献する』

［主な活動］

今年度は「病院機能評価受審」という大きな目標を見据えた1年の始まりであった。副看護部長、医療安全管理室長に看護師長が就任し看護部の体制を強化した。新師長が部署を担う事となり、前任者が一定期間フォローする体制で臨み一任する事とした。病院機能評価にあたっては、関連する項目のマニュアル見直し・作成、部署環境の整備が主な取り組みであり担当者を中心に実施した。日常的に行っていた業務内容の振り返りや新たに確認出来た内容もあり、担当者自らが学ぶ機会となった事やスタッフ間での共有する場面も多く、各部門のチーム力をあげる手段となり成果が得られた。

今年度の部門方針の強化項目は、臨床実践能力の向上、信頼される看護・ケアの実践、ホスピタリティの向上を掲げていた。各部署に新規・中途採用にて看護師8名（新人看護師3名）、介護福祉士1名、看護補助者3名を迎えた。新人看護師はプリセプター、主任を中心にした指導体制、看護大学での研修、ローテーション研修等を取り入れ、定期的な振り返りを実施し1年間サポートを経て2年目看護師としての成長を確認するに至った。また、部門ごとの勉強会実施、認定看護師研修・外部研修への参加等、自己研鑽による個々の学びと専門性の知識向上を目指す意欲的な取り組みがあったが、中堅クラスの研修参加が低かった点は検討が必要な課題である。

看護部における「安定した人員・人材確保」は難しい状況であるが、今年度の退職率8.4%（看護師3名・ケアワーカー3名）と前年度より1/3の減少であった。新規採用職員も多数いる中、各部署での研修やOJTが活かされたこと、働きたい専門分野が明確であったこと、目標管理によるスタッフとの面談により、悩みや思いを把握し対応することで、解決策を見いだし見守れたことなどが職員定着へつながった。

部門ごとの目標として、回リハ部門では「入院基本料1」、整形外科部門では「手術件数」「稼働率・在院日数」「看護必要度」の確保を目指し、部門スタッフをはじめ、医事課や連携課などの情報共有・調整による業務遂行によって成果が得られ、連携システム構築の基盤を築く一歩として関われたといえる。

ホスピタリティの面では患者様、ご家族からの意見をいただき、自身、スタッフ間で振り返り、「医療接遇」について考える機会が得られ、「寄り添う」「配慮する」「良好な関係性」を維持するには、常に意識した態度でなければ果たせない事であることを学びとして共有することができた。

今後、倫理観に基づく自律的な看護実践が行える意識を高め、専門職としての誇りをもち使命感を全うできる環境つくりを目指し、貢献したいと考えている。

医療技術部門

記載者：中井登代美

薬　剤　科	部長：中井登代美	主任：古川吏恵美
放射線科	科長：吉川　友晴	主任：恒吉　克也
臨床検査科	主任：山田　浩弓	
栄　養　科	主任：中平　美紀	

［方針］

『安全で質の高い専門技術の提供と支援』

～　専門性を活かそう！　～

［強化項目］

・専門職としての質の向上
・他職種と連携し、チーム医療を推進する
・業務やマニュアルを整備し、標準化・効率化をめざす

［主な活動内容］

薬剤部・放射線科・臨床検査科・栄養科を統合し医療技術部としての運営を平成29年より開始し二年目になり、異なる分野の少人数部署からなっているが、協力し合いチームワークよく行動できている。

平成30年は外来患者数・手術患者数増加にともない業務実績が増加し、また昨年度末に日本病院機能評価を受審することが決まり、受審に向けての年であった。

各部署で評価項目ごとの現状把握を行い、部署単独、部署をこえる問題点を把握し、質の改善のために業務の標準化・効率化し、マニュアルを整備した。新しい業務としては11月から貯血式自己血輸血を開始したためマニュアルと流れができた。受審に向けての会議や病院機能を改善するワーキンググループが多く設置され、会議伝達や課題を取り組むことで、部署間の連携が更によくなり、この経験が職員の自信になったように感じた。

教育研修においては各種会議の増えためか、薬剤科内勉強会は増加したが、外部研修への参加は減少した。

次年度は人材育成・専門分野の質向上のためにも積極的に参加し、 良質な医療の実践のために質の向上と医療安全に取り組んでいきたい。

薬　剤　科

部　門：医療技術部門
記載者：中井登代美

部長：中井登代美　　主任：古川吏恵美

［年間目標］

『薬物療法の有効性と安全性を確保し、他職種と連携し最適な医療を提供する』

【勤務体制】

常勤薬剤師4名体制

【平成30年度　主要業務実績】

処方箋枚数：内服・外用-16385枚　　注射-5823枚
薬剤管理指導件数：943件
持参薬鑑別件数：851件
持参薬処方：924枚
がくさい老健調剤：3736枚
薬剤科内勉強会：10回

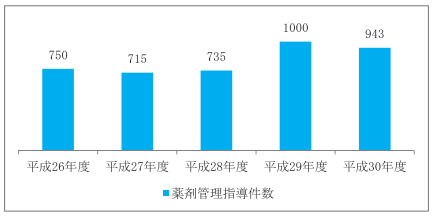
平成30年度は病院機能評価受審に向け、環境・マニュアルの整備・回復期病棟業務の充実が主な取り組みとなった。

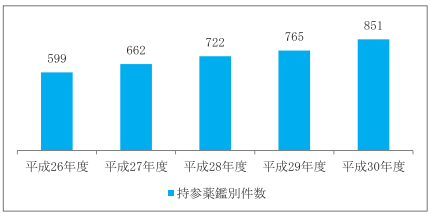
7月に調剤システム、全自動錠剤分包機、省スペースで設置可能な電子天秤一体型監査システム、薬袋プリンタ、医薬品情報システム、薬剤管理指導支援システムに更新し、より安全で効率的な環境になった。この更新にあわせて、昨年度末から計画的に20品目を超える使用頻度の高い採用薬を先発品から後発品や口腔内崩壊錠に変更することができた。

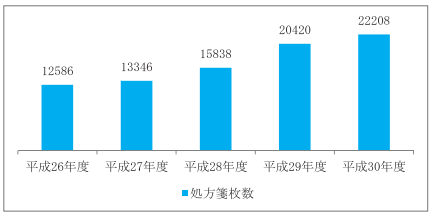
各種実績は整形病棟の手術患者増加にともない、処方箋枚数は平成26年度の1.76倍、持参薬鑑別は1.4倍になり、調剤を含む持参薬関連業務が大幅に増大した。

回復期リハビリテーション病棟においては、入院判定会議資料の処方内容や非採用薬の代替薬、疑問点をチェックしている。また入院時には合同評価に参加し、患者・家族等に情報を聞き取りし、初回カンファレンス、退院時服薬指導などの薬剤師業務を行うことができた。更に対象者の増加を目標に取り組んでいきたい。

［活動データ］







放射線科

部　門：医療技術部門
記載者：吉川　友晴

科長：吉川　友晴　　主任：恒吉　克也

［年間目標］

『専門知識を深め、有用な画像を提供することで、チーム医療に貢献する。』

［主な活動］

【体　　制】

常勤技師２名、非常勤技師１名で対応してきたが、検査数の増加に伴い、平成30年２月より常勤技師を増員し、３名体制で行っている。

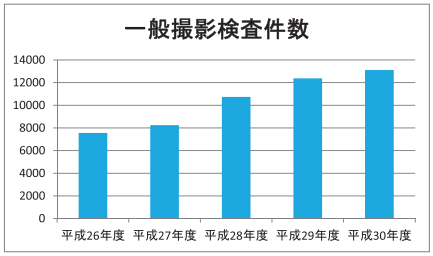
【業務実績】

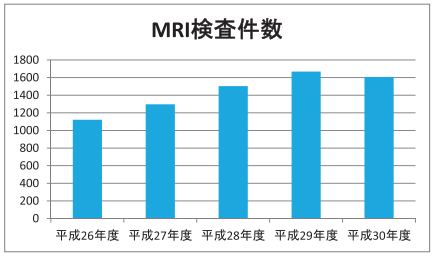
26年度：一般撮影　7559件　MRI　1121件　VF　45件
27年度：一般撮影　8246件　MRI　1297件　VF　58件
28年度：一般撮影　10737件　MRI　1503件　VF　60件
29年度：一般撮影　12377件　MRI　1668件　VF　105件
30年度：一般撮影　13118件　MRI　1607件　VF　79件

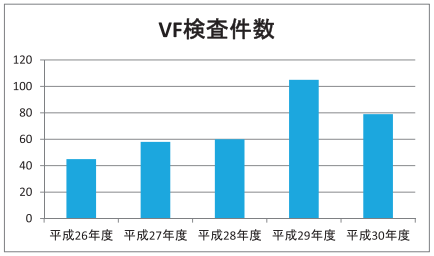
いずれの検査も平成29年度までは増加していたが、平成30年度になり、MRIとVF検査数が初めて前年度を下回った。また、平成28年１月には、Ｘ線TV装置の老朽化に伴い、新装置へと更新した。以前は、超音波により骨密度の測定を行ってきたが、新装置導入によりDEXA法による腰椎・股関節での測定が可能となった。平成29年度は613件，平成30年度は699件の骨密度測定を実施した。平成30年５月には一般撮影装置をCR装置からDR装置へと更新し、高速で高解像度の撮影ができるようになった。

「専門知識を深め、有用な画像を提供することで、チーム医療に貢献する。」をモットーに、日々検査を実施している。

今後も患者様には丁寧な対応を心がけ、チームの一員としての自覚を再認識し、また撮影技術の向上を目指して放射線科一同努力していきたい。







臨床検査科

部　門：医療技術部門
記載者：山田　浩弓

主任：山田　浩弓

［年間目標］

『チーム医療の一員として患者さんの安全につとめ、正確な結果を迅速に臨床に報告する』

［主な活動］

チーム医療の一員として患者さんの安全に努め、正確な結果を迅速に臨床に報告することを主軸に、今年度は病院機能評価受審に向けての課題にも取り組み、臨床検査科の業務の標準化と質の維持に努めた。

主な活動内容は、日常業務面では、機能評価に向けたマニュアルの見直しと改訂を行った。

安定した精度の高い検査結果の提供に対し、外部精度管理として6月に日本臨床検査技師会精度管理、11月には京都府臨床検査技師会精度管理へ参加した。

検査機器の管理・保守について、各検査機器のチェック表を整備し、日々の点検・保守をルーチン化したことにより、機器の異常にいち早く気づき、保守にとりかかれるように一層力を入れて取り組んだ。

超音波検査装置の更新を30年11月に行い、従来よりも画像精度が上昇し、より迅速に正確性の高い結果報告が出来る様に努めた。

チーム医療では、リハビリ病棟における初回カンファレンス・感染防止対策委員会が実施する院内ラウンド参加を継続し業務として定着させ、検査値の報告、周知だけでなく意見や提案も出すことが出来た。

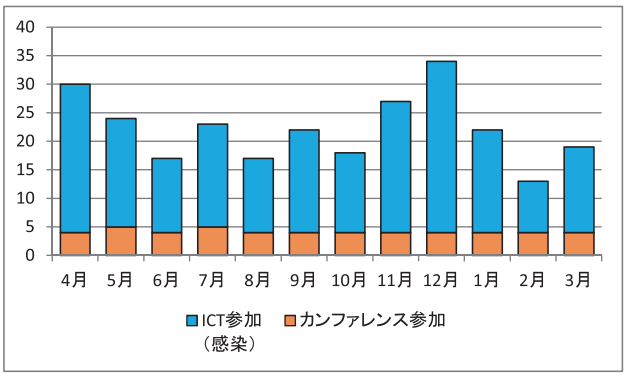
感染管理においては、検査毎の手指消毒のタイミングの標準化を行ってきたことが各スタッフの意識改善につながり、安定して感染防御への関心を維持することが出来た。

医療安全については、検査室内の掲示や案内、電子カルテトップページへの容器についての注意事項の掲示や細菌検査依頼書の記入方法の周知など、全てのスタッフがわかりやすく、且ついつでもすぐに確認が出来る情報の提示を行った。情報の不足がインシデントにつながらないように、すべてのスタッフからの要望や意見を蓄積し、業務フローチャートの見直しや、新しい情報の発信と更新を引き続き行っていきたいと考える。

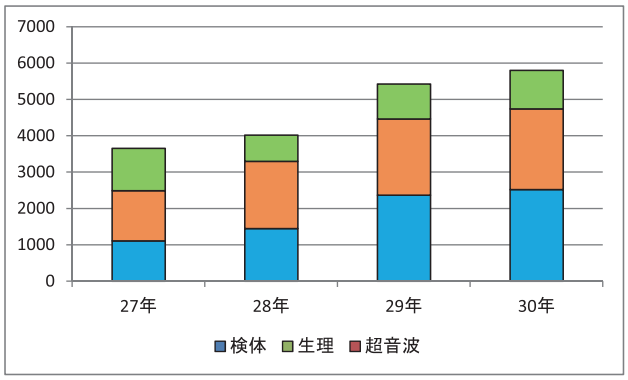
スタッフ一人一人が最新の専門知識・技術の習得、アップデートを行うために、一人当たり年2回以上、学会・研修会・研究会へ参加した。参加後、スタッフ間での伝達講習を実施し、知識の共有を行うことが出来た。

各検査種別検査件数

ICT/カンファレンス参加実績



検査総数



栄養科

部　門：医療技術部門
記載者：中平　美紀

主任：中平　美紀

［方針］

『リハビリテーションに効果的な食事の支援』

［主な活動］

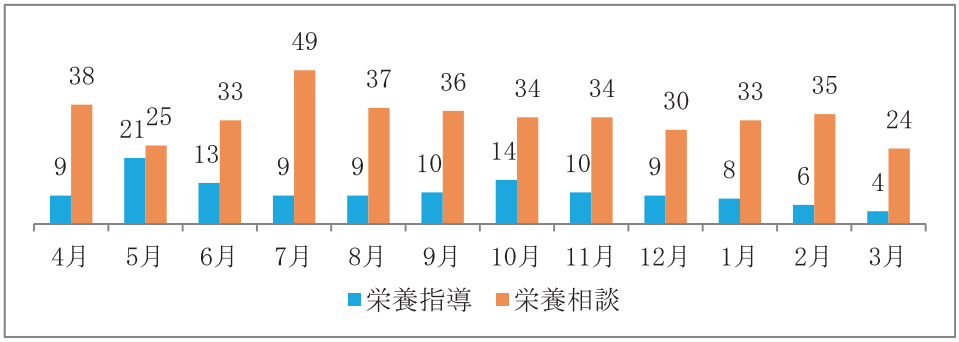
【体制】

病院スタッフ　管理栄養士3名（内、1名4月～新入職、1名9月～産休）
給食委託　　京都マルタマ（株）栄養士2名、調理師1名、調理補助4名

【業務実績】

平成27年度：食数　23,980食　　特別食　3,878食　　栄養指導件数　80件
平成28年度：食数　26,240食　　特別食　3,598食　　栄養指導件数　88件
平成29年度：食数　27,495食　　特別食　4,459食　　栄養指導件数　127件
平成30年度：食数　27,393食　　特別食　5,332食　　栄養指導件数　122件　栄養相談件数408件

平成30年度栄養指導件数・栄養相談件数



食総数は横ばい、特別食は増加傾向であった。栄養指導が求められている中、栄養指導件数の月毎の減少が見られたのは、スタッフ1名の産休による長期休暇と新入職員のフォローによる実働人数の不足によるものと考えられる。今年度より以前から続けていた栄養相談件数を計上開始。個人の指導件数は少ないが、できる限り多くの患者や家族、スタッフに対して迅速かつ細やかな栄養相談を行うことで、チーム医療における栄養ケアの充実に貢献できた。

病院機能評価受審を機に業務マニュアルの見直しを行った。来年度は標準化に向けて励んでいきたい。

【参加研修】

・リハ栄養フォーラム2018
・回復期リハビリテーション栄養士研修会
・医師・歯科医師とメディカルスタッフのための栄養管理セミナー

事務部門

記載者：吉田　潤

医事課	課長：林　亮治	係長：下村由香里	主任：早川　佳克
地域医療連携課	課長：鈴鹿　三郎	主任：佐野　綾子	
システム管理課	課長：髙田　賢悟		
総務課	課長：新谷　圭由		

［方針］

『病院機能評価受審を通じて、事務部門における業務改善と、組織が安心・安全で質の高い診療体制を確立するためのサポート体制を充実させる』

［主な活動］

病院機能評価受審が決定し、その対応に向けた業務が主軸となった1年であった。病院機能評価受審にあたり、これはひとつのきっかけであり、大切なのはそのプロセスであるという事を部内に意識付けるようにした。このプロセスをうまく使い、業務改善とサポート体制の充実化に繋ぐ取り組みを行った。

方針の強化項目としては、各種管理体制の強化、エンパワーメントの発展、業務改善の促進と部門の活性化を掲げた。

病院機能評価を受審するにあたり、病院運営に必須となる規定やルールの見直と整備を行い、部門を横断の調整を行った。これによって、整備が不十分であった項目が露出し、我々は何を行わなければならないのかという事が明確になり、組織全体の課題解決に繋がったと考える。受審までにどうしても完全に整えることができなかった項目や、やむを得ず取り繕った項目については、今後の課題・目標として掲げ、継続して改善活動を行っていく。

労務管理体制は、勤怠管理システムによる運用を定着させることで、以前よりも職員の勤怠管理が容易になった。今後の働き方改革のデータベースツールとしても活用が可能である。有給消化率の向上を視野に入れながら推し進めていく。また、今年度導入した給与管理システムと連動させることにより、今後情報を活用した効率運用に取り組んでいく。職員情報の電子化を進める一方で、セキュリティ強化も必須となってくる。常に意識を持ちながら取り組んでいきたい。

施設基準については、本年度、診療録管理体制加算とデータ提出加算を新規取得、また、回復期リハビリテーション病棟入院料Ⅰへの類上げも行った。データ提出加算については、診療報酬改定により届け出が必須となった項目であるが、診療録管理体制と併せて適切な診療録管理とデータ運用が行えるよう今後も整備を行っていきたい。

院内設備に関しては、病棟の改修工事があり、今まで不備とされていた病棟機能が改善された。工事が円滑に遂行されるよう、総務課を中心となり、院内調整を行った。また、総務課では定期的な院内ラウンドを行い、設備、安全管理、防火防犯等が適切であるかチェックを行い、不備項目については改善を行った。

本年度は、事務部員ひとりひとりが他職種の要望に応えられるゼネラリストとなれるよう、各種研修会への参加や実務へのフィードバックを行い、職務分掌を策定して実行した。個人差はあるが、全体的に力を付け、組織としてのパフォーマンス向上にも寄与したと考える。

次年度は、病院機能評価で得た経験と知識から、改善、維持項目を見極めて実行していきたい。また、各部署から、病院運営や多職種協働に向けた事務的アプローチが積極的に行えるよう進めていきたい。

医事課

部　門：事務部門
記載者：林　亮治

課長：林　亮治　　係長：下村由香里　　主任：早川　佳克

［年間目標］

『院内の中心となる組織へ』

［主な活動］

①課内の日常業務を見直す

医事課が中心となり、患者満足度アンケートを実施した。指摘された内容を課内で検討し、改善を行った。来期も継続して見直しを行っていく。患者満足度向上にむけて、院内の他部署と協力して存在感を出して行きたい。

②病院機能評価受審に向けた取り組み

運用マニュアルの作成・見直し・確認など全員で対応した。業務とマニュアルの同期が取れているか確認を継続中である。患者サービスについて、公共施設・コインパーキングのマップ作成や公共交通機関の時刻表掲示などを行った。来期も継続してよりよい患者サービスを実行していく。

③データ提出加算の算定

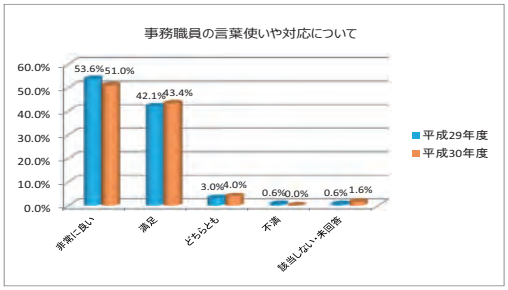
システムの導入から運用、算定までスムーズに行うことができた。病棟と協力し、安定したデータ提出が出来ている。入院基本料の算定要件となっていることから、継続して安定した提出を行っていく。

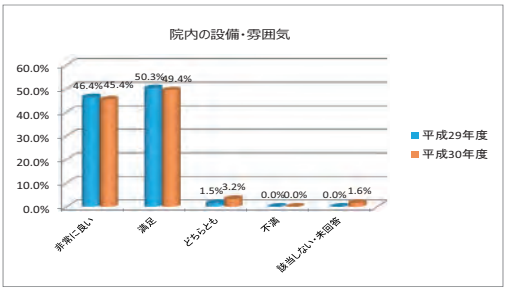
④安定した患者接遇

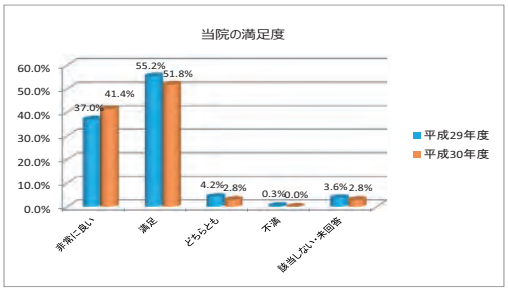
日常業務の中で気がついた具体例をもとに、課内で話合いができた。毎月、標語を作成して意識するようにしている。混雑時であっても丁寧な対応を心がけ、常に接遇を意識した応対を行う。来期は電話対応について取り組みたい。

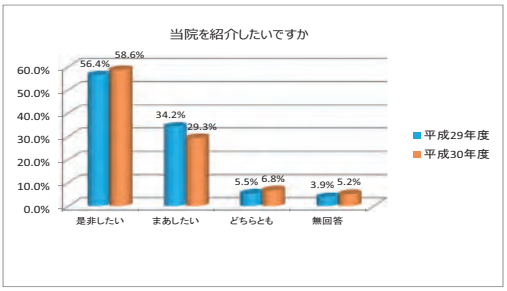
その他、査定・返戻件数の減少に向けた取り組みを行った。前年に比べて手術件数が増加したが、査定件数は増加しなかった。

各担当の業務分担とフォロー体制確保について取り組んだが、計画通り進めることが出来なかった。来期も継続して取り組んでいく。









地域医療連携課

部　門：事務部門
記載者：鈴鹿　三郎

課長：鈴鹿　三郎　　主任：佐野　綾子

［年間目標］

『院内外連携の要となる』

［主な活動］

病院機能評価受審を視野に入れ、地域医療連携課に求められる役割について検討し実行た。地域連携の強化については関係医療機関の連携懇話会や勉強会へ積極的に参加し情報交換を実施した。更に、連携懇話会のテーマによって医療安全管理者と同行する等、他スタッフが研修・交流の場を持てる様に意識した。中京区在宅医療介護連携推進協議会に委員として参加し、医療機関だけではなく在宅生活を支える関係者とも顔の見える関係を築く事ができた。その結果、回復期リハビリテーション病棟自宅退院患者（要介護認定を受けた患者）では41.5%の患者で退院前カンファレンスを開催でき、さらにICに在宅関係者が参加する場も設けられた。

また、かかりつけ医との関わりが増えた為、退院後のフォロー依頼や入院前の情報を受けるなどより患者に手厚い支援ができるようになった。退院前カンファレンスにかかりつけ医が参加されるケースも徐々に増えた。

自宅退院後の実態を把握する目的で、退院後患者のフォローアップ調査を実施した。回復期リハビリテーション病棟退院患者と介護保険利用の場合は担当ケアマネジャーにも退院後1ヶ月程度の段階でアンケート調査を実施した。アンケートの結果では、退院前カンファレンスや家屋評価の有用性が証明されたり、専門用語が多く分かり難かったという患者の意見も確認することができた。アンケート結果を病棟担当者間で共有し、今後、入退院支援の検証及び検討と、各職種にフィードバックする事で患者満足度向上につなげていく。

整形外科診療支援として返書依頼時にファックス、郵送するだけではなく電話連絡を行なう事でスムーズな返書管理が行えた。また、新規紹介元医療機関には訪問，電話により当院の診療体制等の説明を行い更なる紹介を依頼した。副院長着任、整形外科副部長就任時には関係医療機関への挨拶同行を行なった。

回復期リハビリテーション病棟においては、施設基準1算定を目指した重症率、在院日数管理、FIM実績指数の検証等を行ない、また、在宅復帰が困難な患者の受入れ先へ定期的に挨拶を行い、当院の状況説明を行なう事で円滑な患者受入れにつながった。

また、紹介元医療機関MSWや地域連携担当者に来院して貰い当院の施設案内を積極的に実施し当院のリハビリ・看護に相当する患者紹介につなげた。

地域連携の土台が出来た為、次年度は地域連携業務の質向上に努めたい。

システム管理課

部　門：事務部門
記載者　髙田　賢悟

課長：髙田　賢悟

［年間目標］

上期『各種更新及び新規稼働システムの安定稼働と病院機能評価受審に向けた改善』
下期『病院機能評価受審・ネットワークセキュリティの強化と更新システムの調整』

［主な活動］

平成30年6月より、ユヤマ社の調剤支援システムを導入。同年7月にシステム更新を行い、調剤分包機、PC、プリンタの入替えを行った。機器の選定・業者との調整に苦慮したが、稼働後大きな問題もなく運用できている。

平成30年5月よりソフトウェア・サービス社のDPC調査票システムを導入。同年8月に稼働を迎えた。「DPC導入の影響評価に係る調査」に準拠したデータの提出ファイル作成作業に使用している。医事課と連携しながら円滑に導入運用できている。

平成30年6月よりソフトウェア・サービス社の給与システムを導入。翌年1月に稼働を迎えた。昨年度に導入した勤怠管理システムと連動し、職員の勤怠情報を元に自動的に給与計算が可能となった。長期間に渡る導入期間であったが、業者および総務課と連携しながら特に大きな問題もなく稼働できたと考えている。稼働後の給与処理業務では、総務課職員が新システム自体に不慣れなところもあり、時間を要してしまったが、システム面で時間短縮が可能となるよう協力していきたい。

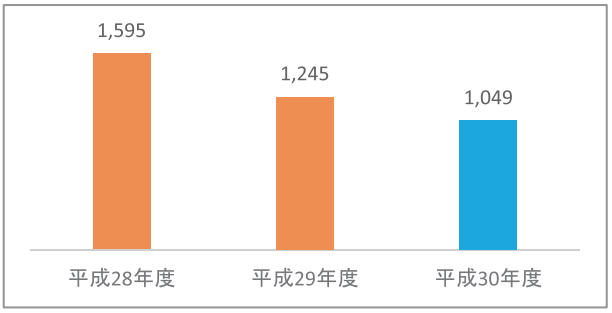
平成31年2月には病院機能評価を受審し、業務の質改善を図った。当評価受審に伴い、システム管理課内の業務マニュアルを作成し、業務の標準化を行った。受審当日は面接での質問、部署訪問でサーバー室を確認されたが、特に問題となる指摘事項等はなかった。

また、インターネット回線のセキュリティ強化のため、UTM機器、資産管理ソフトの導入を行った。迷惑メールやフィッシングの検知、ブロックをより一層高いレベルで行えるようになったと考える。また資産管理ソフトの導入により、法人内のPCの動きが正確に把握できるようになり、資産管理に役立っている。今後は外部記録媒体の制御等、同ソフトを活用し、法人内のセキュリティレベルの向上に努めたい。

平成31年度のシステム案件数は1049件で、完了率は96.9%であった。前年度対比で約70%減少しているが、診療報酬改定がなかったこと、病院機能評価受審に伴い、各部署が繁忙であったことが原因と考えている。今後は、より迅速に正確に対応できるよう努めたい。

［活動データ］

・年間院内依頼案件の推移（件）



総務課

部　門：事務部門
記載者：新谷　圭由

課長：新谷　圭由

［年間目標］

『病院機能評価を通して、業務改善を行い、信頼される質の高い部署への向上を目指す。』

［主な活動］

今年度は、期初から始まった病棟改修工事、課内の人員体制の変更、給与システム稼働、病院機能評価受審等と、変化の多い1年となった。

期初より始まった改修工事は、各部署の協力を得ながら予定通りの工期、及び無事故で終える事ができた。改修工事後の各部屋、機能等に特に大きな問題はなく稼働している。

給与システムについては昨年度から導入が決まっていたソフトウェア・サービス社のシステムの稼働に向けて、平成30年7月より調整をはじめ、平成31年1月、予定通り稼働させる事が出来た。既に導入されていた、人事・勤怠システムとの連動により作業効率の向上を図る事も可能となり、「人事・勤怠・給与」と一元管理の環境が揃ったので、今後も作業の効率化や的確な管理が出来る様に随時見直しを図っていきたい。

病院機能評価受診については、給与システムの調整・導入と重なった事もあり、充分な対応をとる事が出来ない状態での受診となった。ただ、今回の受診事により、総務課として不足している規程や対応等（特に、喫煙、労働時間・有給取得の隔たり、防災、夜間保安、など）が明確になったので、次年度以降の更なる業務整理及び改善につなげていきたい。

総務課への依頼に対する案件対応率については、目標値としていた80%を毎月クリアすることができた。昨年度の実績も上回ることができた。（昨年度89%、今年度98%）これは、全体的な業務分担および、各職員の業務負担の見直しをした事により、案件への対応に集中できたことも影響していると思われる。

また、人事勤怠給与システムの導入による業務効率化、業務分担等の見直しによる総務課職員の有給取得率向上を目指したが、目標とする数値達成には及ばなかった。

次年度以降、給与システムの年次処理に対する調整、機能評価の指摘事項や課題の改善を継続して行う。また、働き方改革により、これまで以上に「ワークライフバランス」「働き方の柔軟性」「健康維持増進」が推進され、有給5日取得義務、時間外労働削減等が義務化される。これらを達成するためには、更なる業務整理・効率化を進めていく必要があると考えている。

医療安全管理部門・医療安全管理委員会

記載者：山田　美香

医療安全委員長：小西　哲郎　　副委員長：山田　美香
竹村　淳一、稲田祐美子、中井登代美（医薬品安全管理者）、吉田　潤、中尾　元美、
中谷　道子（医療機器安全管理者）、橋尾　彩花、森本　雅之、吉川　友晴、
早川　佳克、井上　和哉（医療ガス安全管理者）

［年間目標］

『患者の権利を尊重し安全な医療を提供する』

［主な活動］

平成30年度医療安全活動で前年度から大きく変わったところは、病院組織内の医療安全体制整備として医療安全管理室を立ち上げた事である。医療安全管理室は、他職種から形成した医療安全管理委員会活動と、『良質で安全な医療』を目指す中心的な部門となった。

まず取り組んだことは、医療安全管理者の役割を委員会で話し合い明確にした。医療安全管理者は、各部門の小委員会の運営などに参加しながら、医療安全管理委員会と連携し活動が行えるように報告事例に取り組んだ。また、インシデント報告については、平成30年3月からシステム導入、職員が電子カルテパソコンから入力できることで報告書を出しやすくなり今まで報告件数の少ない部署からの報告も増え効率が上がった。平成30年度報告件数は578件で、前年度報告より69件増加した。又、統計処理などが時間を掛けずに行えるようになった。

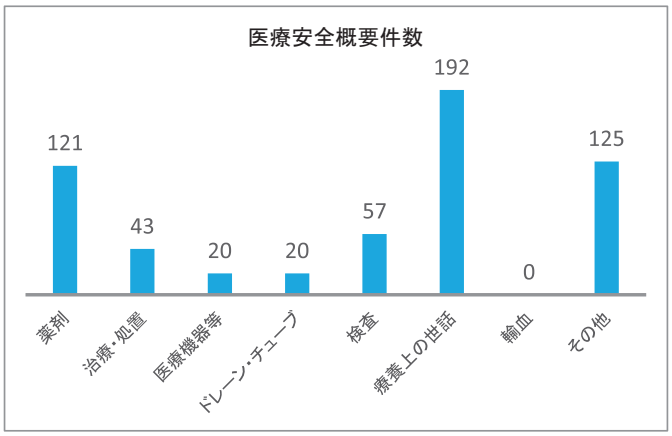
職員研修は、急変時対応のための『BLS・AEDの使用方法』を企画し、講師は京都府立医科大学附属病院救急医療学教室太田凡教授をお招きし、急変をイメージできる活気ある研修が開催できた。この時に先生から直接指導して頂いた職員6名は、急変対応研修の講師として入職時研修や急変対応時の研修講師として活躍している。

病院機能評価受審に対する取り組みでは、医療安全の視点で不足していたマニュアルの作成や、全職員が安全文化への当事者意識をもてるよう周知した。

主なマニュアル作成は次の通りである。

・急変対応：急変時の連絡体制、急変対応マニュアル、BLS対応、ハリーコール
・患者確認：患者誤認防止マニュアル・安全確保・タイムアウト
・医療機器の一元管理：医療機器一覧表作成
・患者安全：離院離棟対応マニュアル
・患者相談：患者意見箱・患者相談窓口の運用

平成30年度より京都市立病院の医療安全管理室と連携し情報交換や相談を行い、さらに「京都西部医療安全ネットワーク」にも参画（2回出席）した。組織横断的に医療安全に関する動向や情報共有等他施設と関われる機会となった。



訪問リハビリテーション

記載者：中西　文彦

部長：岡　徹　　科長：中西　文彦　　主任：小林　剛

［年間目標］

『住み慣れた地域で生活が継続できるように支援する』

［主な活動］

平成30年春はPT2名体制でスタートした。途中PT1名がOTと交代した。平日週5日のうちPT2日OT3日、一日7枠、週35枠体制で実施した。8月からは全症例3ヵ月毎にカンファレンスを開催した。カンファレンスは主治医からの診療情報提供書に基づき指示医（沢田医師）の指導のもと連携室、医事課、PT, OTで実施した。秋には登録者数が20名を超え、訪問件数も月120件に達した。

平成29年度に作成した訪問リハビリテーション業務マニュアルを再度見直し、新規申し込み手順の一部を改定している。回復期病棟入院中から自宅退院が予定される方の情報を各チームから受け、訪問リハビリテーション業務以外の時間帯で回復期病棟代行業務を担当し状況把握につとめた。退院前カンファレンス、サービス担当者会議など年間約50件の会議に参加して回復期リハビリテーションから、在宅リハビリテーションに向けて途切れ目のない対応を心掛けた。

平成30年度の職員は訪問リハビリテーション経験が浅いため訪問リハビリテーション協会主催の初任者研修会、学術大会などに参加して情報収集に努めた。

また、利用者の大半は当院回復期病棟を退院された方であり、病棟職員へ訪問リハビリテーションの様子を毎月の病棟会で紹介した。入院中の在宅生活像と現状を比較検討することで、これからの入院部門・訪問部門共に業務の参考にして役立てている。

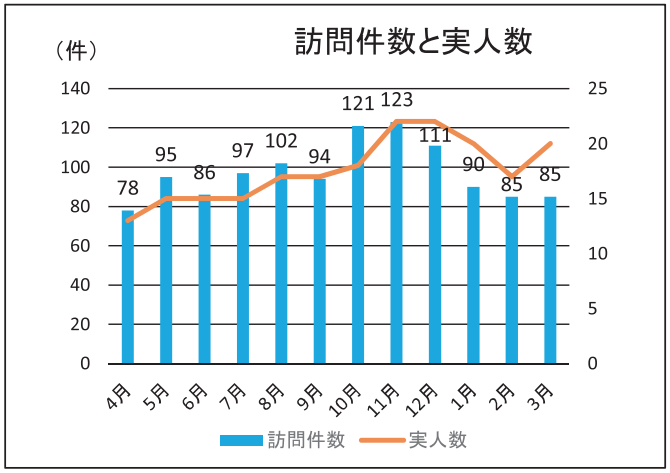
平成29年度輝生会からの出向スタッフで立ち上げた訪問リハビリテーションを引き継ぎ、平成30年度は体制充実、事業拡大への基盤作りに取り組んだ。

訪問リハビリテーション統計

	介護保険			Ave	医療保険			合計			介護保険		医療保険		
	実人数	訪問件数	実施回数	3721.4	実人数	訪問件数	実施回数	実人数	訪問件数	実施回数	介護保険請求額	利用者負担額	医療保険請求額	総合計金額	新規利用
4月	12	71	149	3736.6	1	7	21	13	78	170	435,402	57,109	64,240	556,751	1
5月	14	90	180	3614.9	1	5	15	15	95	195	533,272	71,170	46,240	650,682	3
6月	14	79	167	3684.9	1	7	21	15	86	188	493,054	58,076	64,240	615,370	1
7月	14	93	206	3466.3	1	4	11	15	97	217	611,084	68,738	34,240	714,062	1
8月	16	96	212	3522.7	1	6	16	17	102	228	624,893	72,670	49,240	746,803	2
9月	17	94	209	3361.5	0	0	0	17	94	209	627,395	75,162	0	702,557	4
10月	17	120	258	3334.9	1	1	3	18	121	261	750,090	89,445	20,860	860,395	1
11月	22	123	263	3227.0	0	0	0	22	123	263	758,934	89,779	0	848,713	2
12月	22	111	240	3134.2	0	0	0	22	111	240	672,657	79,547	0	752,204	1
1月	20	90	200	3154.4	0	0	0	20	90	200	565,213	65,666	0	630,879	0
2月	17	85	190	3128.9	0	0	0	17	85	190	532,460	62,024	0	594,484	0
3月	20	85	201	3174.2	0	0	0	20	85	201	571,628	66,381	0	638,009	3
合計	205	1137	2475	3357.9	6	30	87	211	1167	2562	7,176,082	855,767	279,060	8,310,909	19

通年平均	97.3	213.5
上半期	92.0	201.2
下半期	102.5	225.8

※実 人 数・・・レセプト請求件数
※訪問件数・・・介護利用者請求集計の実日数
※実施回数・・・介護実績データ集計の訪問リハビリ1、予防訪問リハビリ1の回数を集計しています



感染防止対策委員会

記載者：谷田砂登美

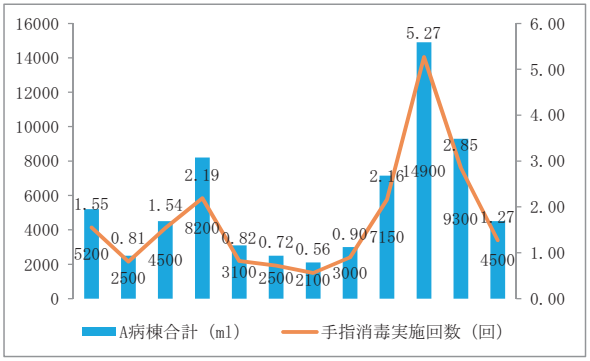
委員長：小西　哲郎　　副委員長：谷田砂登美、細越万里子（11月～）
構成員：上島圭一郎、稲田祐美子、津野真奈美、加藤　友香、中井登美子、
佐々木理恵、山崎　泰志、　鈴木　理恵　竹村　淳一、吉田　潤、林　亮治、
上野　有佐

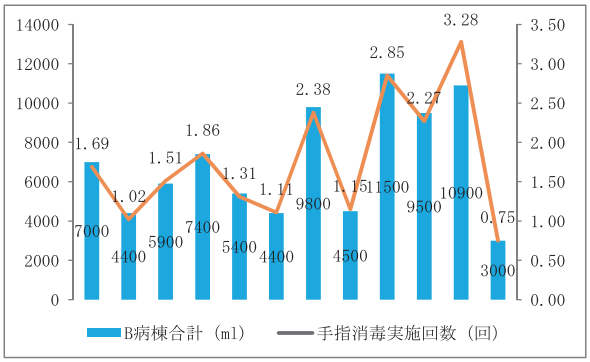
［年間目標］

『病院機能評価に向けたマニュアル整備及び職員への感染防止対策の周知』

［主な活動］

・月1回（第2木曜日16：15～17：15）委員会を開催し、院内病原菌検出状況と感染状況を報告。
・週1回院内感染ラウンドをICTメンバー2名以上で巡回し現場の感染管理状況の監視、指導を実施。
・耐性菌の検出状況・インフルエンザ検出状況の報告。
平成30年11月～12月に全職員に無料でインフルエンザワクチン接種を実施した。平成31年1月19日に回復期病棟でインフルエンザのアウトブレイクが発生した。臨時ＩＣＴを開催し京都市立病院感染認定看護師や京都市保健医務衛生課へ報告・相談し拡大防止に向けた対策を実施した。患者コホート、手指衛生の徹底、リハビリ時における感染対策、全職員と外来患者、面会者へマスクの着用、面会、新規入院規制を行い計8名（患者5名、職員3名）感染したが2月12日に収束した。
・平成30年1月22日リハビリ通院していた患者が麻しんに感染していたため「麻しん対応ガイドライン第7版」を基に濃厚接触した職員、患者に対して麻しん抗体価検査を実施。また21日間全職員及び入院、外来通院患者の健康観察を行った。幸いなことに二次感染もなく2月19日をもって収束した。
・院内感染対策勉強会開催
4月4日（水）「手指衛生及び感染制御について」新入職員研修した。
8月22日（水）、8月30日（木）は、京都市立病院ICT医師及び感染認定ナースを招いて「院内における感染リスクと基本的な予防策」を全職員対象に開催した。参加率は96%であった。
12月19日（水）、12月20日（木）杏林製薬による「ノロウイルス・インフルエンザについて」を開催し参加率は、77%であった。いずれも勤務等で不参加者に対しては、レポート課題の提出とした。
・平成29年11月より看護職員全員に擦式アルコール剤の携帯を開始し使用量は増加したが、1患者あたり平均手指消毒回数は1回と少なかった。引き続き患者に触れる前後や場面毎に手指衛生の実施を啓蒙し交差感染防止に努める。
・病院機能評価に向けてマニュアル整備。
感染性廃棄物の廃棄方法を統一し周知した。
汚物処理セットの使用方法を可視化し設置場所の統一を図った。
また感染性リネンの出し方、リハビリテーションの機器類や訓練用具の清掃方法を整備した。
・職業感染対策として全職員に無料でインフルエンザワクチンの接種。
HBs抗体陰性者平成30年1月24日：40名、平成31年1月24日：19名　計59名にワクチン接種を実施した。
・年4回の地域感染カンファレンスに参加し地域における感染防止対策の向上に取り組んだ。





院内教育委員会

記載者：竹村　淳一

委員長：前田　博士　　副委員長：竹村　淳一
構成員：稲田祐美子、細越万里子、今井千賀子、角田　公啓、相馬　寛人、
高野　麻美、山田　浩弓、新谷　圭由、佐野　綾子、沢田光思郎（外部委員）

［主な活動］

院内教育委員会は、職員の知識・技術の向上を目的に活動をしており、部門横断型の研修を企画・開催をしている。各委員会とも連携し、必要な教育テーマを共有するように心掛けている。各委員会の研修計画を把握し、年間研修計画が適切になるようにスケジュールを管理し、職員が出来るだけ参加しやすい研修計画を策定することも院内教育委員会の役割となる（下記、平成30年度に実施した部門横断型研修一覧を御参照ください）。また各部門に研修予算を充て、その範囲内で計画する学会参加と院外研修参加を管理も実施している。平成30年度の院外研修参加費は5,300千円／年程度（研修参加に伴う旅費交通費を除く）となっており、収益に占める構成比率は0.3％程度であり、適切な研修費を確保できていると考えている。

平成30年度は病院機能評価受審を控え、当院で体制整備が遅れていた『臨床倫理』について倫理委員会と研修を企画した。全職員向けの研修のほかに、管理職向け研修を実施したことで、現場における臨床倫理への知識と関心が深まったと考えている。また管理職研修では、法人で初めて実施した職員満足度調査（ES調査）の結果を踏まえ、「ES調査から見える、求められる上司の態度とは」をテーマとして、役職者の役割と態度を再確認することができた。

今後の院内研修員会における課題は、①内部講師の育成、②認定制度などの長期研修を活用した人材育成の提案、③各職種における教育システムへの関わりが挙げられる。次年度以降は課題を意識した委員会運営を心掛け、職員の知識・技術の向上に貢献していきたい。

研修名	テーマ／目的	開催月	参加数	主催
新採用者研修	がくさい病院職員として，基礎的な知識を習得する	4月	24名	院内教育委員会
新採用者フォローアップ研修	より良い病院にするために ～自分達ができること～	7月	14名	院内教育委員会
医療安全管理研修	一時救命処置：BLS研修 一番新しいガイドラインG2015	7月	144名	医療安全管理委員会
院内感染防止対策研修	感染管理の基本	8月	117名	院内感染防止対策委員会
合同管理職研修	ES調査結果からみる 求められる上司の態度とは	9月	62名	院内教育委員会法人事務局
中途採用者研修	がくさい病院職員として，必要な知識やスキルを養う	10月	6名	院内教育委員会
臨床倫理研修会	医療従事者として倫理基本を学び，倫理観に即した行動をとる	10月	77名	倫理委員会 院内教育委員会
接遇研修	『接遇マニュアル』の理解と浸透	10月	90名	院内教育委員会
コーチング研修	コーチング技術の習得（全4回シリーズ）	10月～ 1月	12名	法人事務局
院内感染防止対策研修	知っておこうノロ対策	11月	129名	院内感染防止対策委員会
医療安全管理研修	医療安全関連のマニュアル周知	1月	137名	医療安全管理委員会
合同管理職研修	医療・介護における倫理の基本について	1月	53名	院内教育委員会 倫理委員会 法人事務局

※部門横断型研修で比較的規模の大きな研修を抜粋している

栄養管理委員会

記載者：中平　美紀

委員長：小西　哲郎　　副委員長：中平　美紀
構成員：竹村　淳一、吉田　幸世、山岸　理穂、柚木　康裕（マルタマフーズ）、
田中　美圭（マルタマフーズ）

［年間目標］

『より良い食事提供と環境改善』

多職種を構成員とし、栄養介入件数の確認、行事食の確認、嗜好調査等を参考にした献立の検討、各現場からの報告・提案・検討を行い、患者にとってより良い食事提供と環境改善に努めている。

［活動内容］

・食事箋規約の変更

食事内容変更の締切りは提供時間の1時間前と設定されていたが、朝食は前日16時・昼食は前日16時・夕食は当日13時とし、これを過ぎる場合は、ひとつ先の食事での変更となった。ただし、緊急時は栄養科へ提供可能かを確認後、オーダーを行う。他は従来通り。

・食札の印字

誤配膳防止のため、同姓同名には◆◆◆と印字するよう、システムの変更を行った。

・配膳車の入替

病棟の改修工事後の各病棟の患者数変更に合わせ、配膳車を入替えを行った。

・食器の入替

食器の破損や劣化、病棟スタッフの意見を取り入れ、洋皿等の入替えを行った。

・厨房の側溝工事

厨房の側溝の劣化に伴い、強化工事を行った。PM8:00 ～翌日 AM10:00 は排水不可のため、下膳時間の前倒しや献立の変更、食器はディスポにするなどの調整を行った。

・行事食：18回／年

４月	５月	６月	７月	８月	９月	１０月	１１月	１２月	１月	２月	３月
松花堂弁当	新緑	水無月 あじさい弁当	七夕 祇園祭弁当	送り火	敬老の日	ハロウィン	紅葉弁当	冬至 クリスマス 大晦日	正月 開院記念日	節分 バレンタイン	ひなまつり

褥瘡防止対策委員会

記載者：吉田　幸世

委員長：久保　元則　　副委員長：吉田　幸世
構成員：山岸　理穂、中平　美紀、馬淵　拓実、井上由紀乃、皮膚科非常勤医師

［年間目標］

『院内の褥瘡発生状況の把握・報告を行い褥瘡管理対策を実施する』

［主な活動］

【活動内容】

委員会メンバーの活動としては、年間を通して入院患者全員に対して入院時褥瘡診療計画作成と入院時の褥瘡発生リスク評価としてのOHスケールの判定を行っている。評価・判定については各部署の委員会メンバーを中心にリンクナースの協力も得て実施した。

また、月1回の定例会議では褥瘡患者の有無や褥瘡診療計画の評価者数、栄養士からの栄養管理患者の報告を実施した。委員会メンバーに院内の患者状況を周知できるよう努めた。

日々の活動としては、各部署・病棟で委員会メンバーによるスキントラブルへの一次的対処と皮膚科診療時の対応を行っている。

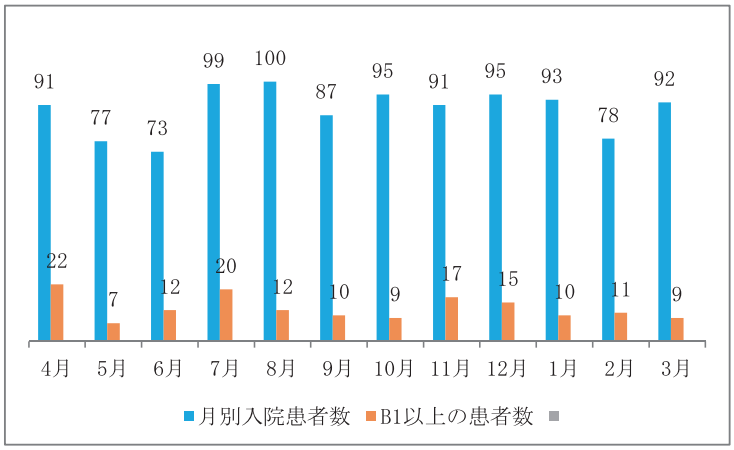
他に、教育を目的として委員会主催の勉強会を3回行っている。30年度は4月に新入職員を対象とした《褥瘡と除圧》の勉強会、8月に病棟スタッフを対象とした《オムツ》の勉強会、9月に病棟スタッフを対象とした《ポジショニング／ベッドマットレス》の勉強会を実施した。研修実施に際しては参加者に対してアンケートを実施し、勉強会内容の理解や、今後の勉強会や開催テーマに関する意見を聴取し次回の研修企画の参考にしている。アンケート結果は集計、データー化し書面作成し委員会にて報告した。

【課題】

年間を通して褥瘡防止に少しでも役立てられるよう勉強会を企画しているが、30年度は新入職員を対象とした例年開催している勉強会の他には2件の勉強会を開催するのみに留まった。勉強会のテーマについては実際の援助・ケア場面に必要な知識・技術の習得を優先に考えているため有意義なテーマでの勉強会開催とできたが、今後は直接的に褥瘡に対する知識や対応技術を得られるような勉強会の開催も考慮していきたい。

また委員会メンバーの学習という観点からも院外開催の研修・勉強会への参加も積極的に行っていきたい。

［活動データ］



診療録管理委員会 兼 システム委員会

記載者　髙田　賢悟

委員長：小西　哲郎　　副委員長：髙田　賢悟
構成員：日野　学、吉田　純、光岡　麻里、岡田　尚子、中尾　元美、岡林　和歩、
宮田　梓、細越万里子、恒吉　克也、吉田　潤、下村由香里、石田　尚己、
中川　裕子

［年間目標］

『診療録の適切な管理・電子カルテオーダリングシステムの適正運用とシステム活用』

［主な活動］

◆紙運用からシステム運用への変更

前年度まで紙運用であった「医薬品購入依頼用紙」をシステム運用に変更した。医師がPC上で記載した用紙が薬剤科にて発行されるように変更したことで、病棟での発行物の紛失を防ぐことができている。また、発行履歴等も紙運用と比較して閲覧しやすくなった。

◆カルテ記載の見直し

医師からの依頼があり、カルテの文字色を追加し運用を開始した。運用する際には、各文字色の使用基準を決定し、用途に合わせた記載が標準化されるよう努めた。使用基準は「診療録管理規程」に規定し、院内周知を行った。

◆同意書記載の標準化

各種同意書の署名欄を統一し、記載内容の標準化を図った。前年度まで署名欄の書式が統一されていなかったが、署名の取り方を統一できるようにすべての同意書の署名欄を統一した。また誤った記載を防ぐために、全同意書共通の注意書きを追加し運用した。

◆院内発行文書の年号表記を西暦に変更

文書の年号表示を西暦表示に変更し、運用した。来年度に控える新元号制定に向けた対策として、院内で発行している文書類の年号表示を西暦表示に統一し、新元号制定に向けて準備した。

◆各種外部記録媒体の適正運用について

ネットワークセキュリティ機器の導入後の運用方法について検討を行った。機器の導入により外部記録媒体の使用記録の閲覧等が容易になり、届出以外の媒体等を使用していることが分かった。また使用届・貸出届を提出していない部署等も明らかになった。今後は全部署で統一した外部記録媒体の使用基準等を作成し、より一層セキュリティに対する意識の院内統一を図りたいと考えている。

◆各種規程・マニュアルの見直しと適正運用

病院機能評価受審に向けて、各種規程・マニュアルの整備を行った。職種ごとの診療記録基準に関しては、職種ごとのマニュアル・基準に盛り込むようにし、全体統一の決め事に関しては、診療録管理規程に規定した。また、院内文書の管理規程・文書一覧を作成し、文書の管理方法を規定した。受審の際に、受けた記録監査の方法や記録の閲覧制限等の指摘・アドバイスを元に今後も診療記録の質を向上できるように努めたい。

企画広報委員会

記載者：鈴鹿　三郎

委員長：鈴鹿　三郎　　副委員：下村由香里

［年間目標］

『がくさい病院の取り組みを広報する。健康講座を再開する』

［主な活動］

平成30年度は、広報誌「がくさいWatch」第2号、第3号を発刊した。広報紙は、紹介元医療機関、逆紹介医療機関、関係事業所への配布にとどまらず、これまで紹介実績の無かった近隣の開業医へも配布した。開業医からは、「広報誌を通じて、手術の対応症例が理解出来たため、手術目的の紹介が行いやすくなった。」と前向きなご意見等を多数いただくことが出来た。その結果、これまで紹介実績の無かった開業医からも患者紹介を得られるようになった。

フェイスブックについては、病院の活動報告を中心に、学会発表、職員紹介、クラブ活動等、年間33件の記事を投稿し、今年度の平均リーチ数は約400件となった。ただ、投稿記事については部署の偏りが目立った為、今後は、各部署のトピックスや業務紹介等の記事も投稿していけるよう、全部署に記事提供を依頼したい。

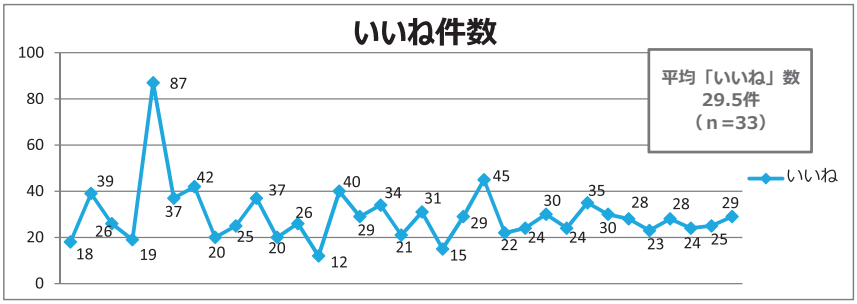
また、地域の皆様に健康等に関する情報を提供するという目標を定めた「がくさい健康塾」については、がくさい病院移転や開催施設閉鎖に伴い、ここ数年間開催を見合わせていたが、今年度、ようやく再開することが出来た。

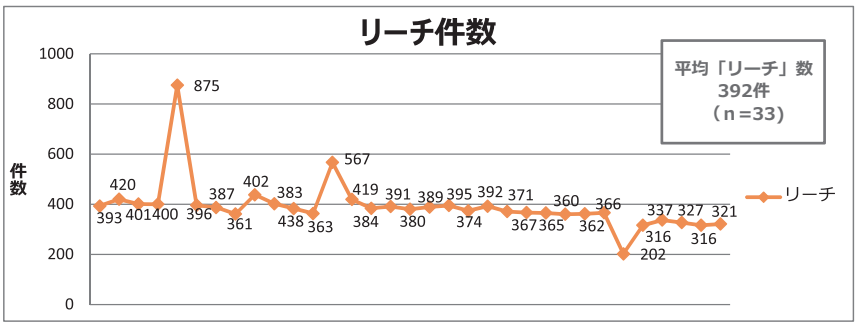
今回は、京都府医師会健康日本21対策・スポーツ医学委員会委員、日本整形外科学会公認ロコモアドバイスドクターである 劉 和輝医師に、「健康寿命を伸ばそう！ロコモって何？」というテーマで、講演を行なって頂いた。画像や映像を交えた説明は非常に分りやすく、ロコモ予防体操実演時は、会場の参加者も積極的に実践され大盛況となった。参加者のアンケートでは、「健康講座の再開を待ち望んでいた」という意見も多数頂き、当院が地域の皆様に向けた活動を行なう必要性を強く感じた。

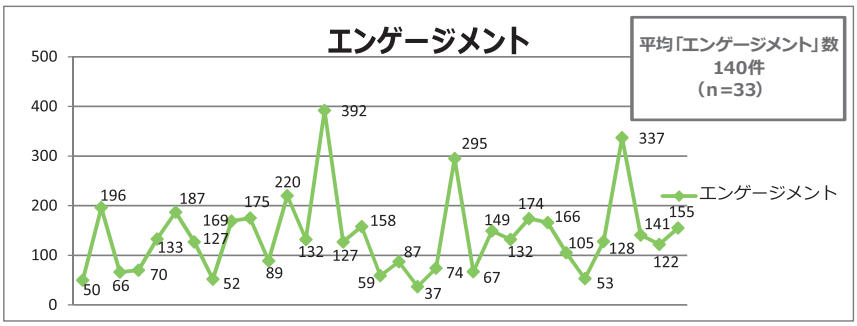
今年度は、広報誌発刊、フェイスブック記事投稿・がくさい健康塾の開催を予定通りに行なう事ができた。その結果、病院機能評価受審時においても、企画広報委員会の取り組みを評価して頂いた。病院機能評価では、広報誌配布先を患者や医療機関に集中せず、介護保険事業所・施設へも配布すると、よりがくさい病院の取り組みを周知できるのではないかとアドバイスも頂けた。次年度は、機能評価時の提案も踏まえ、より充実した広報誌の作成や広報方法について検討したい。

［活動データ］

・広報誌発刊数　年2回
・健康塾開催数　年1回
・フェイスブック記事掲載数　年33件
　平均リーチ数　約400件







平成30年度　がくさい病院　Facebook

No.	投稿日	投稿記事	担当部署	いいね	リーチ	エンゲージメント
1	4.10	回復期リハビリテーション病棟協会大109回全職種研修参加のご報告	地域連携室	18	393	50
2	4.13	平成30年度　新入職員のお知らせ	事務局	39	420	196
3	4.16	第43回日本リハビリテーション医学会近畿地方学術集会参加　のご報告	回復期リハビリテーション科	26	401	66
4	4.22	京都市域地域リハビリテーション支援センター勉強会のご報告	リハビリテーション支援センター	19	400	70
5	5.22	一般撮影装置（レントゲン装置）の更新のご報告	放射線科	87	875	133
6	5.22	第28回京都府理学療法士会での症例発表のご報告	回復期リハビリテーション科	37	396	187
7	6.5	着任のご挨拶	回復期リハビリテーション科	42	387	127
8	6.6	がくさい健康塾開催のお知らせ	企画広報委員会	20	361	52
9	6.10	がくさい病院広報紙春号発刊のお知らせ	企画広報委員会	25	438	169
10	6.3	第55回日本リハビリテーション医学会近畿地方学術集会参加　の御報告	回復期リハビリテーション科	37	402	175
11	7.5	がくさい健康塾開催のご報告	企画広報委員会	20	383	89
12	8.4	医療安全委員会主催BLS指導者研修会のご報告	医療安全委員会	26	363	220
13	8.15	職員募集（療法士）病院見学のお知らせ	事務局	12	567	132
14	9.3	ユニフォーム変更のお知らせ	事務局	40	419	392
15	9.7	京都府リハビリテーション就業フェア2018出展のご報告	事務局	29	384	127
16	9.12	病院機能評価サーベイヤー派遣のご報告	病院機能評価チーム	34	391	158
17	9.2	国体帯同に伴うリハビリ予約に関するお知らせ	スポーツリハビリテーション科	21	380	59
18	9.28	ABCラジオ出演のお知らせ	事務局	31	389	87
19	9.3	国体帯同に伴うリハビリ再開に関するお知らせ	スポーツリハビリテーション科	15	395	37
20	10.11	コーチング研修開催のご報告	事務局	29	374	74
21	11.1	京都市立病院協会主催バレーボール大会のご報告	バレーボール部	45	392	295
22	11.1	がくさい病院スタッフ募集に関するお知らせ	事務局	22	371	67
23	12.11	第13回病院対抗フットサル大会のご報告	野球部	24	367	149
24	12.18	第1回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会	回復期リハビリテーション科	30	365	132
25	12.26	第1回がくさい病院・京都市私立病院リハビリテーション科合同症例検討会	回復期リハビリテーション科	24	360	174
26	12.28	クリスマス会開催のご報告	回復期リハビリテーション科	35	362	166
27	12.28	京都地域医療学際研究所忘年会のご報告	親睦委員会	30	366	105
28	2019.1.4	平成31年新年のご挨拶	事務局	28	202	53
29	2.1	平成30年度　下期管理研修会のご報告	事務局	23	316	128
30	2.8	第58回近畿理学療法学会参加のご報告	回復期リハビリテーション科	28	337	337
31	2.18	病院機能評価受診のご報告	病院機能評価チーム	24	327	141
32	3.6	看護実習生受入れについて（実習指導者の想い）	看護部	25	316	122
33	3.11	第5回京都リハビリテーション医学教室学術集会参加のご報告	回復期リハビリテーション科	29	321	155
			合　　計	974	12,920	4,624
			平　　均	29.5	391.5	140.1

衛生管理委員会

記載者：竹村　淳一

委員長：竹村　淳一
委　員：小西　哲郎（病院長）、松橋　寛子、井上　和哉、森島　正樹医師（産業医）

［主な活動］

衛生管理委員会は、一般財団法人京都地域医療学際研究所 衛生管理規程第5条に基づき設置し、職員の健康管理の適正並びに職場環境に関する調査改善を図ることを目的として活動している。主な活動内容として、①職員の健康障害を防止するための基本となるべき対策に関すること、②職員の健康の保持増進を図るための基本となるべき対策に関すること、③労働災害の原因及び再発防止対策で衛生に係るものに関すること、④衛生に関する規程の作成に関することである。

平成30年度は、病院機能評価項目に沿って『院内暴力・暴言等　対応マニュアル』を策定した。これは院内における家族・患者等からの暴力・暴言があった場合の対応と行動基準を示したものである。マニュアル内において、セクシャルハラスメントや不審者への対応のほか怪文書・怪電話や迷惑電話の対応方法にも触れている。このマニュアルは職員周知がまだ不十分である点が課題と考えており、次年度はマニュアルの周知徹底を強化する必要がある。

衛生管理委員会では、職員意見箱の意見から職場環境に関わるものを共有し、その内容と対策について部長会と連携して対応をしている。昨年度の職員からの職場環境に関する意見は10件であった。その中でも女性職員の子育てに関する不安の意見があり、この意見がきっかけとなり『子育て世代職員の働き方検討ワーキンググループ』が組織され、対応策が議論された。このワーキンググループの成果として、指針の策定や妊娠期職員の休憩室確保、育児・介護休業規定の改訂が挙げられる。職員からの要望を100%叶えることは難しいが、今後も職場環境改善のためにできる限りは努力したいと考えている。

その他に衛生管理委員会では、職員の時間外状況の把握や労働災害の把握、健康診断実施状況の把握に努めている。この把握状況についても部長会と共有し、問題がある場合にはその対応を担当部門長に求めている。

このように衛生管理委員会では、職員の衛生管理と職場環境改善のために活動を実施しており、次年度以降は委員会構成員を増員し、更に充実した活動を目指していきたい。

倫理委員会

記載者　竹村　淳一

委員長：吉田　潤　　副委員長：竹村　淳一
構成員：菅　寛之、前田　博士、稲田祐美子、細越万里子、中井登代美、
　　土井　渉（外部委員）、沢田光思郎（外部委員）

［主な活動］

倫理委員会は、当院の職員が行う人間を直接対象とした医学的研究及び医療行為について、ヘルシンキ宣言の趣旨にそって審議し、倫理的配慮を図ることを目的としている。その活動は主に研究倫理の審査となっている。平成30年度に倫理委員会で審議された研究の数は5題となっている。どれも適切に審査し、研究倫理の承認をすることができた。

研究倫理審査の活動に加えて、平成30年度は病院機能評価受審を機会として、臨床倫理の検討を強化する活動を行った。これは、臨床現場における倫理的な課題を抽出し、それを現場の職員と共有することで倫理的風土の醸成をしようというものである。その取り組みとして職員に対し平成30年度の倫理研修は、全職員を対象としたもの（10月開催）と法人管理職を対象にしたもの（平成31年1月開催）を開催した。全職員を対象とした研修ではテーマを『医療従事者としての倫理についての基本を学び、倫理観に即した行動がとる』として講師を京都大学医学部附属病院　倫理支援部の特定講師　竹之内沙弥香先生に依頼している。参加者数は77名であり、参加者からは「倫理について難しいイメージがあったが基本から丁寧な説明でよく理解ができた」や「倫理について学ぶ機会がなかったのでとても勉強になった」というような声が聞かれた。今回は研修日を1日しか設定できなかったが、次回は研修日を増やし、より多くの職員参加ができるように工夫を図りたい。また法人内管理職を対象とした研修では、テーマを『医療・介護における倫理の基本について』として法人内の主任以上の役職者を対象として1日型の研修を実施している。講師は中京大学　法科大学院教授の稲葉一人先生に依頼し、医療現場・介護現場・在宅での倫理的課題事例を基にその考え方を学んだ。1日型の研修であったため、臨床倫理の基本についてより詳しく知ることができたと考えている。

そのほかに臨床倫理を検討する仕組みとして倫理小委員会制度を策定した。これは現場で倫理的な課題を発見した職員は部署長を通じて倫理小委員会を開催し、その事例を検証するというものである。但し、この仕組みは事例が集まらなかったために、次年度は倫理コンサルテーションチームの設立に発展させることを検討中である。

このように平成30年度の倫理委員会では、研究倫理審査の活動に加えて、臨床倫理の検証活動を強化して取り組むことができた。

学会発表実績

業績集　学会発表（医師）

演者名	演題名	学会名	場所	開催日
○日野　学、菅　寛之、小牧伸太郎、市丸　昌平	TKAの脛骨コンポーネント設置における新しい足関節中心の指標の検討	日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会	福岡	2018/6/14
○小牧伸太郎、菅　寛之、日野　学、市丸昌平	内側半月板縫合後に発生したガングリオンを、後内側ポータルを使用して切除した一例	日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会	福岡	2018/6/14
○市丸　昌平、菅　寛之、平岡　延之、大宝　英悟、日野　学、小牧伸太郎	大腿四頭筋腱断裂に対し修復術を施行した3例	日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会	福岡	2018/6/14
○根本　玲	ポリオ後遺症患者の変形性膝関節症に対する術前後にリハビリテーション治療を行った2症例	日本リハビリテーション医学会第55回学術集会	福岡	2018/6/28
○上島圭一郎、後藤　毅、石田　雅史、斎藤　正純、下村　征史、山本　浩基、久保　俊一	THA術後のスポーツ活動と課題	第49回　日本人工関節学会	東京	2019/2/15

業績集　学会発表（医師以外）

演者名	演題名	学会名	場所	開催日
○徳永　美穂、尾崎　翼、川口菜々子、根本　玲、横関　恵美、菱川　法和、前田　博士	脳梗塞後に残存したPusher現象と注意障害に対し、回復過程に応じた装具療法とプログラムの設定により歩行能力が向上した1例	回復期リハビリテーション病棟協会　第33回研究大会	千葉	2018/2/22
○尾崎　翼、松原　徹、森本　雄太、岡林　和歩、山崎　泰志、米田菜々子、太田　元、中川　恵介、河野　拓巳、蛭子　拓真、井上由紀乃、井本　大介、前田　博士、伊藤　慎英	歩行練習アシストを用い歩行練習を実施した全般性注意障害を呈する右片麻痺例の歩行能力の変化	第55回　日本リハビリテーション医学会学術集会	福岡	2018/6/28
○髙平　茉侑、髙野　麻美、前田　博士	言語機能に変化がみられないにもかかわらず口頭での伝達能力が向上した中等度被殻失語の一症例	回復期リハビリテーション病棟協会　第33回研究大会	千葉	2018/2/22

業績集　執筆

職員名	掲載雑誌	タイトル
○小西　哲郎	Inter Medicine	Physical Disabilities Rolated to the Depressive Mental States Japanese Patients with Subacute Myelo-Optico-neuropathy

外部研修参加実績

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
医局	小西　哲郎	医師	学会等	第115回日本内科学会総会・講演会
医局	小西　哲郎	医師	学会等	第223回近畿地方大会
医局	小西　哲郎	医師	学会等	第4回欧州神経学会（リスボン・ポルトガル）
医局	上島圭一郎	医師	学会等	第49回日本人工関節学会
医局	上島圭一郎	医師	学会等	第5回京都リハビリテーション医学研究会学術集会
整形外科部門	菅　　寛之	医師	学会等	第49回日本人工関節学会
整形外科部門	市丸　昌平	医師	学会等	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会
整形外科部門	市丸　昌平	医師	学会等	第91回日本整形外科学会学術総会
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	学会等	Persona Partial Knee Launch Symposium
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	学会等	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	学会等	第91回日本整形外科学会学術総会
整形外科部門	下村　征史	医師	学会等	ORS2019 Amual Meeting
整形外科部門	日野　　学	医師	学会等	Persona Partial Knee Launch Symposium
整形外科部門	日野　　学	医師	学会等	第91回日本整形外科学会学術総会
整形外科部門	日野　　学	医師	学会等	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会
整形外科部門	金村　朋直	理学療法士	学会等	第29回臨床スポーツ医学会学術集会
整形外科部門	金村　朋直	理学療法士	学会等	第5回日本スポーツ理学療法学会学術大会
整形外科部門	吉田　昌平	理学療法士	学会等	第29回臨床スポーツ医学会学術集会
整形外科部門	吉田　昌平	理学療法士	学会等	第5回日本スポーツ理学療法学会学術大会
回復期リハビリテーション部門	久保　元則	医師	学会等	第5回京都リハビリテーション医学研究会学術集会
回復期リハビリテーション部門	久保　元則	医師	学会等	日本リハビリテーション医学会近畿地方大会・第54回学術集会及び専門医・認定医生涯教育研修会
回復期リハビリテーション部門	根本　　玲	医師	学会等	第2回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会
回復期リハビリテーション部門	根本　　玲	医師	学会等	日本リハビリテーション医学会　第55回学術集会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	学会等	第24回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	学会等	第2回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	学会等	日本リハビリテーション医学会　第55回学術集会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	学会等	日本リハビリテーション医学会・第44回学術集会及び専門医・認定医生涯教育研修会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	学会等	日本リハビリテーション医学会近畿地方大会・第54回学術集会及び専門医・認定医生涯教育研修会
回復期リハビリテーション部門	横関　恵美	医師	学会等	回復期リハビリテーション病棟協会第33回研究大会
回復期リハビリテーション部門	横関　恵美	医師	学会等	第2回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会
回復期リハビリテーション部門	横関　恵美	医師	学会等	日本リハビリテーション医学会　第55回学術集会
回復期リハビリテーション部門	髙野　麻美	言語聴覚士	学会等	第19回日本言語聴覚学会
回復期リハビリテーション部門	髙平　茉侑	言語聴覚士	学会等	回復期リハビリテーション病棟協会第33回研究大会
回復期リハビリテーション部門	足立奈津季	作業療法士	学会等	第5回京都リハビリテーション医学研究会学術集会
回復期リハビリテーション部門	宮本　宗明	作業療法士	学会等	第52回日本作業療法会
回復期リハビリテーション部門	蛭子　拓真	理学療法士	学会等	第58回近畿理学療法学術大会
回復期リハビリテーション部門	尾﨑　　翼	理学療法士	学会等	日本リハビリテーション医学会　第55回学術集会
回復期リハビリテーション部門	川口菜々子	理学療法士	学会等	日本訪問リハビリテーション協会　学術大会
回復期リハビリテーション部門	小林　　剛	理学療法士	学会等	第5回京都リハビリテーション医学研究会学術集会
回復期リハビリテーション部門	四方　佳歩	理学療法士	学会等	第6回京都府作業療法学会　作業療法の未来を拓け！
回復期リハビリテーション部門	畳谷　季恵	理学療法士	学会等	第2回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会
回復期リハビリテーション部門	徳永　美穂	理学療法士	学会等	回復期リハビリテーション病棟協会第33回研究大会

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
回復期リハビリテーション部門	菱川　法和	理学療法士	学会等	日本リハビリテーション医学会　第55回学術集会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	理学療法士	学会等	第5回京都リハビリテーション医学研究会学術集会
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	学会等	第5回京都リハビリテーション医学研究会学術集会
看護部門	入江　麻衣	看護師	学会等	日本手術看護学会　京都ブロックセミナー
看護部門	岡田　尚子	看護師	学会等	第32回日本手術看護学会年次大会
看護部門	進士　香織	看護師	学会等	第32回日本手術看護学会年次大会
看護部門	鈴木美希子	看護師	学会等	第21回京都府看護学会
看護部門	谷田砂登美	看護師	学会等	第32回日本手術看護学会年次大会
看護部門	東山　昌子	看護師	学会等	日本手術看護学会　京都ブロックセミナー
看護部門	増田　紀代	看護師	学会等	日本手術看護学会　京都ブロックセミナー
看護部門	水谷　幸奈	看護師	学会等	第21回京都府看護学会「育ち・育てる未来の看護職」
看護部門	吉川　美稀	看護師	学会等	第21回京都府看護学会「育ち・育てる未来の看護職」
看護部門	吉田　幸世	看護師	学会等	第24回日本看護診断学会学術大会
看護部門	中山　泰	ケアワーカー	学会等	平成30年度第39回看護・介護研修会
医療技術部門	佐々木理恵	検査技師	学会等	第22回関西感染症フォーラム
医療技術部門	佐々木理恵	検査技師	学会等	第36回京滋心血管エコー図研究会
医療技術部門	佐々木理恵	検査技師	学会等	第43回日本超音波検査学会学術集会
医療技術部門	佐々木理恵	検査技師	学会等	第58回日臨技近畿支部医学検査学会
医療技術部門	山田　浩弓	検査技師	学会等	The echo　live 2018
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	学会等	第22回関西感染症フォーラム
医療技術部門	古川吏恵美	薬剤師	学会等	第40回日本病院薬剤師会近畿学術大会
医療技術部門	山田　浩弓	臨床検査技師	学会等	日本血管不全学会学術集会・総会
事務局	竹村　淳一	事務職員	学会等	第68回日本病院学会
事務部門	石田　尚己	事務職員	学会等	第68回日本病院学会
事務部門	野田　宏子	事務職員	学会等	第68回日本病院学会
リハ支援センター	清水　真弓	理学療法士	学会等	全国地域リハビリテーション合同研修大会Inみやぎ2018
リハ支援センター	清水　真弓	理学療法士	学会等	第53回日本理学療法学術研修大会In茨城
リハ支援センター	清水　真弓	理学療法士	学会等	リハビリテーション・ケア合同研究大会　米子2018
医局	小西　哲郎	医師	研修	スモンに関する調査研究班　平成30年度研究報告会
医局	小西　哲郎	医師	研修	スモンに関する調査研究班　平成30年度ワークショップ
医局	小西　哲郎	医師	研修	第46回内科学の展望
医局	小西　哲郎	医師	研修	第58回近畿支部生涯教育講演会
医局	上島圭一郎	医師	研修	平成30年度　第2回班会議
医局	上島圭一郎	医師	研修	平成30年度日本リハビリテーション医学教育推進機構社員総合会同理事会
整形外科部門	菅　寛之	医師	研修	第9回なにわＴＫＡ研究会
整形外科部門	市丸　昌平	医師	研修	HTO手術見学（オリンパスモバイルマテリアル）
整形外科部門	市丸　昌平	医師	研修	第9回なにわＴＫＡ研究会
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	研修	HTO手術見学（オリンパスモバイルマテリアル）
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	研修	平成30年度公認スポーツドクター養成講習会　応用科目Ⅰ
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	研修	平成30年度公認スポーツドクター養成講習会　応用科目Ⅱ
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	研修	平成30年度公認スポーツドクター養成講習会　応用科目Ⅲ
整形外科部門	下村　征史	医師	研修	平成31年　第31回日整会専門試験
整形外科部門	日野　学	医師	研修	平成29年度公認スポーツドクター養成講習会（応用科目Ⅱ）　登録料
整形外科部門	金村　朋直	理学療法士	研修	認定必修研修会　協会指定研修

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
整形外科部門	金村　朋直	理学療法士	研修	平成30年度認定必修研修会
整形外科部門	下谷　聡	理学療法士	研修	FTEX全体研修会
整形外科部門	正生　拓海	理学療法士	研修	FTEX全体研修会
整形外科部門	相馬　寛人	理学療法士	研修	FTEX全体研修会
整形外科部門	谷口　里奈	理学療法士	研修	FTEX全体研修会
整形外科部門	橋尾　彩花	理学療法士	研修	FTEX全体研修会
整形外科部門	吉田　純	理学療法士	研修	FTEX全体研修会
整形外科部門	吉田　昌平	理学療法士	研修	平成30年度認定必修研修会
回復期リハビリテーション部門	久保　元則	医師	研修	初台リハビリテーション病院見学
回復期リハビリテーション部門	根本　玲	医師	研修	第18回（平成30年第1回）嚥下障害実習研修会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	研修	第1回ウェルウォーク研究会
回復期リハビリテーション部門	横関　恵美	医師	研修	平成30年度日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士試験
回復期リハビリテーション部門	柴山　美穂	看護師	研修	平成30年重症度、医療、看護必要度評価者　院内指導者研修
回復期リハビリテーション部門	東　永望	言語聴覚士	研修	言語聴覚士学会　第一回実務者講習会
回復期リハビリテーション部門	岩永　久乃	言語聴覚士	研修	よくわかる失語症講習会ー基礎・応用編ー
回復期リハビリテーション部門	馬淵　拓実	言語聴覚士	研修	認知神経リハビリテーション・ベーシックコース4（広島）
回復期リハビリテーション部門	宮本　宗明	作業療法士	研修	平成30年夏期教育研修講座Bコース
回復期リハビリテーション部門	森本　雅之	作業療法士	研修	医療安全管理者養成講習会（4/20・21・27・5/10・12・26・6/7・9）
回復期リハビリテーション部門	森本　雅之	作業療法士	研修	平成30年度終了者向け医療安全フォローアップ研修
回復期リハビリテーション部門	蛭子　拓真	理学療法士	研修	理学療法士による移動・移乗の介助
回復期リハビリテーション部門	太田　絢野	理学療法士	研修	下肢運動器疾患の理学療法～変形性膝関節症・変形性股関節症を中心に～
回復期リハビリテーション部門	尾﨑　翼	理学療法士	研修	ウェルウオークリーダー研修会
回復期リハビリテーション部門	尾﨑　翼	理学療法士	研修	理学療法士講習会（応用編）　脳のシステム障害とアプローチ
回復期リハビリテーション部門	田崎亜友美	理学療法士	研修	脳卒中に対する座位・立位・歩行の実践的アプローチ
回復期リハビリテーション部門	田中　美穂	理学療法士	研修	第8回動作解析と運動学実習（NAAK）
回復期リハビリテーション部門	中川　恵介	理学療法士	研修	脳血管疾患に対する評価・治療の基礎～転倒予防も含めた二時障害予防～
回復期リハビリテーション部門	中川　恵介	理学療法士	研修	理学療法における予防の実践～予防理学療法の普及について～
回復期リハビリテーション部門	中村　輝彦	理学療法士	研修	「発達」を学んで成人片麻痺のボバースアプローチをより深く知ろう！
回復期リハビリテーション部門	林　博子	理学療法士	研修	脳卒中片麻痺患者の歩行能力向上に必要な知識と実績～倫理論～
回復期リハビリテーション部門	林　博子	理学療法士	研修	下肢運動器疾患の理学療法～変形性膝関節症・変形性股関節症を中心に～
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	研修	ウェルウオークリーダー研修会
看護部門	阿部　哲也	看護師	研修	京滋地区　心電図・もにた講習会　初級編
看護部門	阿部　哲也	看護師	研修	フレイル・サルコペニアに対するケアと嚥下リハの実践
看護部門	稲田祐美子	看護師	研修	私立病院協会　看護部長会・総務委員会
看護部門	今井千賀子	看護師	研修	平成30年重症度、医療、看護必要度評価者　院内指導者研修
看護部門	浦田　雄史	看護師	研修	自立支援に向けたチームアプローチ研修会
看護部門	大井　和枝	看護師	研修	手術看護認定看護師セミナー
看護部門	大久保夏美	看護師	研修	病院医療従事者　認知症対応力向上研修

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
看護部門	岡田　尚子	看護師	研修	環境サービスセミナー～実践現場の方々がしっておきたいことと最新情報
看護部門	岡田　尚子	看護師	研修	第24回中堅者教育研修
看護部門	岡田　尚子	看護師	研修	育もう！周術期看護の質　～手術室看護師の躍進～
看護部門	蒲田　景斗	看護師	研修	麻酔セミナー基礎編
看護部門	公文代真由子	看護師	研修	平成30年重症度、医療、看護必要度評価者　院内指導者研修
看護部門	柴山　美穂	看護師	研修	地域連携ストーマケアセミナーIn京都
看護部門	新川　義憲	看護師	研修	実習指導者講習会
看護部門	新川　義憲	看護師	研修	認知症サポートナース養成研修実践報告会
看護部門		看護師	研修	育もう！周術期看護の質　～手術室看護師の躍進～
看護部門	進士　香織	看護師	研修	平成30年度　看護管理者研修Ⅰ　（主任コース）長期
看護部門	鈴木貴美子	看護師	研修	認定看護管理者教員課程「ファーストレベル」
看護部門	鈴木美希子	看護師	研修	京都看護大学　新人看護職員教育研修
看護部門	田中　美帆	看護師	研修	第118回　全職種研修会
看護部門	田邉千菜美	看護師	研修	麻酔セミナー基礎編
看護部門	谷田砂登美	看護師	研修	手術室感染対策セミナー
看護部門	津野真奈美	看護師	研修	環境サービスセミナー～実践現場の方々がしっておきたいことと最新情報
看護部門	津野真奈美	看護師	研修	脳卒中患者の看護
看護部門	津野真奈美	看護師	研修	藤田リハADL講習会（FIMを中心に）一般・初心者コース
看護部門	中尾　元美	看護師	研修	平成30年重症度、医療、看護必要度評価者　院内指導者研修
看護部門	長野　匡洋	看護師	研修	藤田リハADL講習会（FIMを中心に）一般・初心者コース
看護部門	長野　匡洋	看護師	研修	第118回全職種研修会
看護部門	新田　彩貴	看護師	研修	平成30年度感染対策セミナー
看護部門	新田　彩貴	看護師	研修	看護リーダーシップ研修（卒後3年目限定）
看護部門	新田　彩貴	看護師	研修	育もう！周術期看護の質　～手術室看護師の躍進～
看護部門	新田　彩貴	看護師	研修	麻酔・体位・体温管理の基礎とトラブル回避のポイント
看護部門	東山　昌子	看護師	研修	育もう！周術期看護の質　～手術室看護師の躍進～
看護部門	福田　素江	看護師	研修	ストレスとうまく付き合う怒りの感情コントロール
看護部門	福田　素江	看護師	研修	日々の看護実践を行なう上での臨床判断について考えてみよう
看護部門	福田　素江	看護師	研修	麻酔セミナー基礎編
看護部門	細越万里子	看護師	研修	第3回医療従事者のための感染対策セミナー
看護部門	増田　紀代	看護師	研修	麻酔セミナー基礎編
看護部門	増田　紀代	看護師	研修	よくつかう周術期薬の知識
看護部門	増田　智子	看護師	研修	「麻酔」「体位」「体温」管理の基礎とトラブル回避のポイント
看護部門	水谷　幸奈	看護師	研修	京都看護大学　新人看護職員教育研修
看護部門	水谷　幸奈	看護師	研修	整形外科疾患の術前・術後のケアとリハビリ・退院指導
看護部門	水谷　幸奈	看護師	研修	よくつかう周術期薬の知識
看護部門	光岡　麻里	看護師	研修	平成30年重症度、医療、看護必要度評価者　院内指導者研修
看護部門	山岸　理穂	看護師	研修	CAPE褥瘡予防セミナー
看護部門	山岸　理穂	看護師	研修	厚生労働省　近畿厚生局　平成30年度　医療安全に関するセミナー
看護部門	吉川　美稀	看護師	研修	京都看護大学　新人看護職員教育研修
看護部門	吉川　美稀	看護師	研修	整形外科疾患の術前・術後のケアとリハビリ・退院指導

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
看護部門	吉田　敦子	看護師	研修	麻酔セミナー基礎編
看護部門	吉田　幸世	看護師	研修	CAPE褥瘡予防セミナー
看護部門	吉田　幸世	看護師	研修	テクノエイド係　福祉用具見学（三笑堂ショールーム）
看護部門	榊原久見子	ｹｱﾜｰｶｰ	研修	第2回看護リーダー研修会
看護部門	中山　　泰	ｹｱﾜｰｶｰ	研修	テクノエイド係　福祉用具見学（三笑堂ショールーム）
看護部門	花岡　千恵	ｹｱﾜｰｶｰ	研修	看護補助者研修
看護部門	藤原ゆかり	ｹｱﾜｰｶｰ	研修	看護補助者研修
医療技術部門	中平　美紀	管理栄養士	研修	CAPE褥瘡予防セミナー
医療技術部門	中平　美紀	管理栄養士	研修	医師・歯科医師とメディカルスタッフのための栄養管理セミナー
医療技術部門	中平　美紀	管理栄養士	研修	平成30年診療報酬改定対応　回復期リハビリテーション病棟　管理栄養士研修会
医療技術部門	湯浅　志保	管理栄養士	研修	京都府栄養士会　生涯学習研修会
医療技術部門	湯瀬　志保	管理栄養士	研修	京都府栄養士会　生涯学習研修会
医療技術部門	佐々木理恵	検査技師	研修	多種職連携のための臨床検査技師能力開発講習会
医療技術部門	佐々木理恵	検査技師	研修	チーム医療実践セミナー 2018京都
医療技術部門	中井　登代	薬剤師	研修	第10回医薬品安全管理者等交流会
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	研修	第13回大阪感染制御薬剤師講習会特別講演「整形外科領域における感染症治療について
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	研修	第14回医療安全感研修「薬剤業務・医療安全に役立つコミュニケーションツール」
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	研修	第75回小規模病院懇談会「薬剤師がかかわる倫理問題の実例を検討する」
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	研修	京都私立病院協会　薬剤師部会運営委員会・講演会
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	研修	第13回医療安全研修会
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	研修	第5回専門薬剤師育成委員会講習会
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	研修	平成30年度　麻薬・薬事講習会
医療技術部門	古川吏恵美	薬剤師	研修	平成30年度日本病院薬剤師会　医療品安全管理責任者等講習会（基礎編）
事務局	竹村　淳一	事務職員	研修	病院経営管理研修会
事務部門	草部　京子	看護師	研修	第13回地域包括ケア時代の中京区在宅医療を考えるワークショップ
事務部門	石田　尚己	事務職員	研修	労災診療費算定実務研修
事務部門	井上　和哉	事務職員	研修	H30年度京都府基幹災害拠点病院研修
事務部門	井上　和哉	事務職員	研修	普通第一種圧力容器取扱作業主任者技能講習
事務部門	井上　和哉	事務職員	研修	平成30年度　医療ガス安全管理者講習会　2日間コース
事務部門	井上　和哉	事務職員	研修	防火管理　新規講習
事務部門	井上　和哉	事務職員	研修	臨床工学技師からの提案～医療機器の管理方法を一緒に考えませんか～
事務部門	遠藤　良太	事務職員	研修	公益法人・一般法人　会計セミナー【入門編】
事務部門	遠藤　良太	事務職員	研修	人事労務セミナー　新年度手続き業務と働き方改革
事務部門	佐野　綾子	事務職員	研修	地域連携パス運営会議
事務部門	佐野　綾子	事務職員	研修	平成30年度　虐待対策研修会
事務部門	新谷　圭由	事務職員	研修	H30年度京都府基幹災害拠点病院研修
事務部門	新谷　圭由	事務職員	研修	年末調整説明会
事務部門	新谷　圭由	事務職員	研修	年末調整セミナー
事務部門	新谷　圭由	事務職員	研修	働き方改革関連法説明会
事務部門	新谷　圭由	事務職員	研修	病院における「働き方改革」時代の労務管理セミナー

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
事務部門	新谷　圭由	事務職員	研修	防火管理　新規講習
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	研修	おこしやす～ねっとフォーラム「高次脳機能障害を学ぶ、そして考える」
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	研修	京都脳血管内治療シンポジュウム
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	研修	京都民医連中央病院　がん診療連携セミナー
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	研修	第13回地域包括ケア時代の中京区在宅医療を考えるワークショップ
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	研修	平成30年中京区在宅医療センター総会及び第一回研修会
事務部門	髙橋　和子	事務職員	研修	在宅医療点数の基礎知識
事務部門	多田　裕香	事務職員	研修	医師事務作業補助者コース第18期生
事務部門	中川　裕子	事務職員	研修	リーダーを支える部下力養成講座
事務部門	野田　宏子	事務職員	研修	リーダーを支える部下力養成講座
事務部門	早川　佳克	事務職員	研修	べてらん君ユーザー会vol.19
事務部門	早川　佳克	事務職員	研修	個人情報管理・担当責任者養成研修会
事務部門	林　　亮治	事務職員	研修	データー提出加算対策セミナー
事務部門	林　　亮治	事務職員	研修	データー提出加算に関する研修会
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修	医療従事者確保・定着のための経営・勤務環境改善研修
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修	学卒求人説明会・人権啓発促進員研修会・人権啓発セミナー
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修	事務長会「労務研修会」 働き方改革に伴う医療機関の労務管理
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修	病院経営管理士通信教育　スクーリング
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修	病院経営管理士通信教育　スクーリング
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修	病院における「働き方改革」時代の労務管理セミナー
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修	平成30年度事業所防災・防火セミナー
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修	防火管理　新規講習
事務部門	向坂亜友美	社会福祉士	研修	平成30年度　地域連携強化推進研修　1日目
事務部門	向坂亜友美	社会福祉士	研修	平成30年度　地域連携強化推進研修　2日目
事務部門	向坂亜友美	社会福祉士	研修	平成30年度　地域連携強化推進研修　3日目
事務部門	佐野　綾子	社会福祉士	研修	平成30年度社会福祉士実習指導者講習会
事務部門	佐野　綾子	社会福祉士	研修	第25回ソーシャルワーカー研修会（アドバンス研修）
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修	平成30年度医療ソーシャルワーカー基幹研修1
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修	BRAIN AND HEART ATTACK SEMINAR 2018
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修	京都市立病院地域医療フォーラム
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修	更生会武田病院　講演会
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修	厚生会武田病院　地域医療連携　CAD・PAD学術講演会2019
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修	第4回中京区権利擁護ネットワーク
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修	退院支援専門ソーシャルワーク研修
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修	脳卒中と心房細動トータルセミナー
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修	平成30年度病診連携懇話会　京都府立医科大学附属病院
事務部門	田村早奈美	社会福祉士	研修	インテグレイテブ・ッショートタイム・トリートメント（総合的短期型支援）
事務部門	田村早奈美	社会福祉士	研修	地域連携パス運営会議
リハ支援センター	清水　真弓	理学療法士	研修	バリアフリー 2018
医局	小西　哲郎	医師	その他	「スモンに関する調査研究班」リーダー会議
医局	小西　哲郎	医師	その他	平成30年度スモン調査研究班　近畿ブロック研修打合せ会議
回復期リハビリテーション部門	岩永　久乃	言語聴覚士	その他	京都光華女子大学

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
回復期リハビリテーション部門	髙野　麻美	言語聴覚士	その他	京都医健専門学校
看護部門	小林　依子	CW	その他	輝生会　病院見学
看護部門	稲田祐美子	看護師	その他	看護部長会　定例会・総務委員会
看護部門	稲田祐美子	看護師	その他	看護部長会　定例会・総務委員会
看護部門	稲田祐美子	看護師	その他	私立病院協会　看護部長会・総務委員会
看護部門	稲田祐美子	看護師	その他	私立病院協会　看護部長会・総務委員会
看護部門	稲田祐美子	看護師	その他	市立病院協会　看護部長会1月定例会・新春懇親会
看護部門	稲田祐美子	看護師	その他	臨地実習協働運営委員会
看護部門	津野真奈美	看護師	その他	回復期リハビリテーション看護師認定授与式
看護部門	細越万里子	看護師	その他	京都看護大学　平成30年度卒業式
看護部門	細越万里子	看護師	その他	市立病院協会　看護部長会1月定例会・新春懇親会
看護部門	山田　美香	看護師	その他	京都西部医療安全ネットワーク
看護部門	山田　美香	看護師	その他	平成30年度京都第一赤十字病院　病診連携懇話会
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	その他	京都私立病院協会　薬剤師部会運営委員会
事務部門	草部　京子	看護師	その他	シミズ病院グループ　第5回地域連携懇話会
事務部門	草部　京子	看護師	その他	第2回中京区在宅医療介護連携推進協議会
事務部門	草部　京子	看護師	その他	第3回中京区在宅医療介護連携推進協議会
事務部門	井上　和哉	事務職員	その他	医療廃棄物中間処分場・最終処分場見学会
事務部門	草部　京子	事務職員	その他	京都第二赤十字病院　病病・病診連携懇話会
事務部門	草部　京子	事務職員	その他	第1回中京区在宅医療介護連携推進協議会
事務部門	草部　京子	事務職員	その他	平成30年度京都第一赤十字病院　病診連携懇話会
事務部門	佐野　綾子	事務職員	その他	京都第二赤十字病院　病病・病診連携懇話会
事務部門	佐野　綾子	事務職員	その他	平成30年度京都第一赤十字病院　病診連携懇話会
事務部門	佐野　綾子	事務職員	その他	みぶ医療連携を考える会
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	その他	平成30年医療法人健康会　京都南病院グループ地域連携懇話会
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	その他	京都第二赤十字病院　病病・病診連携懇話会
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	その他	第1回中京区在宅医療介護連携推進協議会
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	その他	平成30年度京都第一赤十字病院　病診連携懇話会
事務部門	鈴鹿　三郎	事務職員	その他	みぶ医療連携を考える会
事務部門	村本奈巳子	事務職員	その他	みぶ医療連携を考える会
事務部門	向坂亜友美	社会福祉士	その他	連携実務者交流会
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	その他	平成30年地域医療連携懇話会
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	その他	京都逓信病院医療連携懇談会
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	その他	第1回地域連携カンファレンス
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	その他	第2回中京区在宅医療介護連携推進協議会
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	その他	第3回中京区在宅医療介護連携推進協議会
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	その他	中京区在宅医療センター　第2回難病研修
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	その他	連携実務者交流会
事務部門	田村早奈美	社会福祉士	その他	第36回連携実務者交流会
事務部門	田村早奈美	社会福祉士	その他	地域連携パス会議

実習生受入状況

平成30年度 実習生受入状況

学校名	職種	実習内容	実習期間	実習生人数
京都看護大学	看護師	生活行動援助論実習Ⅱ	7/17 ～ 26	5名
京都看護大学	看護師	高齢者支援論実習	10/1 ～ 11/30	16名
京都看護大学	看護師	生活行動援助論実習Ⅰ	1/9 ～ 24	5名
京都看護大学	看護師	高齢者支援論	3/5 ～ 8	1名
京都学園大学	看護師	看護体験実習	9/4 ～ 6、10 ～ 12	10名
京都学園大学	看護師	セルフケア支援実習	10/15 ～ 11/2	4名
京都学園大学	看護師	セルフケア支援実習	1/21 ～ 2/8	4名
京都学園大学	看護師	セルフケア支援実習	2/11 ～ 3/1	4名
京都学園大学	看護師	看護統合実習	9/17 ～ 24	3名
京都府医師会看護専門学校	看護師	成人看護学実習Ⅲ	5/21 ～ 6/29	6名
京都府医師会看護専門学校	看護師	老年看護学実習Ⅱ	6/18 ～ 9/29 7/23 ～ 31	10名
京都府医師会看護専門学校	看護師	老年看護学実習Ⅲ	5/21 ～ 7/20	6名
京都大学医学部	作業療法士	臨床実習Ⅳ	5/28 ～ 7/27	1名
京都光華女子大学	言語聴覚士	1日見学実習	11.20	1名
京都光華女子大学	言語聴覚士	臨床総合実習	6/25 ～ 8/18	1名
京都橘大学	理学療法士	総合臨床実習	5/28 ～ 7/6	1名
佛教大学	作業療法士	臨床基礎実習Ⅱ	2/20 ～ 26	2名
佛教大学	作業療法士	臨床評価実習	11/26 ～ 12/14	1名
佛教大学	作業療法士	総合臨床実習Ⅰ	4/9 ～ 6/1	1名
佛教大学	理学療法士	総合臨床実習Ⅰ	4/3 ～ 5/31	1名
森ノ宮医療大学	理学療法士	臨床総合実習	9/3 ～ 10/26	1名
京都医健専門学校	言語聴覚士	臨床見学実習	8.6	1名
京都医健専門学校	作業療法士	臨床実習	8/20 ～ 10/20	1名
京都医健専門学校	言語聴覚士	総合実習Ⅱ	10/17 ～ 11/28	1名
土佐リハ学院	理学療法士	総合2Ⅱ期	7/11 ～ 9/4	1名
日本福祉大学	理学療法士	評価実習	1/28 ～ 2/24	1名
			合　　計	48名

平成31年度 実習生受入状況

学校名	職種	実習内容	実習期間	実習生人数
京都看護大学	看護師	課題探究	5/13 ～ 16　4日間	3名
京都医師会看護専門学校	看護師	老年看護学実習Ⅲ	5/27 ～ 6/14	3名
京都医師会看護専門学校	看護師	成人看護学実習Ⅲ	5/27 ～ 6/14	3名
京都医師会看護専門学校	看護師	成人看護学実習Ⅲ	6/17 ～ 7/5	3名
京都医師会看護専門学校	看護師	老年看護学実習Ⅲ	7/8 ～ 7/26	3名
西京極中学校	中学生	チャレンジ体験 10時～ 13時	9/3 ～ 9/6　3日間	2名

京都府リハビリテーション教育センター実地研修

開催日　①平成30年7月5日（木）
　　②平成30年10月18日（木）

修了者　①医師2名
　　②医師2名

内　容	回復期リハビリテーション病棟について	・回復期リハ病棟の仕組み、対象疾患、入院期間、入院スケジュールなどの概説 ・入院判定会議見学
	症例リハビリ診察・訓練 新入院患者合同評価	・昼食時，当院提供の嚥下食を管理栄養士の説明を聞きながら試食 ・昼食場面の見学
	症例リハビリ診察・訓練	・当日にカンファレンス予定の患者を中心に症例提示（カルテ・画像） ・訓練の実際の見学 ・診察のポイントなどを解説
	カンファレンス見学	・病棟カンファレンスの見学
	自助具レクチャー	・自助具の解説
	嚥下レクチャー	・嚥下，嚥下造影検査について解説
	嚥下食体験	・嚥下造影検査の見学
	総括	・研修総括　アンケート　ディスカッションなど

京都府立医科大学　クリニカルクラークシップ

【リハビリテーション科】

医学部（5. 6回生）

［実施日］

5/22（火）、29（火）	1名
6/5（火）、12（火）	1名
6/19（火）、26（火）	1名
8/8（水）	1名
12/3（月）～7（金） 12/13（木）	1名
1/15（火）～18（金） 1/31（木）	1名
2/18（月）～20（水） 2/22（金） 2/18（木）	2名

合計　8名

医師・研修医

［実施日］

8/29（水）	1名	医師
9/10（水）～14（金）	1名	研修医
12/19（水）～20（木）	1名	研修医
3/18（月）～20（水） 3/22（金）	1名	研修医

合計　4名

【整形外科】

医学部（5. 6回生）

［実施日］

4/24（火）	2名
5/29（火）	1名
6/26（火）	2名
7/24（火）	1名
12/7（金）	1名
3/12（金）	1名

合計　8名

［内　容］

1. 外来診察見学
2. リハビリ見学
3. OPE見学

［内　容］

1. 診察　リハビリテーション医療の見学
2. 合同カンファレンスの見学
3. カンファレンスの見学
4. チームアプローチについて学ぶ
5. 嚥下造影検査の見学
6. 装具診察の見学

がくさい健康塾

記載者：鈴鹿　三郎

京都商工会議所におきまして、平成30年度「がくさい病院健康塾」を開催致しました。この会は、医療講演を通じて地域の皆様に健康等に関する情報を発信する活動であります。

今回は『健康寿命を延ばそう！ロコモって何？』というテーマで、京都府医師会健康日本21対策・スポーツ医学委員会委員、日本整形外科学会公認ロコモアドバイスドクターの劉　和輝先生にご講演をいただきました。

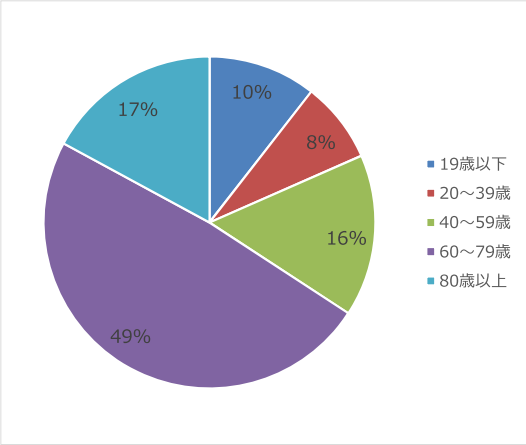
ロコモティブシンドロームに関する画像や予防体操を交えた講演は非常にわかりやすく、会場はとても盛り上がり、あっという間に時間が過ぎたように感じました。また講演終了後には、もっと知りたいという来場者の方に個別で質問の対応をさせて頂きました。アンケートでは「ビデオや画像、実演を交えての講演であった為、非常にわかりやすかった」「さっそく簡単な運動から始めたい」等のご意見を多数いただきました。頂いたご意見は、今後の参考にさせて頂きます。

次年度も引き続き地域に貢献できる健康講座の開催を続けて参ります。

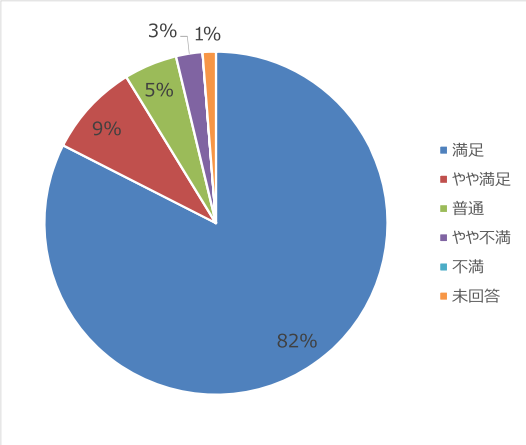
患者アンケート調査結果（入院）

3階病棟	男性：21名	女性：31名	合計：52名			
4階病棟	男性：12名	女性：16名	合計：28名			
合計	男性：33名	女性：47名	合計：80名	配布枚数：167枚	回収枚数：80枚	回収率：約48%

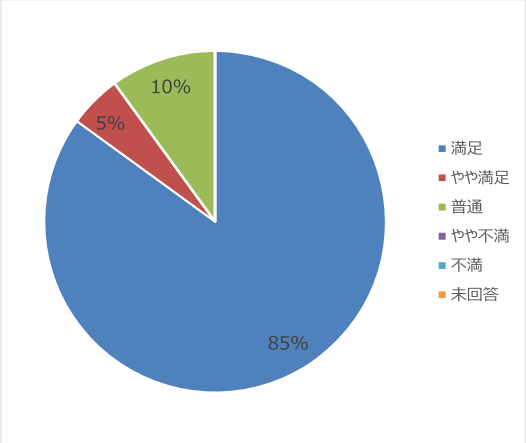
年齢構成



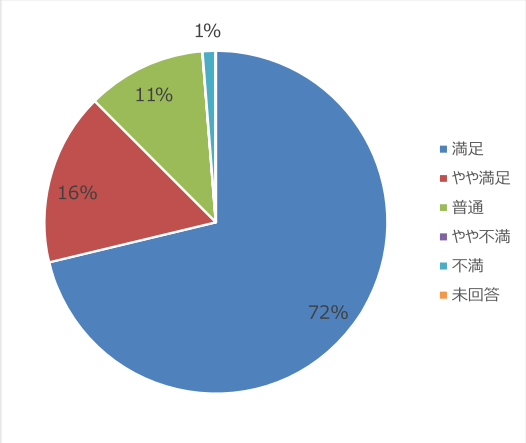
言葉使いや対応について（全体）



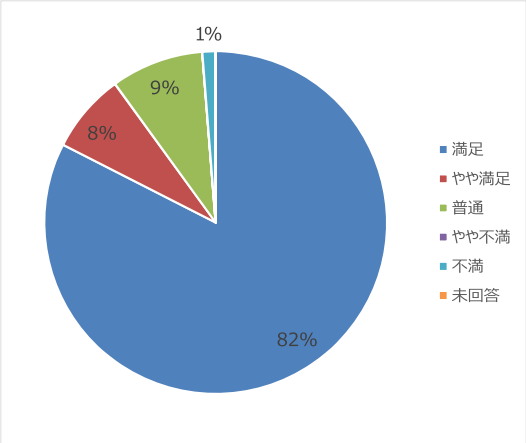
スタッフの身だしなみについて



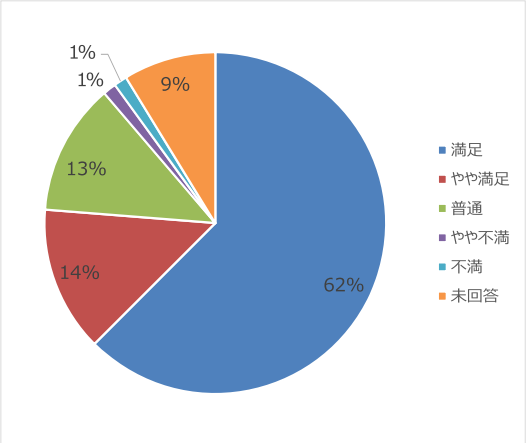
プライバシーの配慮について



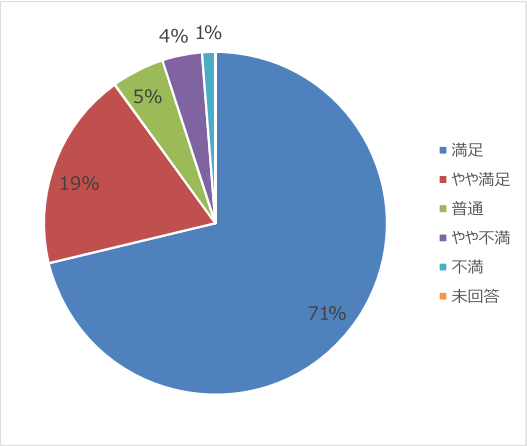
安全な医療サービスについて



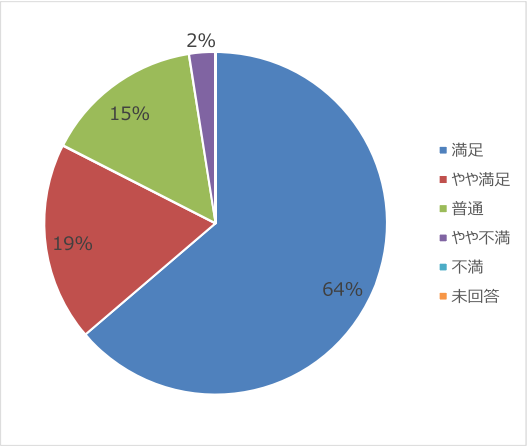
退院後の不安や悩みの相談について



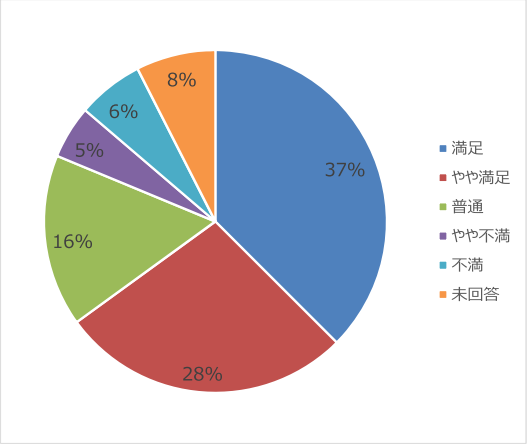
施設や設備（ベッドトイレ洗面等）について



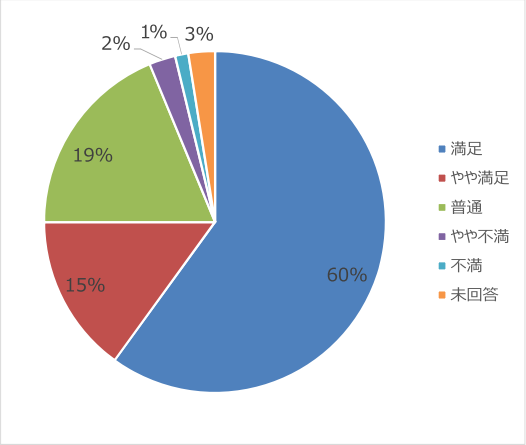
病室の清潔さ、温度などの環境について



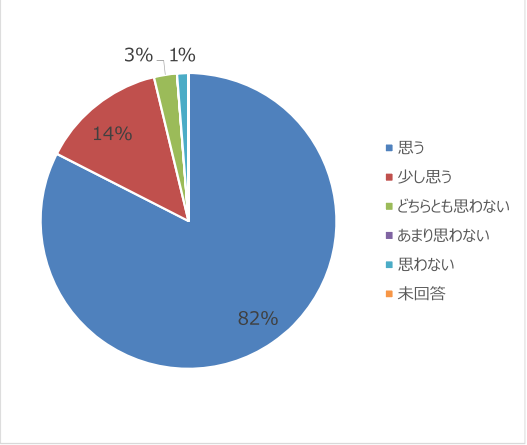
食事の温度・味・量について



面会時間について



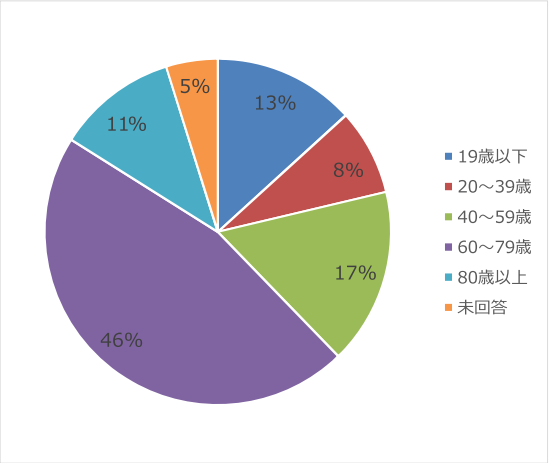
当院を紹介したいですか



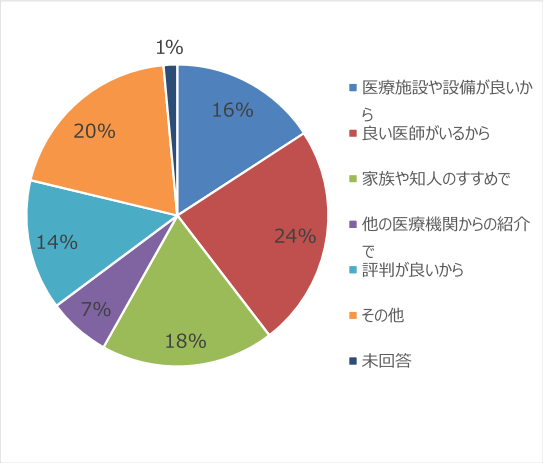
患者アンケート調査結果（外来）

合計	男性：83名	女性：165名	無回答：1名	配布枚数：356枚	回収枚数：249枚	回収率：約70%

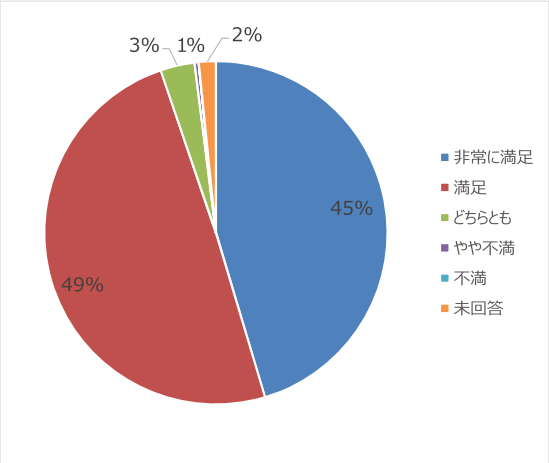
年齢構成



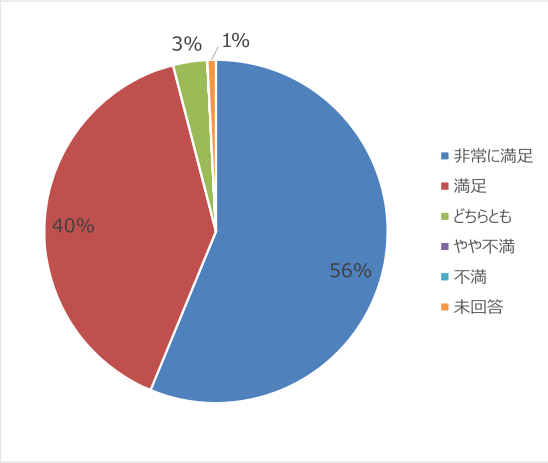
当院を選んだ理由について



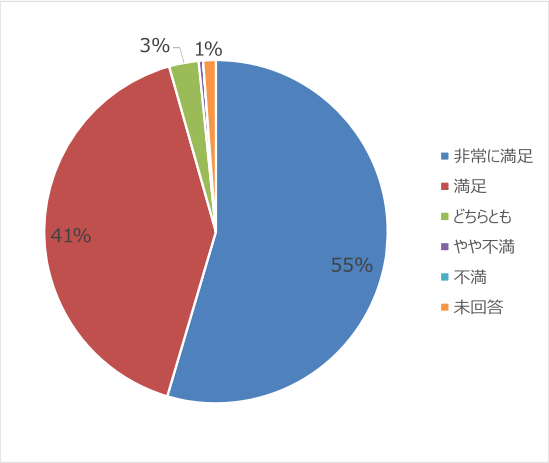
院内の設備、雰囲気について



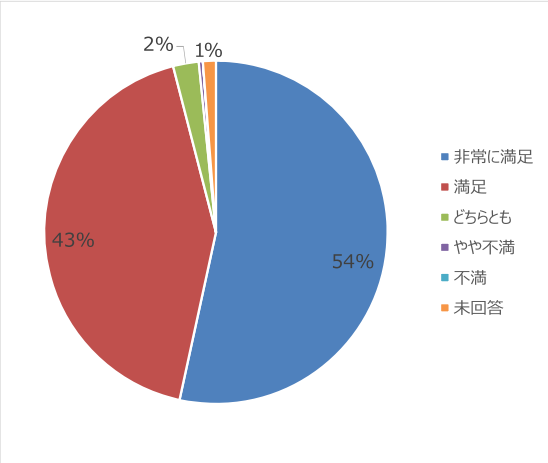
医師の言葉使いや対応について



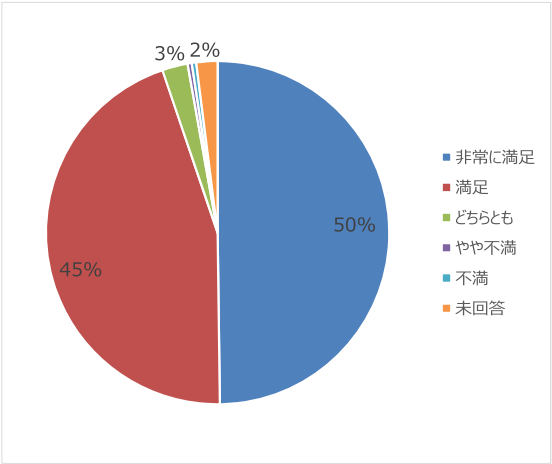
医師の説明のわかりやすさ、相談のしやすさについて



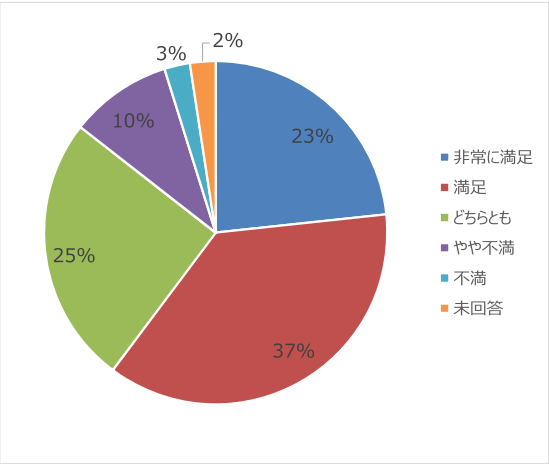
看護師の言葉使いや対応について



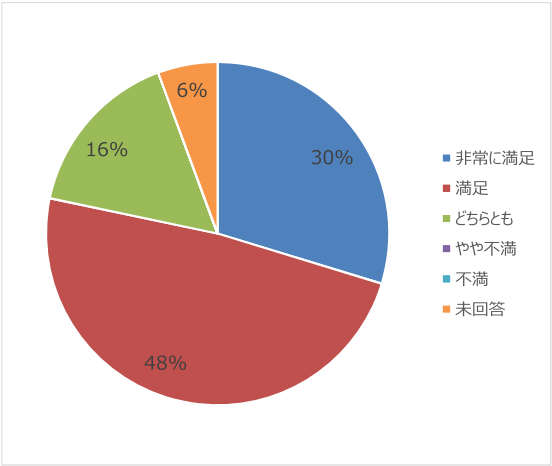
看護師の説明のわかりやすさ、相談のしやすさについて



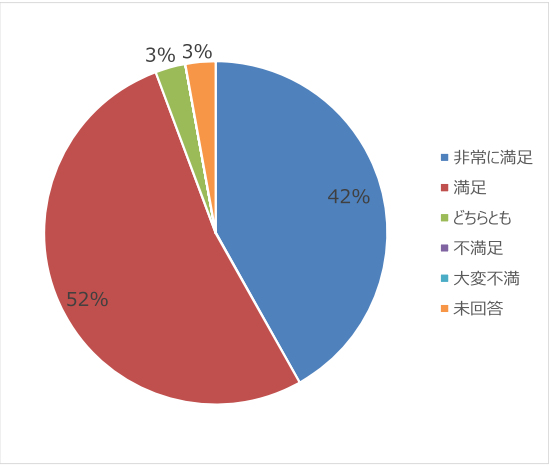
診察の待ち時間について



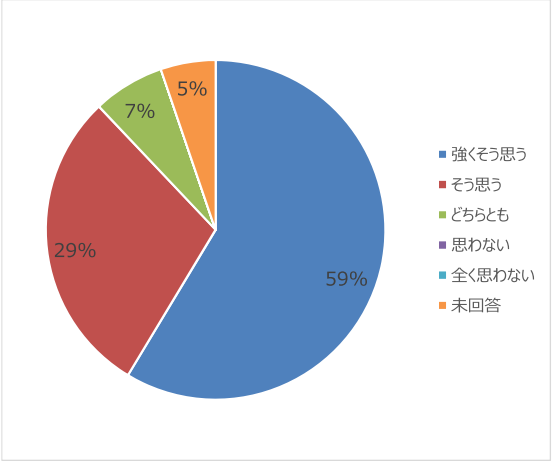
会計の待ち時間について



当院の満足感について



当院を紹介したいですか



京都市域京都府地域リハビリテーション支援センター

記載者：清水　真弓

センター長：小西　哲郎（院長）
コーディネーター：清水　真弓（理学療法士）
サブコーディネーター：中西　文彦（作業療法士）
主任：清水　真弓（副センター長／コーディネーター／理学療法士）

［年間目標］

『圏域内でのリハビリテーションの啓発とネットワークの構築、連携活動の強化』

［主な活動］

I. 京都府リハビリテーションコーディネート事業（委託）、その他事業（補助金）

1. 圏域連絡会等

開催日　平成31年3月23日（金）
参加者数　17名
内容　「高齢者の自立支援及び要介護状態の重度化防止の取組と府・市・3療法士会におけるリハビリテーション専門職との関わりについて」
構成団体　医療機関：がくさい病院
行政機関：京都市　保健福祉局健康長寿のまち・京都推進室、健康長寿企画課　地域包括ケア第一係、介護ケア推進課　介護予防推進係、認定給付係、保健福祉局地域リハビリテーション推進センター 相談課 地域リハビリテーション推進係
京都府リハビリテーション支援センター

2. 地域包括支援センター等に対するリハビリテーションに関する助言・相談対応

件数　98件
内容
・京都府内全域〈京都府地域連携パス会議〉在宅リハビリテーション連絡会・協力病院事業等の事業紹介
・京都市との地域リハビリテーション支援
〈京都市介護予防ケアマネジメント支援事業〉25か所
〈京都市介護予防推進センター　情報交換会〉4回
〈京都市短期集中運動型　情報交換会〉1回
〈京都市高次脳機能障害者支援ネットワーク　情報交換会〉1回
・行政区での連携
〈北区・上京区に認知症サポートネットワーク連絡会〉3回
〈北区地域包括支援センター運営協議会〉2回／〈健康長寿のまち・北区　推進会議〉3回
〈左京区SOSネットワーク部会　駅カフェプロジェクト〉平成30.9.29（土）開催、叡山電車　八瀬叡山口駅
〈向島ニュータウンまちづくり事業 暮らし安心ワーキング〉5回／
〈中京区在宅医療介護連携推進協議会〉5回
・地域包括支援センターとの連携
〈北区紫竹地域包括支援センター 圏域内事業所実技研修会〉平成30年7月13日（金）

〈左京区左京南地域包括支援センター〉高齢者居場所づくり「はなカフェ」、つながるキッチンプロジェクト、よろづカフェ

・地域ごとのリハビリテーションネットワーク

〈在宅リハビリテーション連絡会〉北/上京、中京、西京/右京、伏見（伏見）、左京、山科/伏見（醍醐▸深草）、東山/下京/南

・認知症に関する連携

〈京都バス 認知症サポーター養成講座〉平成30年4月17日（火）

〈京都市交通局 認知症サポーター養成講座〉計4回

〈左京南地域SOSネットワーク 錦林小学校認知症あんしんサポーター養成講座〉1回

〈金閣学区社協・すこやか教室 認知症サポーター養成講座〉計2回

〈認知症カフェ〉おれんじ庵金閣（北区、金閣学区）毎月実施

・介護予防に関する連携

〈右京区介護予防推進センター リハビリテーション教室 関係者会議〉平成30年7月31日（火）

〈上京区介護予防推進センター 健康講座〉10▸11▸3月開催分

〈上京区介護予防推進センター 京都市自主グループ化モデル事業〉平成31年2～3月実施

・その他（ケアマネジャー、看護職・介護職、地域の支援者に対する支援）

〈北区居宅介護（予防）支援事業者連絡会〉

〈西京区高齢サービス関係機関ケアマネジャー会議〉

〈下京区島原地域包括支援センター 第12回島原楽楽広場〉

〈左京区事業者連絡協議会〉〈上京区「ささえ愛の会」実技研修会〉

〈リハビリテーション▸ケアマネジャー交流会〉3カ所

〈京都手話通訳問題研究会 医療学習会〉〈上京区老人クラブ研修会〉

〈左京区元新洞学区社協研修会〉〈京北ヘルスケアカレッジ 番外編〉

〈北区高齢すこやかステーション巡り スタンプウォークラリー〉

〈左京区松ヶ崎学区 すこやか教室〉〈北区雲ケ畑学区 すこやか教室〉

〈上京区 地域支え合い活動創出事業▸地域支え合い活動入門 男性の居場所づくり〉他

3. 事業者支援のための訪問・相談

件数　48件

内容　地域包括支援センター　22ヵ所、特養・小規模多機能等施設　11ヵ所、居宅介護支援事業所10カ所 等、1ケースの平均訪問相談回数：1.8回、総訪問回数：86回

4. リハビリテーションサービス窓口担当者との定期的な事例検討会の開催

開催日	参加者	テーマ
1 平成31年2月2日（土）	36名	「在宅生活でリハビリテーション依存的な支援を求め続ける事例」
2 平成31年2月2日（土）	35名	「グループホームでのポジショニングの関わり支援の事例」
3 平成31年2月2日（土）	35名	「特養施設での摂食嚥下障害者への取り組み事例」
4 平成31年2月26日（火）	22名	「ケアマネジャーの就労支援 第2弾」

内容

1「在宅生活でリハビリテーション依存的な支援を求め続ける事例」

事例提供者＝京都府介護支援専門員会　高木（ケアマネジャー）

2「グループホームでのポジショニングの関わり支援の事例」

事例提供者＝花友はなせ　清原（ケアマネジャー）・小倉（介護福祉士）

3「特養施設での摂食嚥下障害者への取り組み事例」

事例提供者＝京都老人ホーム　長島（介護福祉士）・古屋（言語聴覚士）

4「ケアマネジャーの就労支援　第2弾」若年障害者（高次脳機能障害、）の就労支援事例

事例提供者＝堀川病院居宅介護支援事業所　福森（ケアマネジャー）

5. 全般的な事業

(1) 情報発信・研修、高次脳・障害児者、その他の取組

○ホームページの適時更新

○事業所調査（訪問リハビリテーション、通所リハビリテーション事業所一覧作成・配布）

○リハビリテーション専門職に対する研修会

〈受入研修（基礎コース）〉計1名、期間:11/12（月）～16（金）

〈勉強会〉リハビリテーション従事者向け研修（リハビリテーション勉強会）

第8回「促通反復療法～基礎研修～」

平成30.8.29（水）18:30～20:00　蘇生会総合病院　リハビリテーション室

御所南リハビリテーションクリニック　久保田OT、蘇生会総合病院　麻田PT・木下OT・布施OT・丸橋PT

第9回「リハビリテーション職が在宅で使えるリハビリテーションロボット～最先端技術を生活行為に応用する～」

平成30.9.26（水）18:30～20:00　がくさい病院　会議室

大阪河崎リハビリテーション大学　南OT、（株）シーエフロボタス　逢坂PT

(2) 看護職・介護職リハビリテーションステップアップ研修会の開催

○第7回リハビリテーション福祉用具体験研修会（2/2（土）京都府中小企業会館801会議室）

〈企画研修会〉看護職・介護職ステップアップ研修の実施

II. 京都市域リハビリテーション協力病院支援事業

1. 京都市域リハビリテーション協力病院会議

第13回

開 催 日　平成30年6月11日（月）

開催場所　ラボール京都　第8会議室

参 加 者　各協力病院担当者　51名

内　　容　第13回地域リハビリテーション協力病院会議

1）京都市域リハビリテーション協力病院支援事業　H29年度事業報告、H30年度事業計画

2）研修会・グループ検討会

講師：公益社団法人日本理学療法士協会　副会長　斉藤秀之

「回復期リハビリテーション病棟を持つ医療機関と地域リハビリテーション活動を考える」

グループディスカッション：「回復期リハビリテーション病棟を持つ医療機関で必要な地域リハビリテーション活動」「組織の中でのリハビリテーションの在り方「人材育成」」

第14回

開 催 日　平成30年11月26日（月）

開催場所　がくさい病院　会議室

参 加 者　各協力病院担当者　24名

内　　容　第14回地域リハビリテーション協力病院会議

1）京都市域リハビリテーション協力病院支援事業　H30年度事業実施 中間報告

2）各協力病院より、H30年度の取り組み事業について 計画・報告等 中間報告

第15回

開 催 日　平成31年3月28日（木）

開催場所　がくさい病院　会議室

参 加 者　各協力病院担当者　26名

内　　容　第15回地域リハビリテーション協力病院会議

1）各協力病院よりH30年度の実施事業について　年間報告

2）情報提供

構成機関

協力病院	京都博愛会病院／京都警察病院／京都大原記念病院／脳神経リハビリ北大路病院／京都民医連第二中央病院／洛陽病院／近衛リハビリテーション病院／京都民医連中央病院／京都久野病院／洛和会音羽リハビリテーション病院／京都武田病院／十条武田リハビリテーション病院／宇多野病院／洛西シミズ病院／蘇生会総合病院／京都リハビリテーション病院／むかいじま病院
行政機関	京都府リハビリテーション支援センター

2. 事業協力病院

（福）京都博愛会 京都博愛会病院、警察共済組合 京都けいさつ病院、（医）行陵会 京都大原記念病院、（医）一仁会 脳神経リハビリ北大路病院、（公社）信和会 京都民医連第二中央病院（現（公社）信和会京都民医連あすかい病院）、（医）寿尚会 洛陽病院、（医）行陵会 近衛リハビリテーション病院、（公社）京都保健会 京都民医連中央病院、（医）育生会 京都久野病院、（医）洛和会 洛和会音羽リハビリテーション病院、（医）恵心会 京都武田病院、（医）医道会 十条武田リハビリテーション病院、（独）国立病院機構 宇多野病院、（医）清仁会 洛西シミズ病院、（医）蘇生会 蘇生会総合病院、（医）清水会 京都リハビリテーション病院、（医）健幸会 むかいじま病院

3. 各協力病院の取り組み

○相談窓口の設置：電話相談　合計7件

○研修会・事例検討会の開催：全18回開催、合計327名の参加

○地域包括支援センター等に対するリハビリテーションサービスに関する助言・相談

訪問相談　計2件（京都武田病院、洛西シミズ病院）

地域ケア会議での講師=1件、民医連第二中央病院

学区単位の地域サロンへの協力=2件、洛陽病院・むかいじま病院

介護支援事業所連絡会での講師=1件、洛和会音羽リハビリテーション病院

在宅リハビリテーション連絡会への協力＝京都久野病院、洛和会音羽リハビリテーション病院、十条武田リハビリテーション病院

○関係機関への発信、その他広報

新入職員について

平成30年4月　がくさい病院では14名の新入職員が入職した。

	氏　名	部　門	配　属	職　種
1	湯瀬　志保	医療技術部門	栄養科	管理栄養士
2	鈴木美希子	回復期リハビリテーション部門	B病棟	看護師
3	長野　匡洋	回復期リハビリテーション部門	B病棟	看護師
4	公文代真由子	回復期リハビリテーション部門	B病棟	看護師
5	田中　美帆	回復期リハビリテーション部門	B病棟	看護師
6	小林　依子	回復期リハビリテーション部門	B病棟	ケアワーカー
7	菅森　将弥	回復期リハビリテーション部門	B病棟	作業療法士
8	阿原　悠真	回復期リハビリテーション部門	B病棟	作業療法士
9	杉本　美和	回復期リハビリテーション部門	B病棟	作業療法士
10	太田垣沙和	回復期リハビリテーション部門	B病棟	理学療法士
11	菱川　法和	回復期リハビリテーション部門	B病棟	理学療法士
12	吉川　美稀	整形外科部門	A病棟	看護師
13	水谷　幸奈	整形外科部門	A病棟	看護師
14	松田　亜弓	整形外科部門	A病棟	看護師

病院機能評価受審について

記載者：髙田　賢悟

［主な活動］

【受審機能種別】

主機能：リハビリテーション病院＜ 3rdG：Ver.2.0 ＞

付加機能：リハビリテーション機能（回復期）＜ Ver.3.0 ＞

平成31年2月に公益財団法人日本医療機能評価機構が第三者として、組織の運営管理および提供される医療について評価する病院機能評価を受審した。

平成30年1月に受審チームを発足し、1年かけて準備を行った。受審チームは各部署の所属長及びキーマンをメンバーとし、チーム全体で行う全体会議、よりメンバーを絞ったリーダー会議を月1回ずつ開催し、情報の共有および院内調整を図った。発足当時に他院の受審に向けた取り組みを参考にしたいとの声があり、同じ機能種別を受審された病院様に依頼し、病院見学を行った。病院見学では受審までの取り組みの他、各評価項目に対するアドバイスや対策等を教えていただき、見学内容をチーム全体に共有した。各評価項目を部署および委員会に割り振った。評価の要素に対して自己評価を行い、評価の低い項目を優先的に改善することとした。また受審前に提出する自己評価調査票、現況調査票、その他必要書類、受審当日に必要な準備書類を作成することとした。要改善項目および各提出書類は管理表及びリーダー会議で進捗を確認するようにし、全体で進捗内容を共有できるよう努めた。また、症例トレース型のケアプロセス調査に向けて、B病棟医師及びチームマネジャーが中心となり、対象症例の選定と質疑応答の予行練習等を実施した。平成30年8月にはサーベイヤー派遣を実施し、本審査と近いかたちでサーベイヤーから指摘やアドバイスをいただいた。サーベイヤー派遣後は指摘項目の改善と未着手であった付加機能評価の準備を始めた。本審査2ヶ月前には部署ごとに予行練習を行い、準備物等に漏れがないか確認を行った。本審査は1日目に主機能の面接・部署訪問・ケアプロセス調査、2日目に残りの部署訪問・総括、3日目に付加機能の面接・部署訪問・ケアプロセス調査・カンファレンス・総括が行われた。受審結果は平成31年6月頃に発表されるとのことである。客観的視点で評価をいただくことにより、職員では気付き難い点やより良い医療提供のための改善点を知ることができた。また1年間の準備期間を通してチームとして一つの目標に向けて取り組み、受審できたことは病院にとって大きな財産になったと考える。当評価の受審を通して、更に安全で良質な医療・看護・リハビリテーション等を提供できるよう努めたい。

認　定　証
Certificate of Accreditation
認定番JC2324号
主たる機能：リハビリテーション病院
機能種別版評価項目3rdG：Ver.2.0
一般財団法人京都地域医療学際研究所
がくさい病院
殿
貴病院が日本医療機能評価機構の定める
認定基準を達成していることを証する
公益財団法人　日本医療機能評価機構
Japan Council for Quality Health Care

認　定　証
Certificate of Accreditation
認定番JC2324号-R
付加機能：リハビリテーション機能
付加機能（リハビリテーション機能Ver.3.0）
一般財団法人京都地域医療学際研究所
がくさい病院
殿
貴病院が日本医療機能評価機構の定める
認定基準を達成していることを証する
公益財団法人　日本医療機能評価機構
Japan Council for Quality Health Care

子育て世代職員の働き方検討ワーキンググループ

記載者：竹村　淳一

［目的］

『他職員の働き方に配慮しながら、子育て世代・これから子育てを控える職員が安心して働ける就業ルールを策定する』

［構成員］ 13名

ワーキンググループ構成員は、法人内各事業所の様々な部門・部署・職種・役職で構成

① がくさい病院：中井登代美、吉田　潤、細越万里子、吉田　純、角田　公啓、徳永　美穂、田崎亜友美、新谷　圭由

② 老健がくさい：矢田　圭吾、長尾真理子、田中　光穂

③ 訪問看護ステーション：森脇　誠

④ 法人事務局　：竹村　淳一

［ワーキンググループ活動期間］

・ワーキンググループ活動　　平成30年8月～11月　　合計5回

・規定改訂検討会　　平成30年1月～平成31年3月　合計3回

［成果］

1. 『子育て世代の職員が安心して働くための指針』の策定及び子育て職員 面談シートの導入
2. 妊娠期に配慮した休憩室の設置（がくさい病院）
3. 土・日曜日専従の非常勤職員採用枠の確保
4. 慣らし保育期間中の労働免除ルールの策定
5. 育休明け短時間勤務延長ルールの策定（育児・介護休業規定改訂）
6. 常勤復帰制度（期限付き雇用形態変更制度）ルールの策定（育児・介護休業規定改訂）

法人内においては、職員数の6割以上が女性という中において、業務と育児の両立に悩み、出産を機に退職を決意する職員も少なからず存在する。子育てを抱える職員が少しでも安心して働ける環境を提案するためにワーキンググループが組織され検討を重ねた。

子育て職員が安心して働く環境のためには、上司の理解をはじめ、同じ部署で働く同僚の理解が必要である。また子育て職員自身においても自分ができる範囲の努力をする必要がある。双方向からの配慮があってこそ、皆が納得できる職場環境ができるとワーキンググループでは考えた。そのような考えを盛り込んだ『子育て職員が安心して働くための指針』を策定した。また育児・介護休業規定を改訂し、育休明け短時間勤務期間の延長や期限付き雇用形態変更制度などの新しいルールを制定するとができた。

人事評価制度再検討ワーキンググループ

記載者：竹村　淳一

［目的］

『組織力を強化するために、人事評価制度（目標管理制度）の見直しを検討する。より職員が納得し、各部門において人材育成のために活用できる人事制度になるように再検討を図る』

［構成員］ 10名

ワーキンググループ構成員は、法人内各事業所の様々な部門・部署・職種・役職で構成した。

各構成員が、ワーキンググループにおいて検討した内容を自部門に持ち帰り、部門職員の意見を参考にして次回のワーキンググループに参加するという方法で議論を進めた。

① がくさい病院：前田　博士、中井登代美、稲田祐美子、吉田　潤、細越万里子、髙田　賢悟、相馬　寛人

② 老健がくさい：矢田　圭吾、井上　洋一

③ 法人事務局　：竹村　淳一

［活動期間］

・ワーキンググループ検討回数　平成30年10月～平成31年3月　合計8回

［成果］

・人事評価制度を一旦休止し、人事制度は目標管理制度に一本化を図ることができた

・目標管理制度スケジュールの見直しを図った

当法人の人事制度は、人事評価制度及び目標管理制度を採用していた。どちらの制度も人材育成を目的とした制度であるが、人事評価制度の結果については職員の賞与支給に影響していたために誤解の多い制度であった。また何度か評価者研修は実施したものの評価者のスキルや評価の視点などにバラつきがあり、部門単位で評価基準に差異が発生していたことも誤解を生む原因であった。

ワーキンググループでの結論として、誤解の多い人事評価制度は一旦休止し、人事制度は目標管理制度に一本化するとした。また現状の目標管理制度は、最も重要な時間である目標の立案・評価・フィードバックに割ける期間が短く落ち着いて作業することができなかったため、その時間を確保するように大幅なスケジュールの見直しを図った。

今回、ワーキンググループを通じて、人事評価制度が目指す意義と現場職員が抱える不満を改めて共有することができた。人事評価制度は、前述のとおり人材育成が大きな目的である。人材育成とは「優秀な人材を育てること」であるが、一言で「優秀な人材」といっても、人によってどういうことが優秀な人材か不明確であることから、先ずは「組織が求める人材像」についてしっかりと可視化する必要がある。組織においてどのような人材が求められているかを示すツールが「人事評価制度」であった。今後は、そのような組織が求める人物像は「職位別業務分掌」或いは「就業規則」等をしっかりと理解浸透することで補うこととした。人事評価制度は休止となったが、管理監督職には、人材育成のためには人事評価の考え方も必要であることを理解して頂いたと考えている。

専門職のユニフォーム変更について

平成30年9月1日より専門職ユニフォームが変更になりました。多職種による患者へのチームアプローチを大切にしている当院では、ユニフォームからそれを意識できるように職種に垣根なく統一されたユニフォームに変更しました。このユニフォームの利点は、職種によってカラー分けされているために患者さんからの職種がわかり易くなることです。心機一転し、更に充実したチームアプローチを提供したいと考えております。

ユニフォームカラー（写真左順から）

① 回復期療法士 …… ダークグレー
② 回復期リハ病棟 医師 …… ターコイズ
③ ケアワーカー …… ワイン
④ 医療ソーシャルワーカー …… サックス
⑤ 医療技術職 …… レンガ
⑥ 看護師 …… ピンク
⑦ 回復期リハビリテーション病棟 チームマネジャー …… ネイビー

第3章

介護老人保健施設「がくさい」

介護老人保健施設「がくさい」

基本理念

その人らしい暮らしの実現を目的に、保健・医療・福祉など各種専門分野の知識を結集、即ち学際的な視野で地域福祉に貢献し、利用者の尊厳を大切に『そっと寄り添った』介護を行います。

基本方針

1. 利用される方々の尊厳を第一に考え、その人らしく暮らすことが出来るよう『そっと寄り添った』サービスの提供を行います。
2. 利用される方々の残された力を最大限引き出すよう努力し、自律した生きがいのある生活が出来るようサポートします。
3. 利用される方々に充分な説明を行い、納得いただいた上でサービスを提供します。
4. 地域福祉に貢献するため、他の福祉機関や医療・保健システムとの連携を密にして介護を行うとともに、地域の一員として可能な限り施設を開放します。
5. 人の和を大切にし、助け合いの精神で高齢者福祉を推進するとともに、明るく楽しい職場環境をつくります。
6. 日々進歩する高齢者福祉に対し自己研鑽を怠ることなく、知識の習得と技術の向上に努め、最新で最良の信頼される介護を目指します。

平成30年度の活動

施設長　土井　渉

施設開設来の「そっと寄り添った」介護の実現を目指し、基本理念・基本方針に基づいて事業を進めた。

同時に、平成30年度は、介護老人保健施設の在宅復帰・在宅療養支援を推進し、介護報酬改定に即して取り組み、7月から「強化型老健」となった。今後もこの努力を継続して「超強化型老健」を目指す。

方針を推進するにあたり、引き続き部門間、部署間の連携を第一と考えた。運営会議、部門別代表者会議、各委員会等を有機的、効率的に連動させて、施設全体のパーフォーマンスを高めることに努めた。前年度と同様に委員会機能の強化を掲げた結果、総じて業務内容の質の向上を図ることができた。

1. 介護・看護サービスの質の向上は、入所者について、在宅復帰に向けて利用者個人の計画に基づく介護ケアとリハビリを拡大して提供することができた。特に身体拘束に対する取り組みは著しい成果を上げることができた。認知症ケア、ターミナルケア、肺炎等の感染症、種々の疾患・事故への対応、並びに医療と健康管理を適切に行うことができた。
   利用者の高齢化と介護度の重度化、ニーズの多様化に対応するため、医療・看護・介護、リハビリ等の関係者との連携、必要に応じて他病院等との連携を深めた。
2. 通所、いわゆる通リハ事業は、介護報酬を一日型から短時間に、大規模から縮小方向に誘導され、抜本的な事業見直しを余儀なくされた。しかし介護職員の確保ができずに、開始後に土曜日営業の断念と、予定していた訪リハ事業の延期もせざるを得なかった。
3. 強化型取得は経営の安定に寄与したが、一方、介護職員の欠員の影響で、平均稼働率の低下等がみられた。健全経営に職員確保が非常に重要であることが理解された一年であった。
   IT等の利活用については、事務の効率化だけではない幅の広い効用等の議論が必要である。引き続き検討していく。
4. 北区の介護予防の中核機関、京都市北区地域介護予防推進センターは、災害多発年に、北山3学区の大雨等の災害対策を通して地域の安全・安心に寄与できた。施設全体が連携して地域の安心のための、介護予防と地域包括ケアの役割を担うことが期待されている。

当老健が、京都市北区地域に根差して介護保険事業を推進して足掛け15年が経過した。今後は北区だけでなく、老健が未設置の上京区、さらには、周辺区の左京区、中京区住民にも、施設本来の事業と地域活動を積み重ねることにより、地域に役立つ施設であり続けたい。

介護老人保健施設「がくさい」　中期vision

（策定　平成30年4月1日）

利用者の尊厳を大切にし、家族を支援し、在宅生活の維持と安寧を目標にして、各部門・部署の連携により、施設を挙げて「そっと寄り添った介護」を目指す。

1. 職員の能力を高め、知識と技術・技芸によって、安全で質の高いケアを確立する
   - ・職員の一人一人が利用者の理解を深め、利用者の尊厳を守る
   - ・催し・事業の計画・実施・評価にあたっては、部門・部署間の連携や協力関係を確認する
   - ・認知症、嚥下障害、高い医療ニーズのケア、看取りのケア等への対応を強化する
   - ・安全で質の高いケアを恒常的に追求し、モニターして評価する仕組みを構築する
   - ・地域に根差した事業を発展させ、地域の特色を活かした体制を構築する

2. 人財育成と職員の働きがいの醸成を一致させる
   - ・部門ごとの職員研修システムを構築し、現任訓練（OJT）を組み込む
   - ・人財育成を充実させる。管理職養成、事務職員の育成にも取り組む
   - ・人事評価制度を定着させると共に、労働環境をモニターし改善する

3. 地域での実績を拠り所に、地域の組織づくりに協力し、地域包括ケアの一翼を担う
   - ・利用者の在宅復帰を促進し、在宅支援に貢献する。さらに社会参加を目指す利用者増を図る
   - ・生活期リハビリテーションを発展・充実させると共に、在宅支援組織やサービスとの連携を強化する。また、診療所・病院等と連携して在宅医療・施設サービスの向上に役立てる
   - ・地域包括ケアの一翼を担う施設として、地域の団体、施設、機関等と協力し、地域のネットワークの一員の役割を果たし、地域に貢献する

4. 安定した経営と財務管理を確立する
   - ・施設目標の達成を目指し、部門・部署方針を確実に実行する
   - ・施設・機器の老朽化に対しては年次計画的な対応を行う
   - ・持続可能な経営基盤を確立する

施設概要

名　　称　一般財団法人京都地域医療学際研究所　介護老人保健施設「がくさい」
所 在 地　〒603-8465　京都府京都市北区鷹峯土天井町54番地
U R L　https://gakusai-rouken.net/
開 設 日　平成17年1月11日
管 理 者　施設長　土井　渉
事業内容　介護老人保健施設
　　（予防）短期入所療養介護
　　（予防）通所リハビリテーション
併　　設　京都市北区地域介護予防推進センター
施設形態　在宅強化型
入所定員　100人（うち認知症専門棟定員40人）
通所定員　50人
敷地面積　3,304㎡
延床面積　4,285㎡

沿　　革　平成15年11月　介護老人保健施設「がくさい」起工
　　平成16年12月　介護老人保健施設「がくさい」竣工
　　平成17年 1月　介護老人保健施設「がくさい」開設
　　平成17年 5月　通所リハビリテーション開設
　　平成18年 4月　京都市北区地域介護予防推進センター受託
　　平成25年10月　きょうと福祉人材育成認証事業所認定

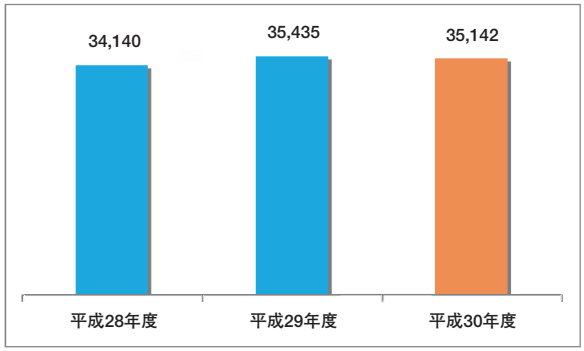
職種別職員数

平成31年3月31日現在

区　分	職員数（実人数）		
	合　計	常　勤	非常勤
医　師	1	1	0
介護職員	56	45	11
看護職員	14	6	8
理学療法士	9	3	6
作業療法士	5	4	1
支援相談員	3	3	0
介護支援専門員	2	2	0
薬剤師	1	0	1
管理栄養士	1	1	0
事務員	5	4	1
その他職員	3	0	3

事業統計

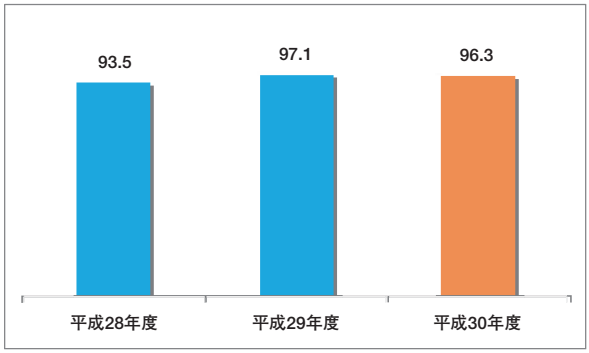
① 入所延利用者数



（単位：人）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
入所延利用者数	34,140	35,435	35,142

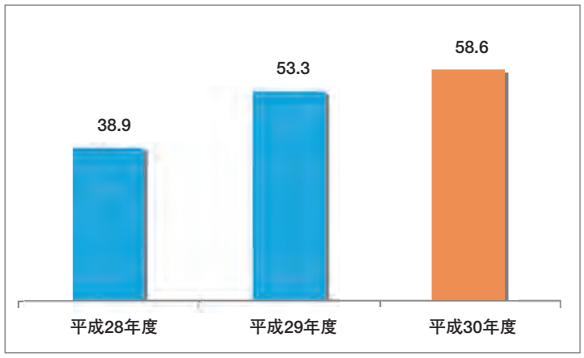
② 入所稼働率



（単位：％）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
入所稼働率	93.5	97.1	96.3

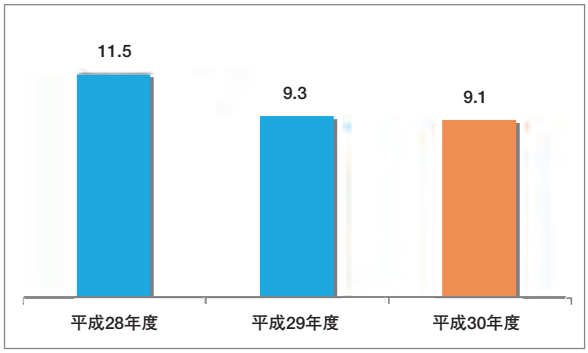
③ 在宅復帰率



（単位：％）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
在宅復帰率	38.9	53.3	58.6

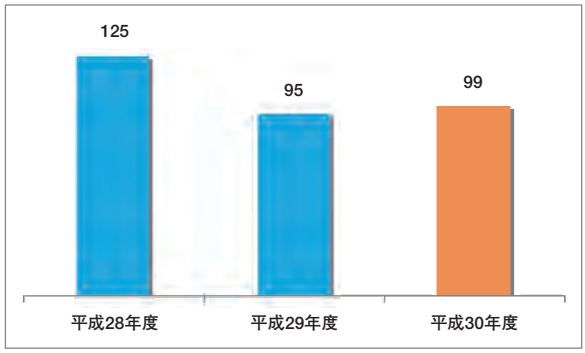
④ ベッド回転率



（単位：％）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
ベッド回転率	11.5	9.3	9.1

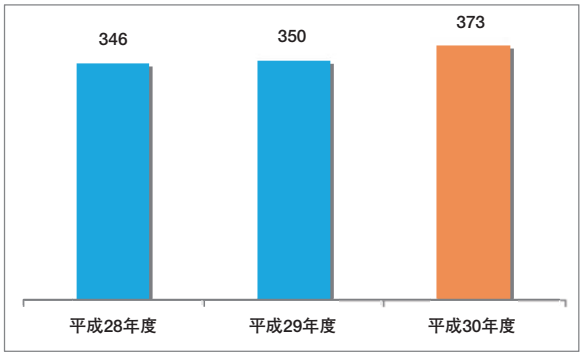
⑤ 新規利用者数【ショートステイ除く】



（単位：人）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
新規利用者数【ショートステイ除く】	125	95	99

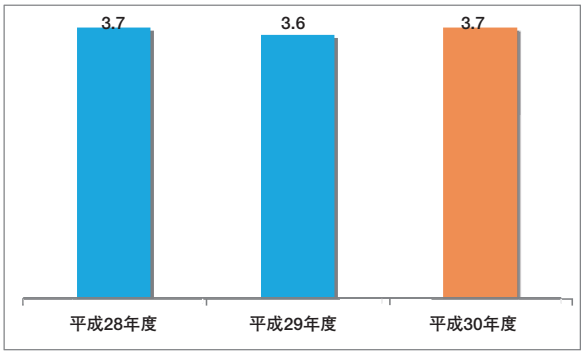
⑥ 新規利用者数【ショートステイ】



（単位：件）

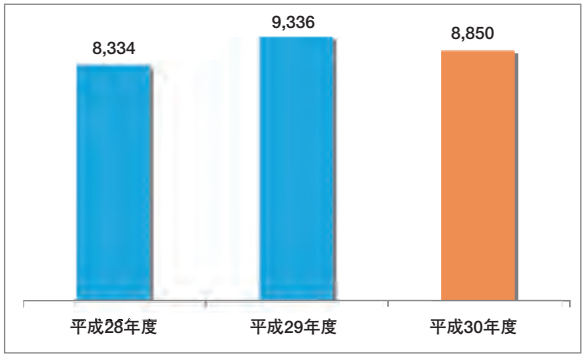
	平成28年度	平成29年度	平成30年度
新規利用者数【ショートステイ】	346	350	373

⑦ 入所利用者 平均介護度



	平成28年度	平成29年度	平成30年度
入所利用者 平均介護度	3.7	3.6	3.7

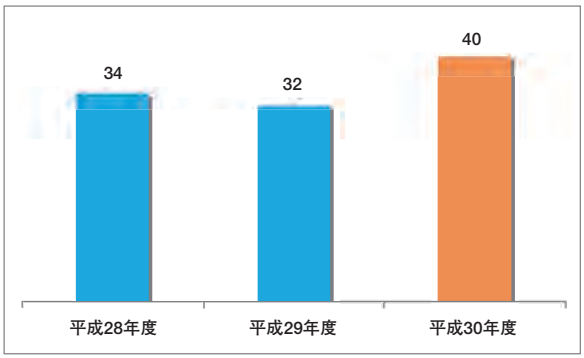
⑧ 通所リハビリ 利用者延数



（単位：人）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
通所リハビリ利用者延数	8,334	9,336	8,850

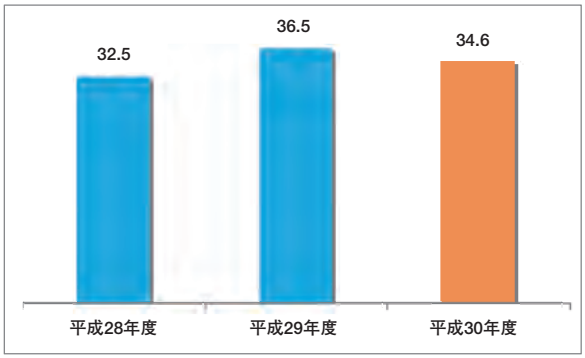
⑨ 通所リハビリ 新規利用者数



（単位：件）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
通所リハビリ新規利用者数	34	32	40

⑩ 通所リハビリ 1日平均利用者数



（単位：人）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
通所リハビリ1日平均利用者数	32.5	36.5	34.6

生活支援部門

記載者：丹羽智佳子

［部門方針］

『利用者満足と職務満足を充足させると共に、質の高いケアを提供し、安定した施設運営を図る』
（在宅復帰強化型を目指す、生活リハビリ、入院施設との医療連携、生活と医療の提供、認知症ケア、ターミナルケア）

［主な活動］

【強化項目】

1. 1階：職員間の連携を図り、利用者に応じた個別的なケアを提供する
2. 2階：在宅復帰を目指し、生活リハビリを強化し残存機能の維持向上を行う
3. 3階：認知症ケアの充実、生活の場においてのその人らしいターミナルケアの充実
（認知症ケア加算の算定、認知症リーダー研修および実践者研修修了者を中心により良い認知症ケアの提供）

平成30年度は介護報酬の改定もあり、生活支援部でも利用者の多様化するニーズに応える事を優先しながらも（在宅復帰）強化型老健への移行に取り組んだ。また、日常的に行う業務の改善にも取り組み、業務効率化を図った。稼働率は98%の目標に対し97.58%、在宅復帰率は50%の目標に対し58.57%という結果となった。

医療機関への搬送が呼吸器感染症5名、尿路感染症2名、脳血管障害3名、心疾患4名、消化器疾患10名、骨折7名、その他11名の合計42名と高齢者のもつ慢性疾患の急性憎悪による急な入院があったことや、また看取りを11名行ったこと等により、稼働率に影響される現状もあったのではないかと推測される。

施設内での医療対応としては緊急時治療管理加算3名　所定疾患施設療養費加算15名（肺炎1名、尿路感染症14名、帯状疱疹0名）の加算算定を行った。

例年通りに認知症実践者研修の受講、福祉キャリアパスへの受講によりキャリアに応じた研修の受講と自らの課題整理、主体的な職員育成にも繋げるように取り組んだ。看護実習生も積極的に受け入れ、双方にとって学びが深まるような工夫を今後も積極的に考えて行きたい。

平成30年度は強化型に向けて事務作業など煩雑な業務に振り回された感が否めず、令和元年度に向けての課題としては超強化型も視野に入れつつも、基本である利用者主体の介護を念頭に置いて、更に業務改善ができるところは行い、また、職員の人間力や知識の向上、そのツールとしてICF生活モデル等の理解を深め、他職種とも共通認識で関われるような工夫と取り組みを行い、更なる質の高いケアを目指すことが課題である。

入所療養科

部　門：生活支援部
記載者：中島由希子

科長：中島由希子　　係長：土谷　幸絵
主任：長尾真理子、岩村　隆史、森　篤史、岡崎　清子
リーダー　進藤　一樹、松野　彰太、上田明日香、田中　光穂

［年間目標］

『多様化する老健の役割を見据えて、利用者に応じたサービスの提供を充実させる』

［主な活動］

入所療養科としては、利用者に応じたサービスの提供を充実させるために、昨年と同様に、安定した経営状態がもっとも重要と考え、安定した入所コントロールを戦略目標として、入所稼働率および在宅復帰率の維持向上を目指した。これらについて、3階においては認知症専門棟の特性から長期入所となったり、次の施設への待機であったりとそれらへの関与が難しく、主に2階の入所者を対象として展開した。

入所の受入に対して有効な人員配置が行えるように、昨年度に入浴日を固定したことで、かえって入浴日の入所受入の対応に支障をきたす様になったため、入浴日をフレキシブルに戻し、いずれの日でも受け入れられるようにした。最大限の受入体制をとり、さらに相談課の協力を得て、入所目標稼働率98%の維持向上を目指したが、入所者の入院や逝去が重なったことで目標値に届かず、稼働率97.58%という結果となった。

また、在宅復帰率の維持向上を戦略的目標として、昨年と同様に2階のユニット職員による週2回以上の生活リハビリの実施を目指し、取り組んだ。この取り組みにより利用者のADLの維持向上を図り、在宅での生活が可能になることを目指し、また、在宅復帰率が向上するように尽力し、50%の目標に対し、58.57%の結果を残すことができた。

生活リハビリの実施は上半期が週4回、下半期が週3回と、年間を通して目標値である週2回以上を上回り、在宅復帰率の維持向上に貢献したと考えられる。

さらに、認知症専門ケア加算Ⅰの算定を目指したが、資格取得者の退職もあり、必要な有資格者数が条件を満たさなかったため算定に至らなかった。今後も計画的に認知症介護実践リーダー研修に職員を参加させることで加算算定を目指したい。

最後に安心安全な生活環境の提供として、転倒転落件数を昨年度の結果を踏まえて11件以内／月平均を目標値とし、結果は7.8件／月平均であった。引き続き、転倒転落件数が限りなくゼロに近づくように取り組んで行く。

リハビリテーション部門

記載者：岡　　徹

［部門方針］

『利用者個人に合わせた質の高いリハビリとケアを提供する』

［主な活動］

平成30年度のリハビリテーション部として掲げた方針に対してはリハビリテーション科、通所リハビリテーション科ともに多くの改革を行い利用者の満足度向上へとつながった。

リハビリテーション科は理学療法士9名、作業療法士5名と下半期より常勤・非常勤セラピストが充足され、組織として安定してきたことにより、入所・通所利用者へのリハビリテーションは質及び量ともに向上した。

入所においては強化型施設への基準の維持向上のための個別リハビリ実施回数の増加、在宅生活を意識したリハビリに取り組むため及び家屋環境評価・調整のための積極的な訪問を実施した。また、入所から退所に向けての情報を共有するための中間カンファレンスも開始した。これにより在宅復帰への多種職連携が強化された。

通所リハビリテーション科も介護士12名、相談員1名、看護師1名のスタッフが連携と効率化を考えつつ、利用者の在宅を意識しながらの機能向上に積極的に取り組んだ。土曜日デイケアの開始やリハビリテーション科と協力してのリハビリテーション提供体制加算算定の開始、利用者のニーズを考慮した短時間デイの開設に向けた設備面やデイ職員の育成、リハビリ職との連携体制の強化など積極的に取り組めた。リハビリテーション部として良質な連携が行えるようになり、利用者へのリハビリサービスは向上したと考える。

〈強化項目〉

①　人の生活と在宅復帰を意識したリハビリの実施

・利用者への入退所後訪問指導の開始
・通所リハビリ利用者への在宅環境の評価訪問開始

②　積極的なリハビリの提供と加算取得の推進

・入所、通所共にリハビリ実施回数を増加させた
・年末年始のリハビリサービスの提供
・リハビリテーション提供体制加算の取得

③　職員の技術向上を促すシステム作り

・科内での定期的な勉強会の開催
・研修会への参加
・実習生の受け入れによる指導技術の向上

④　地域住民へ提供できるリハビリサービスの構築

・土曜日の通所リハビリサービスの開始
・訪問リハビリテーションの開設準備

今後も取り組みとしては、リハビリテーション部として利用者個人の生活活動を考慮したリハビリテーションとケアが提供できる体制を維持しつつ、地域住民への提供できるリハビリテーションサービスを新たに生み出していきたい。

リハビリテーション科

部　門：リハビリテーション部
記載者：岡　　徹

科長：岡　徹　　主任：古塩　博史

［年間目標］

『ご利用者の在宅支援に資するリハビリテーション科の構築と制度改定に対応した加算取得の充実』

［体制］

平成30年9月より非常勤理学療法士を5名、平成31年1月より常勤作業療法士を2名増員し、以降セラピスト14名体制（理学療法士9名、作業療法士5名）でリハビリテーション業務を実施している。

［実績］

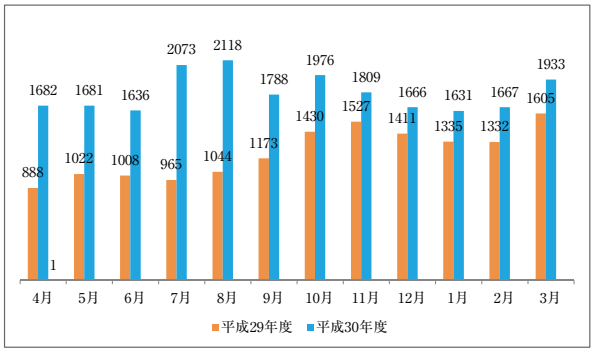
リハビリテーション科の業務は入所リハビリテーション、在宅訪問指導および通所リハビリテーション業務がある。入所リハビリテーションは、平成30年7月より強化型老健施設として入所利用者に対し個別リハビリテーションを充実させるため週3回以上を実施した。また、同様に、在宅復帰の見込みのある方に対して集中してリハビリを行えるよう、入所後まもなく、短期集中リハビリテーション加算対象者の方に対して週5回のリハビリの提供をした。これにより平成29年度のリハビリテーション実施総単位数1,232単位／月から、平成30年度は1,804単位／月へと、前年と比較して572単位／月の増加となった。

また、シフトの調整により年末年始の休暇期間もリハビリを実施した。在宅復帰施設として入所時と退所時の訪問指導も積極的に実施し月平均4.8件であった。

通所リハビリテーションに対してはセラピストを2名以上常時配置をするリハビリテーション提供体制加算を平成31年2月より開始した。これによりセラピストと介護士、介護福祉士および看護師との連携が取れるようになり利用者へのサービス向上につながったと考える。また、次年度より開始予定の短時間デイサービスの開始準備に向けリハビリテーション部としてリハビリテーション機器の導入や短時間用リハビリテーションプログラム作成のマニュアルなどを共同で作成した。当老健でのリハビリテーション科は多職種との連携はもちろん、すべての部署との関わりがあるため柔軟な対応が可能な組織体制のスタートに立った年度であった。

次年度は強化型老健施設よりさらに1段階上とされる、超強化型老健施設の基準取得に向けて現状のリハビリテーションサービスに加え新たに訪問リハビリテーションの開設や通所リハビリテーションの短時間デイサービス開設を行いたい。今後も在宅生活を意識した生活期リハビリテーションサービスを提供できるようにセラピスト個々の能力向上と共に、組織としても成熟させていきリハビリテーション科を発展させていきたい。

年間リハビリ実施総単位数の推移



通所リハビリテーション科

部　門：リハビリテーション部
記載者：井上　淳子

科長：井上　淳子　　主任：肥田　瑞穂　　リーダー：石塚　敦子

［年間目標］

『今後のデイケアの動向を見極めながら利用者のニーズを拾っていく』

【業務実績】

3年毎に実施される介護報酬改定により通所リハビリテーションは減算対象となった。また、前年度の利用者数が月平均750名を超える結果となったことで大規模減算も重なり収益の点から厳しい状況が予測された。何度も協議を重ね、以前より希望の声があった土曜営業を目標に準備を進め予定通り平成30年6月にオープンを迎えた。開設時は6名からのスタートとなり、日を追うごとに希望者は増え、当初に目標としていた定員数20名に近づいていたが、順調な土曜デイ運営に反し職員の離職が相次いだ。入所療養科からも職員のフォロー体制を作り、何とか継続の方向で取り組んだが、職員の休暇が確保できないまでの状況となり、協議を重ね11月一杯での終了を選択する結果となった。

今年度を振り返ると1日型の需要が減少傾向で新規の依頼も少なく、長年利用している利用者の重度化からショートステイの併用も増加していることが結果的に稼働率の低下に繋がっている。そういった背景から今年度の1日の平均利用者数は34.6名に留まった。

【活動内容】

職員の事務作業効率化を図るため業務マニュアルの見直しや整備、利用者カルテの整理を実施した。マニュアルを有効に利用し入職してきた職員にもスピーディーに業務を覚えられるよう引き続き業務の標準化を図って行きたいと考えている。

また、職員のスキルアップとして、施設外研修も積極的に推奨し実施した。業務の都合上目標には届かなかったが、6名が参加しそのうちの2名は感染やリスクについての伝達講習を行い、科内で全4回の勉強会を実施した。

更に今後の展開として、団塊の世代が後期高齢者となる令和7年問題を前に運動の機会を得て健康寿命を延ばそうといった計画が国を挙げて実行されている中、介護報酬についても短時間型については減算されていない背景から見て、通所サービスとして利用者が選択できるサービスを展開させることが必要と考え、次年度については短時間デイ開設を目標に準備を進めた。

その他生活リハビリの充実についてはリハビリスタッフと協働し個人の自主トレーニングメニューの作成と実行を目標に掲げ達成することができた。この目標を掲げたことにより、利用者の意欲を引き出すと共に在宅支援の部署であるというスタッフの意識を高めることができた。

事務部門

記載者：矢田　圭吾

事務部長：竹村　淳一　　事務部長代理：井上　洋一

［方針］

『改正介護法による介護老人保健施設の機能を理解し、他の医療機関、介護サービス事業所との連携を強化し、持続可能な経営基盤を確立する』

［主な活動］

平成30年度は下記5項目を強化項目に掲げ取り組んだ。

1. 介護報酬改定による新たな算定要件を理解し、経営改善に努力する
2. 利用者の満足とニーズにあったサービスの調整を行う
3. サービスを総合的な視点で評価し向上させる機関の創設と運営
4. 職員研修システムを構築し人財を育成すると共に部門間のより緊密な連携を促す
5. 行政機関、地域団体と連携し地域包括ケアを総合的に評価、向上させる

上記1は、介護報酬改定にて老健の役割である在宅復帰・在宅療養支援機能を推進する観点から報酬体系の見直しが行われ、一定の在宅復帰・在宅療養支援機能を有する施設を「基本型」、在宅復帰・在宅療養支援を更に進めている施設を「在宅強化型」、これら以外を「その他型」として区分されることになったことをうけ、算定要件の把握に努めた。以前より在宅復帰の取り組みを行っていた当施設は、「基本型」に区分されることになり、更に在宅復帰・在宅療養支援機能を推進し、リハビリの充実等の利用者ニーズに応え、上位の「在宅強化型」へ移行するため、関係部署との協議及び準備を進めたことで、7月より算定可能となった。在宅強化型への移行は、利用者満足度を向上させるとともに経営改善に繋がったと考える。

上記2は、社会資源としての役割を担うため、全部署との連携を図り、利用率アップに努めた。上半期においては平均99.1％と前年度よりプラス1.9％の利用率であったが、下半期は96.0％と前年度よりマイナス3.3％の利用率であった。原因としては、退職者が出たあとの人材確保が困難であったことが挙げられる。スムーズな人材採用と定着が課題である。

上記3は、事務部と各委員会が連携を図り、問題点の把握に努めた。特に設備面について、竣工後14年を迎えた当施設には、竣工時に購入したものを使用し続け老朽化した設備が多くなっているという問題点があったため、優先順位を検討し、計画的に設備更新を行った。また、介護度の高い利用者に負担少なく入浴をしていただくため生活向上委員会と協議しシャワートロリーを導入した。

上記4は、各部門が連携して施設内研修の毎月開催を実施し全職員の必須知識の習得に努めた。また法人主催での役職者研修に参加することで主に管理者のスキルアップを図った。

上記5は、今年度も併設の京都市北区地域介護予防推進センターと協議しながら各関係機関団体との連携を図った。今後もこの連携を深めていくことが地域包括ケアの推進に寄与すると考える。

総務課

部　門：事務部
記載者：矢田　圭吾

課長：矢田　圭吾　　主任：遠藤　良太

［年間目標］

『年間利用者や職員に安心感を持ってもらえるよう、施設運営の基礎となる総務課業務を的確に行う』

［主な活動］

間接的支援者の総務課であるが、施設運営の基礎であり、常に的確な業務遂行が求められる部署であることを課員各自が再確認しつつ業務に携わることを本年度の目標として掲げた。

主な取り組みは下記のとおり。

・介護職員の採用が年々厳しくなる状況があり、「介護職員の採用」という目標を掲げ、採用に繋げるための施設見学者数増加になる活動を活発的に行った。採用方法に関する情報収集のため外部の勉強会等へ参加したり、求職者が求める採用パンフレットを新たに作成したり、福祉就職フェア等では求職者に興味を持ってもらう対応を心がけ、昨年度実績（6名）を大幅に上回る27名の施設見学者の対応を行うことができた。

・「介護報酬加算要件の確認」という目標を掲げ、京都市のホームページに示された様式で算定要件が満たされているかを毎月確認し、早期にリスクを把握することを意識して、着実に実行することができた。

・今年度で開設より丸14年が経過し、各種設備が老朽化していく中、可能な範囲で業者に依頼せず修繕を行い経費削減に努めた。「修繕による設備管理」という目標に対しては、修繕箇所が増加していく中少ない人員で取り組み、昨年度（278件）を上回る317件の営繕業務を実施し経費削減につながった。また、水道使用量の削減による経費削減を図るため、節水コマを導入した。これにより月間3万円の経費削減を行うことができた。一方、通所リハビリで使用しているリフト付き送迎車両が老朽化し、利用者事故を未然に防ぐため買い替えを行った。

今年度は、前年度までより課員との面談の機会を多く持つことができた。コーチングを学んだことがそのきっかけであるが、課員の思いを以前より知ることができ、また指示命令というやり方から課員自身が答えを導き出すやり方へ意識改革につながった。今後も部署目標及び個人目標の達成につながるよう課員とのコミュニケーションを図っていきたい。

最後に、施設内研修の一環として毎年実施される業績発表会において、総務課が施設長賞をいただくことができた。間接的支援者であり表には出ない役割であるが、裏方として堅実に業務を遂行したことを評価していただけた。引き続き、この受賞に恥じぬよう総務課全員で施設運営の基礎の役割を担っていきたいと考える。

相談課

部　門：事務部
記載者：井上　洋一

課長：井上　洋一

［年間目標］

『老健のあり方を意識した、相談課としての施設運営への寄与』

［主な活動］

稼働率の維持・向上と、収益確保のための（在宅復帰）強化型老健の基準取得と類上げを見据えて、年間計画を挙げた。

強化型老健の施設基準である指標の各項目を意識して、数字のコントロールを重視した活動となった。

特にこれまで実施件数のほとんどなかった入所前後訪問指導、退所前後訪問指導をリハビリテーション科と連携を取りながら積極的に実施して、入所時から在宅復帰に向けた利用者・家族支援のアプローチを強化した。結果、入所前後訪問指導割合、退所前後訪問指導割合は基準値である30％以上をそれぞれ大幅にクリアした。

さらに入所中から在宅担当ケアマネジャーとの連携を密にとり、在宅復帰者された利用者の短期入所療養介護サービスの優先利用などを促進し、在宅復帰率50％以上を実現・維持できた。

また在宅復帰と施設利用の往復利用を推進し、地域包括ケアシステムの中の老健施設としてリハビリテーションの必要な利用者確保と施設のもつ使命感の向上を目指した。

並行して、重介護の方の対応についても、終末期に向けた話合いの機会を作り、ターミナルケアとして施設で看取りを行うなど、死亡退所者数は年間11件となった。

このほか、強化型老健の施設基準である要介護4、5の重度者割合50％以上を意識して、入退所者の要介護度も確認しながら、入退所調整を図ったことでこちらも維持した。

結果、平成30年7月より強化型老健の施設基準の類上げに至り、施設の収益向上に貢献できた。

日常業務では、短期入所療養介護利用者の入所受けに係る作業を一部相談課でも対応するなど、現場職員との連携を行い、相談課としてサポート体制を整えた。

稼働率については、効率的なベッドコントロールにより、特に前半の7ヶ月間は平均稼働率が99％と好調であったが、介護職員の減少により入所制限を行うなど厳しい後半が続き、最終平均稼動率は前年度を下回った。

このほか、他の介護保険事業所への訪問を6件実施して、運営状況についての積極的な情報交換を行い、自施設の強みや未成熟な部分などの振返り、職員への情報共有の発信に役立てた。

褥瘡・感染対策委員会

記載者：中島由希子、田中　光穂

統括：中島由希子　　委員長：田中　光穂　　副委員長：久永　知広
構成員：土井　渉、吉村　修一、井上　洋一、藤原　京代、松本　典子、古塩　博史、
平田　望、乾　圭、三浦　香織、中村　卓未、湯浅真希子、樫本　俊兵

［年間目標］

1）感染対策委員会

『感染対策マニュアルの改訂、および、アウトブレイクを来し得る感染症に対して適切な対応を行う』

2）褥瘡委員会

『褥瘡発生リスク者に対して、皮膚トラブルの予防・早期発見・除圧を実施する』

［主な活動］

1）感染対策委員会

(1) マニュアルの見直しと改訂

①PPEの装着方法：感染性胃腸炎対応時に感染拡大防止のためシューカバーを導入、着脱手順に追加した。

②汚物処理後の感染性廃棄物の廃棄方法：感染性廃棄物鋭利でないものの廃棄方法について、専用のゴミペールを施設南側に設置し廃棄方法を整えた。

(2) 感染症の発生防止

高齢者施設としてアウトブレイクを来し得る感染症として、感染性胃腸炎、インフルエンザの対策を行った。前年同様に流行期（12～3月末迄）に、1日1回施設内の手すりやドアノブ等の環境面の消毒を各部署で実施した。同時期前に全職員対象に嘔吐時の初期対応練習を行った。

インフルエンザについては、入所者および職員対象に11月から適宜インフルエンザワクチン接種を実施し接種率は共に89%であった。流行期には全職員マスク着用・出退勤時に体温測定、公共交通機関利用職員は通勤時マスクの着用を徹底、潜伏期における感染防止、早期対応に努めた。さらに中学生以下の面会制限し、外部からの感染防止に努めた。また、インフルエンザ発生時には、職員は解熱後2日間休み3日目から復帰、入所者は隔離対応を行い、発生時の濃厚接触者を洗い出し、必要時タミフル予防投与を実施した。

(3) 研修

6月「感染対策について」 講師：入所療養科 中島由希子科長

11月「感染対策について」講師：西陣病院 伊藤良子氏（感染認定看護師）

2）褥瘡委員会

(1) マニュアルの見直しと改訂

褥瘡発生時に、当該者の情報が共有でき、悪化させない、つくらないように各専門職が密に連携を取れるよう、褥瘡計画書に関するフローチャートを作成した。

(2) 褥瘡予防

前年と同様に、入所者に対して、ADL状況・栄養状態やスキンチェック・在宅での情報を踏まえ、状態に応じた体圧分散マットを選定し提供した。また、各利用者に対し褥瘡対策に関するケア計画書を3ヶ月ごとに作成した。これにより褥瘡に対する意識の強化を図れた。

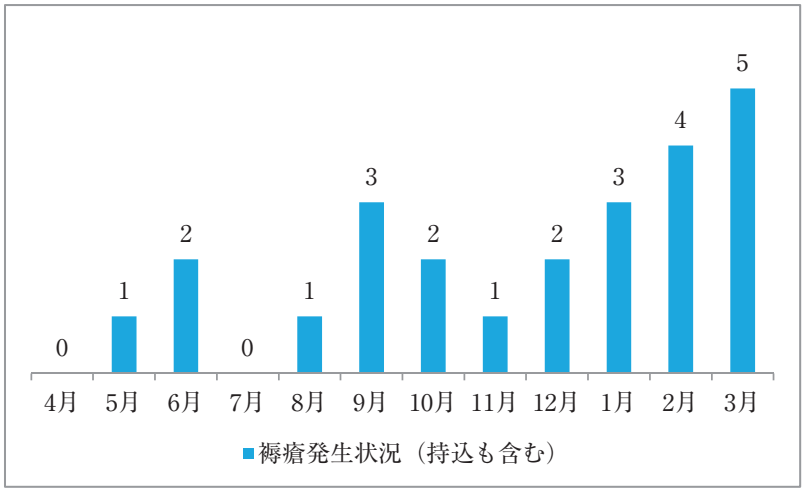
(3) 体圧分散マットの管理

通年実施し、適切なマットを提供できるよう管理をし、今年度は、経年劣化したマットを処分し、不足しているマットを購入した。

(4) 研修

9月「スキンケア・スキントラブルについて」講師：西陣病院 多気真弓氏（皮膚・排泄ケア認定看護師）

褥瘡発生状況



身体拘束人権委員会

記載者：上田明日香

統括：岩村隆史
委員長：上田明日香　　副委員長：大野木　茜
構成員：矢戸みゆき、石田　弘子、肥田　瑞穂、海東記久子、田中　月乃、
人見保奈美、人見　佳代

［年間目標］

①『身体拘束がなぜ禁止されているかということを周知し、実施されている場合は適正にされているか確認・見直しを行い、身体拘束の解除に向けて取り組む』
②『利用者やその家族の目線に立った接遇を行い、一人ひとりが利用者・家族・職員の人権に配慮できるような環境を作る』

［主な活動］

身体拘束人権委員会では「身体拘束」と「人権」の二つの面について取り組んだ。

身体拘束については2週間毎のカンファレンスや毎日の記録忘れが無いかを確認し、各ユニット各フロアで身体拘束の解除に努めてきた。その結果、2件の身体拘束の解除を行えた。危険行為ばかりに目を向けるのではなく、利用者の表情や習慣、行動ひとつひとつに着目し、落ち着いて過ごせる環境を整えたことで、身体拘束の解除に繋がった事は評価できる。今後も身体拘束の必要性の理解を深め、身体拘束の解除ができるように継続的な活動を行っていく。

人権については人権宣言の周知・実践や毎月その時の現状に応じた人権目標を掲げ、取り組み振り返る事で必要な改善点や反省点をより深く理解することができた。今年度は振り返りシートを新しく改善したことで、より多くの職員から回答を得ることができた。今後も現状において必要な目標を掲げ、取り組む事を継続していく。また身体拘束人権委員会が主催となり「高齢者虐待・グレーゾーン」についての研修を開催した。職員アンケートを行い、職員が虐待に対してどのような認識を持っているのか再確認でき共有することができた。また、自施設での現状や、同職種・他職種との意見交換、不安や悩みを共有できた場となった。少しでも全職員が虐待に対しての意識が向上できるよう委員会が主体となり研修を開く事が必要である。今後も継続して実施していきたいと考える。

［平成30年度人権目標］

4月　お互いが気持ちのいい挨拶をしましょう
5月　介助をする前には目を見て声を掛けます
6月　（入所・通所）排泄確認は小さな声で！
（事務・リハビリテーション）個人情報は小さな声で！
7月　誰に対しても正しい呼称で呼びましょう
8月　感情的になりすぎていませんか？
9月　ちょっと待って！～それってどれくらい待てばいいの？～
10月　「拒否」という言葉を使ってしまってはいませんか？
11月　利用者さんの話にゆっくり耳を傾けていますか？
12月　（入所・通所）カーテン閉めていますか？～排泄・入浴時など～
（事務部・リハビリテーション）個人情報を伏せていますか？～カウンター・PC・机の上など～
1月　相手の目を見て挨拶をしましょう
2月　整容強化月間～身だしなみを整えよう～
3月　あなた自身が「がくさい」で生活できるような関わり方が日々できていますか？

安全対策・リスク管理委員会

記載者：進藤　一樹

統括：井上　洋一、土谷　幸絵
委員長：進藤　一樹　副委員長：牛田眞基美
構成員：矢田　圭吾、岡崎　清子、石塚　敦子、永井　千真、吉田　麻里、
安達　未来、大字　倫子、岡本　孝爾、神谷はる野

［年間目標］

『事故報告書等の分析を行い、再発防止対策を検討する』

［主な活動］

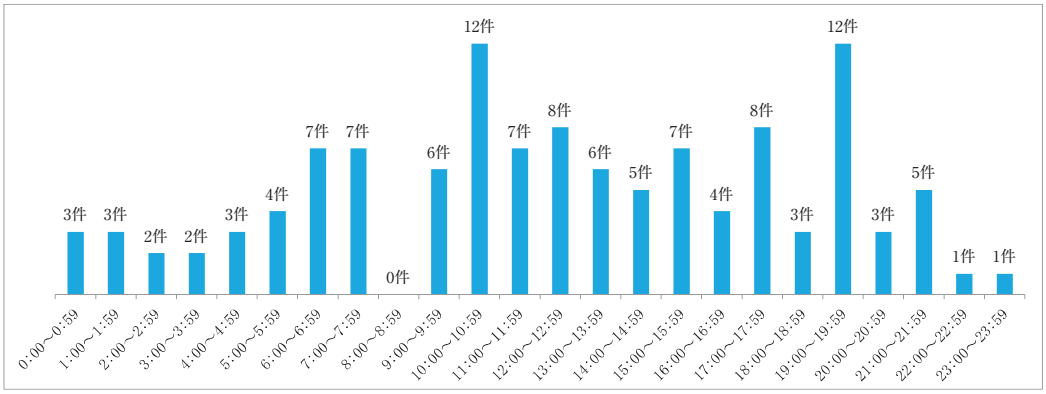
平成29年度より継続して実施している、インシデント・アクシデント報告及び事故報告のデータ化によって平成30年度も引き続き分析を行った。その分析により判明した“発生内容”や“発生時間帯”等の傾向を職員に示すことで、各自が意識して事故予防に努めることができるようになり、事故防止に貢献できたと考える。

具体的な進め方としては、インシデント・アクシデント報告及び事故報告の集計を毎月実施し、各部署から施設全体へ周知すべき案件や、安全対策・リスク管理委員会メンバーで重要視しなければならないと思われる案件について検討を重ねていった。特にインシデントについては、平成30年11月にインシデント報告強化月間を設定し、施設全体で取り組んだ。事故に対して高い意識を持ってもらうことで気づきの回数が増加し、結果的にインシデント報告を数多く寄せてもらうことができた。これにより、インシデント報告が多くあげられた月間ほどアクシデント報告及び事故報告が少なく、インシデント報告が少ない時ほどアクシデント報告及び事故報告件数が増えていることが分かった。この結果は事故に対しての意識が高まった事により、事前に注意を払うように心がけたためアクシデント報告及び事故報告が減少したと考えられる。

これらを踏まえ、次年度の課題としては、インシデント報告に対しての意識付けを委員会から発信することで、事故予防に対しての意識をさらに向上させていきたいと考える。特に繰り返し発生するアクシデント報告については、原因ではなく要因の段階から注視するとともに、インシデント報告数を増加させるべく、啓発活動なども取り入れていきたい。さらにインシデント報告件数(意識の向上)増加に対し、そのデータをどのように活用していくのかを模索したいと考える。

また、委員会は他部署との交流の場でもあり、互いの弱点を見出す場としても活用できた。アクシデント及び事故を減らすための検討や分析を行う場でもあるが、互いの士気を高めあう場でもあったことも委員会活動の意義であったと考える。

時間別インシデント・アクシデント報告



行事・ボランティア委員会

記載者：松野　彰太

統括：藤林　通代、森　篤史
委員長：松野　彰太　　副委員長：平岡　良
構成員：矢田　圭吾、前田　真大、人見　清美、北村　三奈、坪井　公子、
加賀山隆次、玉記沙也香、宅間　奈美、西井　基樹

［年間目標］

『施設内業務予定との調整を図り、利用者の楽しみに繋ぐ年間行事計画を立案し実施する』

［主な活動］

行事・ボランティア委員会の活動としては、構成員を3グループ（①夏祭り、②施設行事、③外部交流）に分け、それぞれで行事の企画運営を行った。

今年度は、猛暑の影響などを考慮し、6月の植物園遠足を変更し、10月に動物園遠足を行なった。熱中症対策をせずに利用者にレクを楽しんでもらえた。

※年間行事内容については、下記参照。

ボランティアの受け入れについては、鷹峯地域のボランティアグループ「紙屋川を美しくする会」と共同企画を行い、『稲作に関わる農具の紹介』、『しめ縄作り』を開催した。この企画には、北区長をはじめとする区役所まちづくり担当課職員の訪問もあった。

夏まつりでは、昨年度から引き続き、ボランティアーズ京都にボランティア募集の記事を掲載したこともあり、学生及び社会人10名、地域住民8名、今年度相談課で受け入れていた実習生2名の合計20名のボランティアの協力により、屋台販売やごみの分別回収などを行っていただき、職員が利用者の誘導と介助に専念することが出来た。また、余興は普段から顔なじみの北山介護予防運動指導員による集団体操に始まり、キッズダンス・京都明徳高校による吹奏楽・職員による歌唱の披露など利用者に音楽を聞く楽しみを持っていただいた。夏まつりの最後には職員が作成した老健「がくさい」オリジナルムービーを上映し、来場者への広報も行うことが出来た。

5月	・五月人形を施設内に飾る ・鷹峯小学校4年生対象　第1回きらきら学習
6月	・鷹峯小学校4年生対象　第2回きらきら学習
7月	・妙秀保育園（年長組園児）『七夕交流会』
8月	・がくさい夏まつり
9月	・鷹峯小学校4年生対象　第3回きらきら学習
10月	・動物園遠足（2日間実施　計4名参加） ・敬老会　100歳以上の入所者へ花かごと表彰状を贈呈し、99歳以下の入所者には、1輪花を贈呈。全入所者に対し『おやつバイキング』 ・稲作に関わる農具紹介（紙屋川を美しくする会と共同企画）
11月	・鷹峯小学校4年生対象　第4回きらきら学習
12月	・妙秀保育園（年長組園児）『もちつき』 ・しめ縄作り（紙屋川を美しくする会と共同企画）
1月	・正月飾りとおみくじと絵馬作成、神社に見立てた飾り付け
2月	・節分豆まき（鬼に扮したスタッフが全館めぐる）
3月	・雛人形を施設内に飾る

生活向上委員会

記載者：長尾真理子

統括：長尾真理子
委員長：小林　憲司　　副委員長：山田　遼香
構成員：湯浅真希子、坂倉　吏江、秦　由見子、松本　恵、池村　雅美、山下　由夏、
石村　優佳、塩野　紗智、中田智奈美、北　愛子

［年間目標］

『利用者の生活に寄り添い快適に過ごしてもらうためにできることは何か考える』

［主な活動］

生活向上委員会は食事、入浴、排泄、口腔ケア等、日常生活で必要な介助方法について自立支援の観点から適切な方法・頻度を検討し活動を行った。

食事面では、委託給食業者にも会議に参加して頂き、日々の食生活の中で咀嚼・嚥下面はもちろん、嗜好などに関しての現状の問題点を抽出し、改善に繋げた。また、人手不足からユニットでの食事レクの企画が立てにくい現状を踏まえ委員会として定期的に食事レクリエーションを企画し開催した。利用者にとって食事は生活の中での楽しみの一つであるため、レクによって日常生活の充実に繋げる活動を行うことができた。普段の食事やおやつとは違ったイベントとしてのレクを企画し利用者に楽しんで頂くことができた。釜飯レクでは釜飯が炊きあがる香りを感じ五感も刺激される食事レクとなり好評であった。ケーキバイキングでは何度もおかわりする利用者もおられ喜ばれている姿を多く見る事ができた。

今年度実施した食事レクレーション

食事レクリエーション		変わり湯	
6月	クリームソーダ	6月	バラ湯
8月	ミルクかき氷	8月	ラベンダー湯
11月	松茸釜飯	10月	森の湯
12月	クリスマスケーキバイキング	12月	ゆず湯
2月	握り寿司	2月	しょうが湯
4月	筍釜飯		

入浴面では、安全面を考慮しながらより快適に入浴を行ってもらう為に検討を行った。具体的な活動としては、季節毎に変わり湯の提供を行ったり、定期的に器具確認を行い不具合があれば速やかに修理や取り替えを行った。5月にはシャワートローリーを導入し座位保持が困難な利用者に使用している。

排泄面では皮膚トラブルの防止や不快感を少なくするよう、オムツの選定を業者の協力のもと行った。また、個々の排泄形態を見直すことでコスト意識も持つことができた。平成30年度の介護報酬改定で設けられた排泄加算の算定に向けてオムツ外しやリハビリパンツから私物ショーツへの変更などに取り組んだが、加算の算定までには至らなかった。

生活向上委員会は日常生活に密着した事案を扱っており、行動の迅速さも求められる。より快適な生活環境の提供を行う為に今後も課題や問題を速やかに抽出し改善に繋げていける様に努力していきたい。

外部研修参加実績

部　門	職　種	氏　名	区分	学会研修名等
施設長	医師	土井　　渉	学会	京都府老人保健施設大会
事務部門	事務職	井上　洋一	学会	京都府老人保健施設大会
事務部門	事務職	坂倉　吏江	学会	京都府老人保健施設大会
事務部門	事務職	矢田　圭吾	学会	京都府老人保健施設大会
事務部門	事務職	秦　由見子	学会	京都府老人保健施設大会
生活支援部門	看護、ケアワーカー	平岡　　良	学会	京都府老人保健施設大会
施設長	医師	土井　　渉	研修	医師研修会
事務部門	医療技術職	湯浅真希子	研修	生涯教育研修会
事務部門	医療技術職	湯浅真希子	研修	京都市特定給食施設等講習会
事務部門	事務職	井上　洋一	研修	医療介護連携セミナー
事務部門	事務職	大野木　茜	研修	採用力向上研修
事務部門	事務職	大野木　茜	研修	キャリアアップ研修（中堅職員）
事務部門	事務職	宅間　奈美	研修	対人援助の基本姿勢・相談面接技術基礎セミナー
事務部門	事務職	宅間　奈美	研修	「利用者の声を聴く」ということ
事務部門	事務職	秦　由見子	研修	働き方改革セミナー
事務部門	事務職	秦　由見子	研修	キャリアアップ研修（中堅職員）
事務部門	事務職	秦　由見子	研修	介護労働者雇用管理責任者講習
事務部門	事務職	矢戸みゆき	研修	キャリアアップ研修（中堅職員）
事務部門	事務職	矢戸みゆき	研修	福祉職員人権研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	石塚　敦子	研修	リスクマネジメント研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	乾　　圭	研修	どう防ぐ？最近話題のスキンテア
生活支援部門	看護、ケアワーカー	井上　淳子	研修	通所リハビリテーション研修会
生活支援部門	看護、ケアワーカー	塩見　泰基	研修	福祉職場組織力向上セミナー
生活支援部門	看護、ケアワーカー	田中　光穂	研修	京都市認知症介護実践者研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	土谷　幸絵	研修	人材育成におけるリーダーシップ
生活支援部門	看護、ケアワーカー	中島由希子	研修	認定看護管理者セカンドレベル「目標管理」
生活支援部門	看護、ケアワーカー	中村　卓未	研修	地域在宅医療実践勉強会
生活支援部門	看護、ケアワーカー	西井　基樹	研修	作業療法士が伝えたいレクリエーション
生活支援部門	看護、ケアワーカー	丹羽智佳子	研修	北区避難所運営研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	肥田　瑞穂	研修	職場内教育の方法
生活支援部門	看護、ケアワーカー	平田　　望	研修	残存機能を利用した体位変換、起居動作について
生活支援部門	看護、ケアワーカー	藤原　京代	研修	嚥下障害看護のポイント
生活支援部門	看護、ケアワーカー	松本　　恵	研修	介護のための感染対策セミナー
生活支援部門	看護、ケアワーカー	三浦　香織	研修	どう防ぐ？最近話題のスキンテア
リハビリテーション部門	療法士	岡　　徹	研修	京都訪問リハビリテーション実務者研修会
リハビリテーション部門	療法士	岡　　徹	研修	通所リハビリテーション研修会
推進センター部門	医療技術職	藤林　通代	研修	ファシリテーションB日程 ～人を動かし会議を活性化させる～
推進センター部門	事務職	神谷はる野	研修	介護予防・自立支援推進研修
推進センター部門	事務職	樫本　俊兵	研修	なぜ？に答える！高齢者運動指導講習会

施設内研修開催一覧（部門横断型全体研修）

当年度は，施設職員に向けて以下の研修を開催しました。

開催日	研修名	講　師
4月27日	介護報酬改定について	井上　洋一 （事務部相談課課長）
5月21日	救急蘇生について	フクダ電子 中島由希子（生活支援部入所療養科科長）
6月22日	感染対策について	感染対策委員会
7月26日	接遇について	岡本　匡弘 （京都府介護福祉士会）
8月30日	権利擁護 虐待防止について	身体拘束人権委員会
9月21日	褥瘡予防対策について	多氣　真弓 （西陣病院皮膚排泄ケア認定看護師）
10月11日	口腔ケアについて	京都府北歯科医師会
11月16日	感染対策について	伊藤　良子 （西陣病院感染管理認定看護師）
12月21日	認知症ケアについて	乾　圭 （認知症実践者研修・リーダー研修修了者）
1月21日	身体拘束について	岡本　匡弘 （京都保育福祉専門学院学院長）
2月6日	関わり続けること	空閑　浩人 （同志社大学社会学部教授）

施設内研修開催一覧（役職者対象）

6月20日	対人援助職の当事者研究について （その意義と可能性）	空閑　浩人 （同志社大学社会学部教授）
10月31日		
3月4日		

（敬称略）

地域貢献活動

平成30年8月の記録的な大雨と暴風をもたらした台風第20号により被災した北山三学区（雲ヶ畑、小野郷、中川）へ施設の防災備蓄品（水・食料）の提供を行い、後日各学区の皆様より大変感謝されたという大きな出来事があった。その他下記のような活動を実施した。

○交通安全

・あいさつ運動（毎月1日及び15日）

たかがみねこども安全の日という名称で、交通量の多い鷹峯街道を通って鷹峯小学校へ登校する子どもたちの安全と、挨拶を通して周りの人々とつながる大切さを子どもたちに感じてもらうことを目的に、毎回10名程の職員が参加し実施した。

○防災

・たかがみね防災フェスタ2018年（11月4日）

マグニチュード7以上の地震発生を想定した鷹峯地域住民の総合防災訓練において、車いすによる搬送訓練の講師を務めた。

○地域イベント

・今宮祭（5月5日）

御本社から御旅所へ神輿の行列が巡行する神幸祭で、施設正面玄関前を休憩場所として利用していただいた。また、利用者様も祭りの雰囲気を味わえて喜ばれた。

・鷹峯ふれあいまつり（8月4日）

毎年開催されている恒例の地域行事で、水餃子の販売と体組成計等を設置した健康コーナーのブースを担当し地域住民に喜ばれた。

・五山の送り火鑑賞会（8月16日）

京都の夏を代表する風物詩の一つである五山の送り火を地域住民に鑑賞していただくため施設屋上を開放し、多数の方に来場していただいた。

・夏まつり（8月24日）

平成17年の開設以来、毎年8月の第4金曜日の夕方から開催しており、施設最大の行事であるだけでなく、鷹峯地域での夏の恒例行事として地域住民に多数来場していただいた。地域の子どもたちが購入できるよう屋台で販売する値段を低めに設定し、地域住民との交流の機会としている。

○子どもたちとの交流

・きらきら学習（5月28日、6月26日、11月13日）

鷹峯小学校4年生の授業の一環で、子どもたちが福祉施設を学ぶ機会として、施設見学や利用者様との交流を企画実施した。

○場所の提供

・鷹峯学区各種団体共催のたかがみね絆サロン（毎月19日）
・鷹峯地域コーラス活動グループ（毎月第1・3土曜日、第2日曜日）
・すこやかクラブ鷹峯（4月11日）
・ふれあいまつり実行委員会（6月6日、7月3日）
・南鷹峯町ラジオ体操（7月24日～7月30日）
・北黒門町（2月17日）

北自衛消防隊訓練大会

平成30年9月11日

消火器操法訓練に参加し優秀賞を受賞

RUN伴

平成30年10月27日

認知症の方や家族、支援者、一般の方が

リレーしながら一つのたすきを繋ぎゴールを

目指すイベントに参加

収穫祭

平成30年10月30日

昔の農耕具を使って脱穀の実演をすることで、

利用者の方に昔を懐かしんで頂くイベント

地域の方々からの呼びかけで開催

在宅部門事業報告会

平成31年2月27日

法人内在宅部門の事業について

情報共有を図る活動

各事業所の連携を向上するために企画

実習生受入状況

記載者：中島由希子

平成30年度の実習生は、以下の教育機関から年間受入延人数・実数で受け入れ、各部署の職員が実習生の教育に対応した。

実習では、老健の役割、利用者の特性、各職種の役割と多職種の連携等を、利用者との関わりを通して、学びにつながるように関わった。

看護関連の実習生の受け入れに関しては、前年と同様に生活支援の場である老健としての役割は、介護職が主に背負っていると考えられることから、介護職が実習に関わるようにし、生活の場としての看護の在り方を学べるように対応した。

社会福祉士・理学療法士・看護師と目指す職種は異なるものの、対象者は同じであり、次世代を担う各職種者の育成に関わることで、職員自らの成長にも繋がることになる。

すなわち、高齢社会を支える機関である老健での実習を受け入れることは、次世代の育成とともに、職員にとっても重要であるといえる。

以上を踏まえて、次年度以降も引き続き実習生を受け入れて行く予定である。

1. 実習受入

平成30年度　実習生受入状況

学校名	職種	実習内容	実習期間	実習生人数
同志社大学	支援相談員	社会福祉実習Ⅶ、Ⅷ	5月～11月、24日間	1名
佛教大学	支援相談員 （社会福祉士）	社会福祉援助技術現場実習	7月～11月、4日間	1名
同志社女子大学	管理栄養士	給食の運営	3月、5日間	2名
京都橘大学	理学療法士	見学実習	2月～3月、5日間	1名
京都医健専門学校	理学療法士	見学実習	1月～3月、4日～8日間	4名
京都府医師会 看護専門学校	看護師	老年看護実習Ⅰ	5月～11月、4日間	34名
京都府医師会 看護専門学校	看護師	在宅看護論実習	7月～11月、2日間	6名
京都育英館　京都看護大学	看護師	高齢者支援論実習	10月～1月、3日間	49名
京都府立医科大学 医学部看護学科	看護師	老年看護学実習	10月～1月、6～8日間	27名
				125名

1）入所療養科および通所リハビリテーション科

看護師関連

教育機関名	年間受入延人数（名）	実　　数（名）
京都府医師会看護専門学校	148	40
京都看護大学	147	49
京都府立医科大学　看護学部	200	27

2）相談課

社会福祉士関連

教育機関名	年間受入延人数（名）	実　　数（名）
佛教大学　社会福祉学科	24	1
同志社大学　社会福祉学科	24	1

3）リハビリテーション科

理学療法士関連

教育機関名	年間受入延人数（名）	実　　数（名）
京都橘大学 健康科学部理学療法学科	5	1
京都医健専門学校 理学療法科	28	4

4）栄養係

管理栄養士関連

教育機関名	年間受入延人数（名）	実　　数（名）
同志社女子大学生活学部 食物栄養学科	10	2

DWAT活動報告

記載者：丹羽智佳子

［主な活動内容］

京都DWAT（Disaster Welfare Assistance Team）は平成23年の東日本大震災以降、特に要配慮者における災害の二次的被害や災害関連死が起こる中、二次被害や災害関連死の防止には早期に福祉的な視点での介入が重要との声が高まった。平成25年に岩手が発足、続いて京都が発足した。構成メンバーは社会、介護福祉士、ケアマネジャーなどの福祉専門職で成り立つ。

主な活動は災害時に避難所運営などに携わり、要配慮者のニーズを聞き取るなど、福祉からの観点で様々な課題に対応する。また、他チームと連携し健康障害の対応や生活環境の調整なども重要な役割である。京都DWATは府内の地域ごとに12チームで編成され、現在140名程のメンバーが在籍する。介護老人保健施設「がくさい」は北左京ブロックに属し、京都府老健協会からの選出となる。

京都DWATは平成28年の熊本地震の際に熊本県益城町のミナテラスでの派遣の経験があるが、平成30年度も平成30年7月豪雨の際に岡山県倉敷市真備町の岡田小学校に7月20日～8月13日まで4名1チーム（計6班）合計24名のメンバーが派遣された。「がくさい」からは8月5日～9日まで現地での活動を行った。現地では要配慮者のニーズの聞き取り、保健師、JRATとの共同での巡回による各専門職からみた課題の洗い出しや環境の整備、また避難所自主運営に向けての関わりなどの活動を行った。

平成30年度は台風21号の影響で京都でも多くの被害が発生した。今後もいつ起こるか解らない災害に対して、地域に密着するがくさいとしては地域の方への災害に関する啓蒙や福祉避難所としての役割を明確にしておく必要がある。

台風21号の影響で近隣の地域でも避難所を開設された地域もあり、京都市北区役所地域力推進室からの依頼により、岡田小学校での京都DWATの活動を踏まえ、3月11日北区役所で北区避難所運営というタイトルで研修会を行った。研修には自主防災の方、地域包括支援センターの方、社協の方、消防団の方など39名の参加があった。少しでも災害に対する備えと、いざと言うときに対応できるように、また避難所も自主運営ができるようにそれぞれの地域の特性を踏まえシュミレーションしておくことも重要である。避難所の現状を伝える事でそれぞれの方に意識づけができたような手ごたえを感じることができた。

また、2月に京都JRATも発足され、京都の中でも様々な専門分野のチームとの連携もとり、災害に強い地域、京都を目指すことが重要と考える。

介護老人保健施設「がくさい」 平成30年度 業績発表会

老健がくさいでは、各部署・ユニットにおける活動を毎年度末に業績発表会として、老健職員へ向けて報告会を開催しています。

その年度、特に優れた活動をした部署・ユニットに対しては、施設賞と各部長賞を授与しています。

・開催場所：介護老人保健施設「がくさい」

・開催日　：平成31年3月22日

部署名（発表順）	抄　録	発表者	備　考
通所リハビリテーション科	今年度デイケアでは介護保険の報酬改定により変化の年となった。そのことを踏まえ取り組んだ内容や、その中で在宅支援の役割や職員各々の意識改革が行えたことについて報告する。	井上　淳子	
相談課	平成30年度は、「在宅支援」をより意識した1年間。キーワードは…「想像」「気づき」「発信」	坂倉　吏江	
嵯峨ユニット	昨年度から引き続き、生活リハビリに焦点を当て、バージョンアップさせた「Enjoy Life ～第2章」。3つの目標を掲げ、利用者の在宅復帰を目指した。その取り組みについて報告する。	松野　彰太	リハビリテーション部長賞
高雄ユニット	利用者の希望と職員の思いが結びついたとき、実現された幸せの時間。人は誰もが大切にされるべき存在です。「笑顔を見れて良かったな」と思えることの喜びをご紹介します。	上田明日香	
リハビリテーション科	入所の在宅強化型への移行や通所の提供体制加算の算定等さらなるリハビリ充実に向けて今年度取り組んだ内容及び次年度に向けて現在行っている取り組みについて報告する。	古塩　博史	
推進センター	今年度推進センターは、介護予防事業を新規拠点で開催し、新たな参加者の増加と北区住民が自主的な介護予防に取り組めるよう支援体制を推し進めた活動をまとめ、1年の業績として報告する。	樫本　俊兵	
総務課	「自分たちが当たり前にやっていることって何だろう」。今一度、ルーチン業務に着目し、“総務課の役割”を再認識することで、新たな気付きを得、さらなる向上のため今年度取り組んだ内容を報告する。	大野木　茜	施設長賞
嵐山ユニット	認知症を抱えながらも自分らしく輝くためにセンター方式の活用、ターミナルケア、身体拘束の解除など利用者を理解し笑顔を引き出すために今年度嵐山ユニットで行った取り組みを報告する。	長尾真理子	生活支援部長賞
祇園・貴船ユニット	家や地域でその人らしい暮らしを過ごせるための支援の必要性。その一端を担うべく、「繋ぐ・繋げる」を今年度のユニット目標にした。3本柱をテーマに様々な取り組みを実施したことを報告する。	小林　憲司	
鞍馬ユニット	前年度と比較し、ターミナルや介護度の高い利用者が増えている鞍馬ユニット。日々模索しながら取り組むことによって見えてきた関わる事の大切さや課題など。彩り豊かな日常生活の提供について報告する。	前田　真大	
清水ユニット	利用者の「今」に視点を置き、「安心」「楽しみ」「笑顔」を作れるケアを通して、一人一人と向き合った結果を報告する。	平岡　　良	事務部長賞
西陣ユニット	その人らしい生活を少しでも豊かにするため「意識の向上～目標達成と実感のために～」をユニット目標に掲げ、利用者・家族・職員の関係性に一歩踏み込んだ意識的な介入の取り組みについて報告する。	加賀山隆次	

京都市北区地域介護予防推進センター

部　門：在宅関連部門
記載者：藤林　通代

センター長：藤林　通代

［年間目標］

『自主的な介護予防事業参加のコーディネートと他機関との連携』

［主な活動］

第7期京都市民長寿すこやかプランの重点取組に『健康寿命の延伸に向けた健康づくり・介護予防の推進』という項目があり、平成30年度はその点に意識をもって目標を立てた。

65歳以上のすべての高齢者を対象とした、介護予防の普及啓発（講演会・プログラム提供）と地域活動組織支援等が主な実績である。また、自主的な活動グループに対する立ち上げ支援や協力にも力を入れ、長年、運動器の機能向上プログラムに参加してきた方に対して、自主グループを作り上げ、自分たちで運動習慣を継続できるように支援をしてきた（年66回）。また、区内では運動だけではなく、栄養面での自主グループがあり、講師として支援・協力を実施した（年8回）。

介護予防として、運動・栄養・口腔・認知症予防を目的にプログラム提供を開設当初より実施してきたが、介護保険認定を持ち介護サービスと併用して参加される方が増え、担当者会議への出席、プラン・評価の連絡など多機関との連携が重要視されてきた。介護予防ケアマネジメント事例検討会（2包括）へ出席し、在宅生活への支援についても意見交換をした。

事業実績としては、事業回数1,593回、延べ参加人数20,142名が利用され、大きく増加している。運動器の機能向上・栄養改善・口腔機能の向上を目的にしたプログラム提供事業と、自らの力で事業内容を確認し、自由に参加することで外出機会の増加や社会交流を含めた運動教室の事業を拡大したことがその要因である（包括圏域に1会場は自由参加事業を開設できた）。

多機関との連携により、地域福祉を推進し、地域包括ケアシステムを担う1機関として健康長寿の延伸、介護予防普及啓発を目標にさらに展開していきたいと考える。

職種別職員数

平成31年3月31日現在

区分	職員数（実人数）		
	合計	常勤	非常勤
管理栄養士	1	1	0
事務コーティネーター	5	2	3

地域活動実績・研修参加実績

地域活動実績

区単位での活動・・・

・京都市北歯科医師会・歯科衛生士会北支部主催の『歯のひろば』でのブース協力
・「健康長寿のまち・北区」取組に係る『ハピハピ☆フレフレバスタープロジェクト』として、スタンプラリーの設置場所や事業として協力。『北区こどものまち』にて、立ち上がりテストや握力測定など健康ブースを担当。『インターバル速歩inがくさい』のプレ開催。『魅力再発見事業』にて、立ち上がりテストやフレイルチェックなどのブースを担当
・フナオカスタンダードでのブース出店『介護予防の啓発とサバ缶パスタの販売』
・市民すこやかフェアでの介護予防推進センターブースの体操体験と啓発協力
・北区地域福祉推進委員会に係る『シンポジウム』の参加
・北区社会福祉協議会主催『居場所作りに関する研修』『すこやか学級実務者研修会』において、グループワークのファシリテーターとして協力
・北山3学区合同ケア会議への出席と事業説明啓発
・介護予防ケアマネジメント事例検討会議へ出席し、在宅支援としての推進センター事業の関わりと啓発

圏域単位での活動・・・

・原谷包括圏域行方不明捜索模擬訓練への協力

学区単位での活動・・・

・各学区すこやか学級への講師協力
（小野郷・中川・鷹峯・金閣・衣笠・大将軍・紫竹・待鳳・鳳徳・紫明・雲ヶ畑・上賀茂・元町・楽只・柏野・紫野）　18学区と1地区のうち　16学区
・各学区の居場所サロン、各種団体活動への協力
（鷹峯女性会・おれんじ庵金閣・紫竹まつり・紫竹防災訓練・紫竹体育振興会・鳳徳ふれあい会・鳳徳わかば会・雲ヶ畑さじきの里・元町火曜サロン・パークシティ北大路町内会）

サービス事業所などとの連携活動

・紫明倶楽部「体力測定会」での測定協力（年2回）
・総合ケアセンターきたおおじ「いきいき教室」（月1回）　手作業・おやつ作り・体操・認知症への理解と啓発
・ナーシングケアおとく・北老人福祉センターより依頼を受け『認知症あんしんサポーター養成講座』を実施　認知症予防の講話とリーダー活動
・柊野福祉会主催『柊野健康福祉フェア』にて、災害時での缶詰レシピや節水料理の紹介
・くらしコープ主催　介護予防事業の普及啓発と体操
・DSポラリス運営推進会議へ出席。運動特化型のDSからの受け皿としての活動推進

関係機関との会議

・京都市北歯科医師会公衆衛生委員会
・「健康長寿のまち・北区」推進会議　推進企画会議
・北上認知症サポートネットワーク会議および講習会
・北区地域福祉推進委員会
・包括支援センター運営協議会及び運営会議及びセンター長会議

・包括看護師保健師専門職部会
・「子どものまち・北区」運営会議
・各包括介護予防ケアマネジメント事例検討会
・市民すこやかフェア、鷹峯ふれあい祭り、フナオカスタンダード等実行委員会
・情報交換会（各推進センターと市との情報交換など）
・原谷日常生活圏域サービス事業所連絡会
・居場所つくり情報交換会
・DS（ポラリス）運営推進会議
・包括圏域、各学区の地域ケア会議
・北山3学区合同ケア会議

研修参加実績

・ファシリテーション研修
・介護予防・自主支援推進研修
・口腔サポートセンター協議会研修
・なぜ？に答える！高齢者運動指導講習会

第4章

在宅関連部門

Gakusai Lab.

訪問看護ステーション「がくさい」

部　門：在宅関連部門
記載者：藤原美智子

所長：藤原美智子　主任：桃田貴久子　主任：森脇　誠

［年間目標］

『業務整備や改善をおこない、看護やリハビリの質の向上を目指す。』

［主な活動］

平成30年度は、医療保険介護保険制度の同時改定があり、訪問看護ステーションからのリハビリテーションには、概ね3か月に1回は、看護師の訪問が必要となった。

当訪問看護ステーションでも定期的に看護師が訪問し、リハビリのセラピストと一緒に計画を立案し、連携を行なった。

訪問看護は、4444回（前年比102%）、訪問リハビリは、6824回（前年比117%）で延べ1445名（前年比109%）の利用者に11268回（前年比111%）の訪問を行った。いずれも、前年度を上回る事ができた。

最近の傾向としては、訪問時間の短縮化（30分未満の訪問看護）の希望が多くなり利用料金が時間制の介護保険では、収益面では厳しく、件数を増やさないと増収に繋がらないという現状がある。それに対しては、バイクで訪問を行い、移動時間の短縮などを行った。

「ふらつく」「転倒する」ということで訪問リハビリに依頼があり、訪問が開始となったケースも、実は、難病（特定疾患）であり、介護保険から医療保険制度に切り替わるというケースも多くあり訪問リハビリの利用で、他のサービスに繋がったという事例も多くみられた。

職場内でのマニュアルの見直しと作成について、所内で定期的に話し合いを行った。制度上での必要なマニュアル以外にもスムーズに業務が行えるように日常の業務に関するマニュアルを作成した。今後も定期的に話しあい、マニュアルを見直していき、業務がスムーズに行なえるようにと考えている。

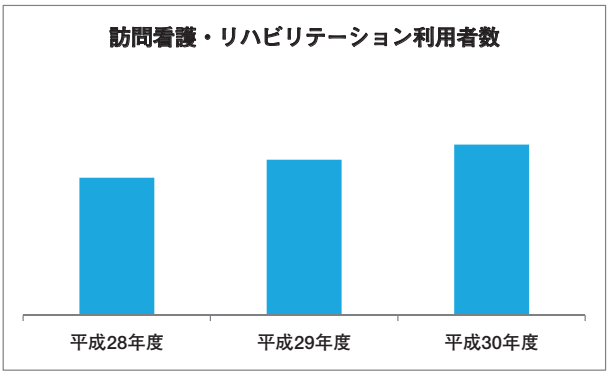
地域では、健康教室やオレンジカフェ（認知症の方やご家族の集いの場所）地域のイベントなどにボランティアとして参加した。

訪問看護や訪問リハビリを地域の方に周知して頂けるようにと包括支援センターや地域の居宅支援事業所に出向いて、新規利用者の確保に努めた。

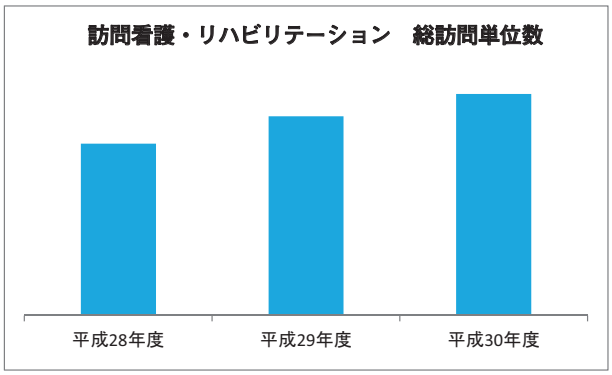
職場環境整備として、設備面では訪問の移動時間短縮のため原付バイクを購入した。

所内で「認知症」をテーマに全員が研修に参加し、所内でも伝達研修を行って質の向上に努めた。今年度は、訪問の移動時の事故防止のため、地域の警察署にも協力を得て「交通安全教室」を、また医療処置の学習目的で「人工肛門、人工膀胱」の学習会を行った。京都看護大学、京都府医師会看護専門学校から学生実習生を12名受け入れ、後進の育成にも努めた。

統計資料



	平成28年度	平成29年度	平成30年度
訪問看護･リハ	1164	1317	1445



	平成28年度	平成29年度	平成30年度
訪問看護･リハ	8743	10135	11268

在籍職員

平成31年3月31日現在

氏　名	役　職	職　員
藤原美智子	所長	看護師
桃田貴久子	主任	看護師
森脇　　誠	主任	理学療法士
堀井　千裕		看護師
池田　総子		看護師
福田　千紗		看護師
門野　雅行		理学療法士
中川　智喜		作業療法士

外部研修参加実績（訪問）

氏　名	職種	研　修　名
藤原美智子	看護師	看護研究の進め方
藤原美智子	看護師	「支えあって生きる」～共に楽しみ自分らしく生きるには～
藤原美智子	看護師	京都府ST協議会B地区学習委員会活動報告、音楽療法について
藤原美智子	看護師	訪問看護研究発表会（発表者側として参加）
桃田貴久子	看護師	コンフリクトンマネジメント
桃田貴久子	看護師	ライフスタイルに合わせた栄養指導を学ぼう
桃田貴久子	看護師	広小路認知症カンファレンス（年3回）
桃田貴久子	看護師	現任教育の魅力～教える事の基礎と実践～
桃田貴久子	看護師	接遇・人間関係とコミニュケーション
桃田貴久子	看護師	看護管理に活かすデーター管理
森脇　　誠	理学療法士	接遇
森脇　　誠	理学療法士	理学療法士による腰痛、膝痛アドバイス
森脇　　誠	理学療法士	H30年度京都市域リハビリテーション推進研修「生活の自立にむけた住宅改修のポイント」
森脇　　誠	理学療法士	脳の老化は、どこまで防げるか？脳科学の視点から
池田　総子	看護師	その人らしい生を支える看護の力
池田　総子	看護師	急変させないための知識
池田　総子	看護師	人との出会いと別れを経験して
池田　総子	看護師	スキンケア研修
池田　総子	看護師	認知症の方が住み慣れた地域で暮らし続けるために
門野　雅行	理学療法士	その人らしさを考える！認知症のある方へのリハビリテーション
門野　雅行	理学療法士	京都市域リハビリテーション推進研修「パーキンソン病・症候群の疾患りかいと支援の実際」
門野　雅行	理学療法士	呼吸器系循環器系フィジカルアセスメントとリスク管理
門野　雅行	理学療法士	感染対策について
中川　智善	作業療法士	バリアフリー展
中川　智善	作業療法士	理解ある認知症へ超高齢社会で私たちにできること共に生きるために
中川　智善	作業療法士	認知症初期集中支援チームの動き方
中川　智善	作業療法士	広小路認知症カンファレンス
中川　智善	作業療法士	オレンジカフエ（認知症の方や家族対象）年10回参加
中川　智善	作業療法士	権利擁護虐待防止について
中川　智善	作業療法士	認知症の人への医療行為とケアの進め方
中川　智善	作業療法士	認知症OTアップデート研修
中川　智善	作業療法士	京都府リハビリテーション地域人材養成派遣支援事業研修会
福田　千紗	看護師	平成30年訪問看護eーラーニング
福田　千紗	看護師	接遇
福田　千紗	看護師	「もうとまどわない認知症患者の対応」
福田　千紗	看護師	訪問看護研究発表会
福田　千紗	看護師	認知症患者への関わりと療養環境調整

※上記ほか10以上の研修に参加

居宅介護支援事業所「がくさい」

部　門：在宅関連部門
記載者：下山　照美

所長：下山　照美　主任：辻村シノブ

［年間目標］

『在宅部門での連携を図り、月単位での黒字を目指し、利用者に信頼される事業所を目指す。』

［主な活動］

今年度は入職者や退職者はおらず、ケアマネジャー５名（常勤換算4.3名）事務1名の体制を維持し、活動する事ができた。

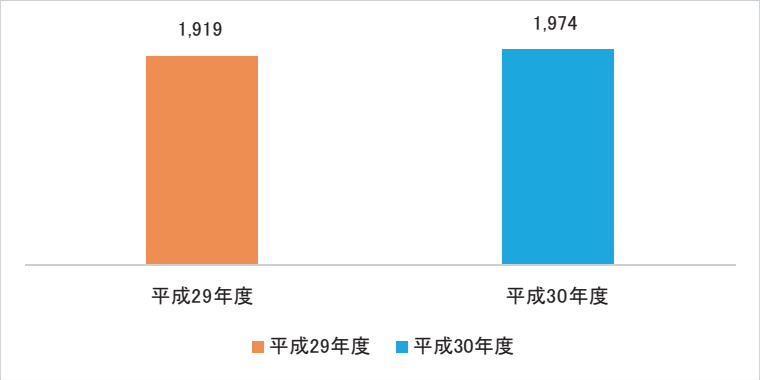
利用者人数の目標は、月162件であったが、今年度は164.5件となり、目標を達成する事ができた。その為、年間を通じてではあるが、黒字で終了する事ができた。

在宅部門との連携という点では、訪問看護との連携月平均32件の目標のところ月平均33.4件となった。そして、具体的な目標数値はないが、鳳徳包括とは10件、がくさい老健からは4件、がくさい病院から1件の新規相談を受け、連携を図る事ができた。今年度は老健の職員を中心に在宅部門の部署紹介を行う機会を得て、居宅介護支援事業所の仕事や役割、老健の職員に求める事などについて話す事ができた。

目標を達成した要因としては、給付管理数はもとより、現在の入院者数や開始見込みの新規利用者数、在宅復帰見込み人数など総担当者数の把握を毎月、必要があれば2週間に1回など全てのケアマネジャーから聞き取り、利用者人数の管理に努めた。それにより、人数の減少が見込まれる場合などは、早めに各包括に新規利用者依頼をする事とした。在宅部門との連携については、老健在宅連携会議を通じて、利用者数などを報告し、新規受け入れ可能な際には協力を求めた。がくさい病院も活動エリアの退院者がいる時は新規相談を意識的にしてくれるなど協力を得られた。

利用者の信頼に応える為の活動としては、京都府介護支援専門員会主催の研修や、北区や上京区の事業者連絡会などに83研修に参加した。今年度は主任介護支援専門員の更新研修の者が2名おり、また来年度更新新研修を受ける為の条件（4研修以上、20時間以上）をクリアしないといけない者が1名いるなどした為、事業所内で研修参加時期や人数について調整を行い、なるべく公平に研修参加機会を得る様に努めた。居宅介護支援事業所と利用者とは契約に基づき支援を行っている。利用者はいつでもいかなる理由でも契約を解除する事ができるが、今年度は解除される事無く、信頼関係を築く事ができた。

統計資料



在籍職員

平成31年3月31日現在

氏　名	役　職	職　員
下山　照美	所長	ケアマネージャー
辻村シノブ	主任	ケアマネージャー
森岡　尚子	主任	事務職員
大嶋佐百合		ケアマネージャー
北原真由美		ケアマネージャー
廣田　裕美		ケアマネージャー

外部研修参加実績（居宅）

氏　名	職種	研　修　名
下山　照美	介護支援専門員	ケアマネージャーとして知っておきたい平成30年度診療報酬・介護報酬同時改定
下山　照美	介護支援専門員	平成30年度京都府主任介護支援専門員更新研修
下山　照美	介護支援専門員	「京都式」ケアプラン点検研修
辻村シノブ	介護支援専門員	平成30年度京都府主任介護支援専門員更新研修
辻村シノブ	介護支援専門員	平成30年度企画研修ここまで出来る在宅医療
大嶋佐百合	介護支援専門員	ケアマネージャーとして知っておきたい平成30年度診療報酬・介護報酬同時改定
大嶋佐百合	介護支援専門員	平成30年度企画研修ここまで出来る在宅医療
大嶋佐百合	介護支援専門員	平成30年度企画研修認知症高齢者の意思決定支援
大嶋佐百合	介護支援専門員	発達障害の特性の理解と虐待対応について
大嶋佐百合	介護支援専門員	ケアプランに活かせるリハビリテーションの視点
大嶋佐百合	介護支援専門員	「京都式」ケアプラン点検研修
北原真由美	介護支援専門員	平成30年度企画研修認知症高齢者の意思決定支援
北原真由美	介護支援専門員	平成30年度企画研修課題整理総括表の実践活用ノウハウを学ぶ
北原真由美	介護支援専門員	発達障害の特性の理解と虐待対応について
北原真由美	介護支援専門員	ケアプランに活かせるリハビリテーションの視点
北原真由美	介護支援専門員	スーパービジョンの実践と振り返り
北原真由美	介護支援専門員	「京都式」ケアプラン点検研修
北原真由美	介護支援専門員	スーパービジョンの活用～根拠に基づく実習生の受け入れ指導
廣田　裕美	介護支援専門員	よくわかる高次脳機能障害セミナー

京都市鳳徳地域包括支援センター

部　門：在宅関連部門
記載者　竹内　卓巳

・科長：竹内　卓巳（主任CM）
・主任：北村　直美（看護師）、江東　彩子（社会福祉士）

［年間目標］

『法人内連携を図り、地域における医療介護連携構築と地域包括ケアシステムの一翼を担う』

［主な活動］

【地域におけるネットワークの充実・強化】

民生委員、老人福祉員等の関係機関に対しては日頃から連携を密に取り、気になる方に関しては包括へ連絡をして頂き相互連携を図ることができている。

認知症に関連する事案に関しては地域ケア会議の開催で情報共有や速やかな認知症初期集中支援チームに支援を打診。医療につなぐ支援や必要に応じて捜索ネットワークへの事前登録手続きなど備えの支援も行っている。また北区全体としても見守りサポーター勉強会を開催し、民協・老福の参加が得られ、特殊詐欺事案の特徴や注意すべき視点についても共有できた。多種多様な関係機関と一層の連携構築が出来たと考えている。

【地域高齢者の実態把握】

民生委員中核とする団体と日頃から連携し、支援が必要な高齢者を把握と訪問活動を実施。情報の共有を行い、見守り活動や支援へと繋ぐ取り組みが行えた。

【介護予防事業の推進】

学区毎開催のサロンや集い、すこやか学級や集団検診等に出席し、推進センターと協力して運動教室や介護予防の普及啓発に努めた。一般介護予防教室の「紫明わいわい体操」を定期開催。近隣住民からも毎回10名以上参加され、集いの場としての役割も果たしている。

【権利擁護に関する連携支援】

リーガルサポートにも相談しつつ成年後見制度についての説明や繋げる支援を引き続き行っている。

虐待通報があれば行政、ケアマネやサービス事業所等と連携。必要に応じて個別ケア会議を開催し、連携支援を行った。

【総合事業への対応】

29年度から開始となった新総合事業に対してシステム構築や書式等への対応を引き続き行っている。

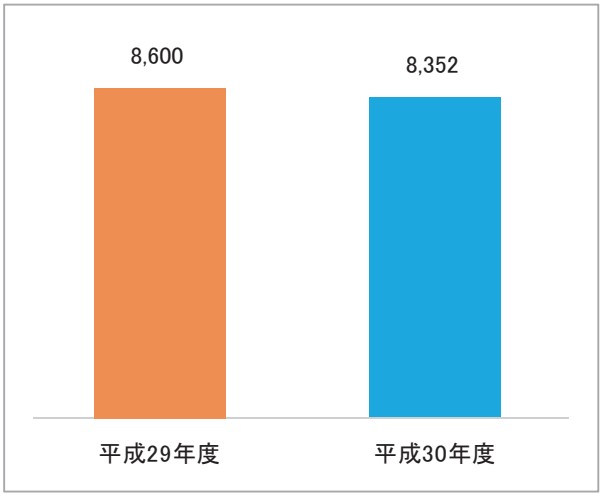
【法人内事業所との連携】

がくさい居宅やがくさい訪問看護をはじめ、市域リハビリテーション支援センターや北区介護予防推進センター等法人内における在宅部門と連携し、居宅との切れ目のない包括的な支援提供に繋げることができた。推進センターとは毎月の北区包括の運営会議等で情報交換を密に行い、一般介護予防事業の紹介や集団検診、地域のすこやか学級・サロン等に同行し連携を図ることが出来ている。

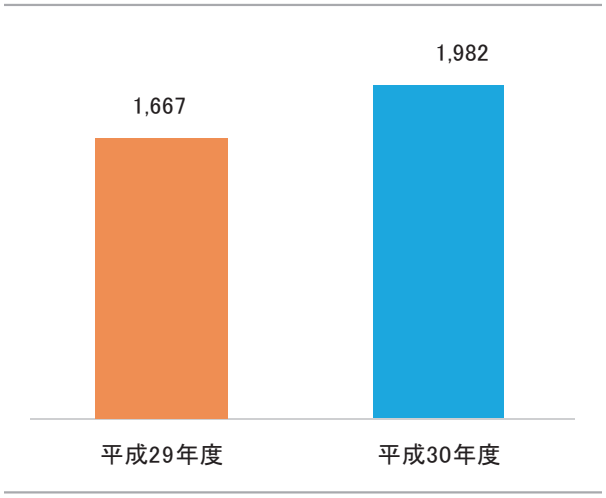
京都看護大学、医師会専門学校、京都府立医科大学よりまた看護師実習生を受け入れ、後進育成の一端を担っている。

統計資料

相談件数



保険請求件数



・総合事業・委託を含む給付管理数（目標平均値）153人／月　　（実績値）165.1人／月

在籍職員

平成31年3月31日現在

氏　名	役　職	職　員
竹内　卓巳	所長	ケアマネージャー
北村　直美	主任	看護師
江東　彩子	主任	社会福祉士
堀　　典子		ケアマネージャー
畑中　雪江		ケアマネージャー

外部研修参加実績

氏　名	職種	研　修　名
竹内　卓巳	介護支援専門員	京都市地域包括支援センター・在宅介護支援センター連絡協議会　H30年度第1回研修
竹内　卓巳	介護支援専門員	H30年度地域包括支援センター管理責任者研修
竹内　卓巳	介護支援専門員	平成30年度　包括協　第二回研修
北村　直美	看護師	京都市地域包括支援センター・在宅介護支援センター連絡協議会　H30年度第1回研修
北村　直美	看護師	平成30年度　包括協　第二回研修
江東　彩子	社会福祉士	精神障害者の理解と高齢者虐待について
江東　彩子	社会福祉士	平成30年度　京都市北ブロック合同研修会
江東　彩子	社会福祉士	「京都式」ケアプラン点検研修
堀　　典子	介護支援専門員	平成30年度京都府介護支援専門員更新研修（課程Ⅱ）

第5章

法人運営等

法人事務局

記載者：竹村　淳一

本年度における法人事務局の活動は，法人ビジョンの段階的な実現のために，主に以下の項目において注力した。

1.経営基盤の安定化

医療・介護業界は労働集約型産業とも表現され経営資源のひとつである「ヒト」の確保・管理は経営基盤の安定化にも重要な要素である。本年度（期初）の法人在籍職員数は全体で289名となり，一昨年と比較し113%の増員を図っている。職員数が増加することはそれに伴う人件費も増加することになるが，収益に占める人件費率は一昨年からほぼ一定を維持している（下記グラフ参照）。これは法人の事業活動が活発化することに対応し，適切な人員を増員していることを示していると考える。このように事業活動の活性化とそれを実現する「ヒト」を適切に確保・管理していくことは法人事務局の大きな役割のひとつである。

2.誇りを持てる職場環境の創造

①職員満足度調査と管理職研修会

本年度，職員の働く「意欲」と「満足」を可視化するために病院及び老健の職員を対象とした職員満足度調査を実施することができた。これは法人にとっては初めての試みであった。調査は，客観性を保つために，一般企業に調査の実施・評価・分析を依頼している。調査結果は，意欲度・満足度が高い「活性化組織」であり一先ず安心はできたが，課題も多く確認できたものとなった。法人事務局では，この調査結果を法人合同管理職研修会で共有し，上司して求められる態度についてグループワークを実施した。この職員満足度調査については，次年度以降も継続して実施する。

②子育て世代職員の働き方

当法人で在籍する多くの女性職員は，自分の出産・子育て等のライフイベントのタイミングにおいて退職を選択するケースが多くある。そのような職員を減少させるためにワーキンググループを組織し，子育て世代の職員が安心して働くための検討をすることができた。このワーキンググループにおいて指針を策定し，国の法律よりも優遇された育児・介護休業規定に改訂することができた。

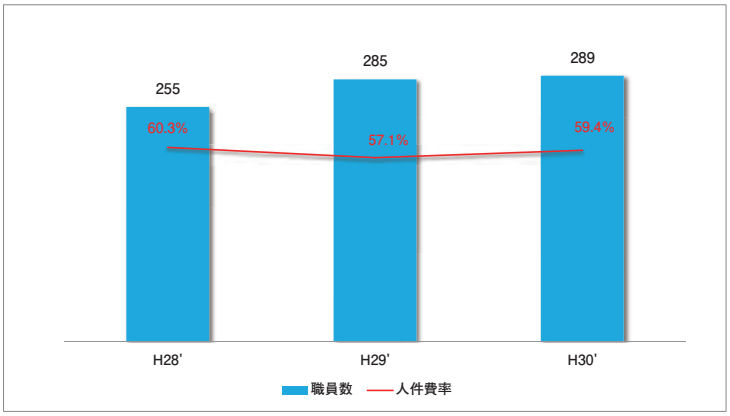
③人事制度の見直し

当法人で採用している人事制度である人事評価制度は，その目的や方法について法人内の理解が少ないために，制度上の問題点についてワーキンググループを組織し検討した。検討の結果，人材育成を目的にした人事制度は「目標管理制度」に一本化を図ることになった。

3.病院機能の客観的評価

当院の提供する医療機能が全国の医療機関と比較し，どのような水準にあるのか，また当院に不足している機能は何であるかを客観的に評価して頂くために公益財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価（リハビリテーション病院3rdG:Ver2.0及び付加機能評価リハビリテーション機能（回復期）V3.0)の受審を提案した。この活動については別章（77ページ）において詳述されている。この受審を通じて各部署における課題改善意識のベクトルを合わせることができたことで大きな知見と経験を得ることができたと考えている。

このほかにも老健における介護報酬改定対応や在宅部門における事業拡大の検討，法人年報発刊など大きな取り組みに関わることができた1年であった。前述した活動は法人事務局だけで実施できたものではなく，それをするために多くの方々から御協力と御指導・御鞭撻を頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。次年度においても，法人全体が活性化するために尽力して参ります。



理事会・定時評議員会

一般財団法人京都地域医療学際研究所 第20回 理事会

1. 日　時　平成29年6月11日（月）午後4時30分
2. 場　所　がくさい病院 2階 会議室
3. 議　題
   - ・第1号議案　平成29年度事業報告について承認を求める件
   - ・第2号議案　平成29年度収支決算について承認を求める件
   - ・第3号議案　第9回定時評議員会の議案並びに開催日程について承認を求める件

一般財団法人京都地域医療学際研究所 第9回 定時評議員会・第21回 理事会

1. 日　時　平成30年6月25日（月）午後2時00分
2. 場　所　ANAクラウンプラザホテル京都「醍醐の間」
3. 議　題

（1）報　告

・平成30年度 取り組み状況について

・理事長、副理事長並びに常務理事（事務局長）の業務報告について

（2）議　事

・第1号議案　平成29年度一般財団法人京都地域医療学際研究所　事業報告について承認を求める件

・第2号議案　平成29年度収支決算について承認を求める件

・第3号議案　監事の選任及び解任について承認を求める件

（3）その他

一般財団法人京都地域医療学際研究所 第22回 理事会

1. 日　時　平成30年3月14日（木）　17時30分
2. 場　所　がくさい病院　2階　会議室
3. 議　題

（1）報　告

・平成30年度取組み状況について

・平成30年度決算見込みについて

・理事長、副理事長並びに常務理事（事務局長）の業務報告について

（2）議　事

・第1号議案　平成31年度一般財団法人京都地域医療学際研究所事業計画並びに予算について承認を求める件

・第2号議案　平成31年度短期借入金について承認を求める件

（3）その他

一般財団法人京都地域医療学際研究所 法人運営会議 議事内容

法　　人：森理事長、竹村事務局長
病　　院：小西病院長、上島副院長、菅整形外科部門長、前田回復期リハビリテーション部門長
　　稲田看護部長、中井医療技術部長、吉田事務部長
老　　健：土井施設長
　　吉村事務部長、丹羽生活支援部長、岡リハビリテーション部長
外部相談役：沢田光思郎

［平成30年度 第1回、4月26日開催］ Ⅰ. 法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 人事に関する件 2. 外部カウンセリングシステムの導入について 3. ユニフォーム変更について（病院、訪問看護ST） 4. クラブ活動費補助金支給規程について	［平成30年度 第2回、5月24日開催］ Ⅰ.　法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 人事に関する件 2. 規定類承認に関する件 3. 外部カウンセラー導入に関する件 4. がくさい病院：院内掲示物の変更に関する件 5. 老健がくさい：設備投資に関する件 6. 職員満足度調査に関する件 7. ユニフォーム変更に関する件 8. 平成29年度 法人年報の作成に関する件 9. 賞与支給率に関する件
［平成30年度 第3回、6月28日開催］ Ⅰ. 法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 人事に関する件 2. 平成29年度 決算報告 3. 扶養手当支給に関する取扱の変更について	［平成30年度 第4回、7月26日開催］ Ⅰ. 法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. がくさい病院 改修工事完了について 2. 人事に関する件 3. 規程変更に関する件 4. 老健：南面土間改修工事に関する件 5. コーチング研修の導入に関する件 6. 子育て世代職員の働き方検討WG発足に関する件
［平成30年度 第5回、オンライン開催］ Ⅰ. 法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 人事に関する件 2. 超音波骨折治療器（トステオトロン）追加購入の件	［平成30年度 第6回、9月27日開催］ Ⅰ. 法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 人事に関する件 2. 平成29年度 法人年報に関する件 3. 人事評価制度改定検討に関する件
［平成30年度 第7回、10月25日開催］ Ⅰ. 法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 平成29年度財務分析について 2. 人事に関する件 3. 子育て世代職員の働き方の指針に関する件 4. 訪問看護ステーション拡大検討に関する件	［平成30年度 第8回、11月22日開催］ Ⅰ. 法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 目標管理シートの件 （平成30年度上期結果、下期計画） 2. 人事に関する件 3. 平成30年度 下期賞与に関する件 4. 子育て世代の働き方検討WG提案に関する件 5. 平成30年度 永年勤続表彰に関する件
［平成30年度 第9回、12月27日開催］ Ⅰ.法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 人事に関する件 2. データ提出加算の取得について 3. 子育て世代の働き方検討WG提案に関する件 4. インターネットセキュリティーの強化に関する件 5. 清掃委託業者の選定に関する件	［平成30年度 第10回、1月24日開催］ Ⅰ.法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 人事に関する件 2. 平成31年度 4月予定人事（組織体制）に関する件 3. 院長室、副院長室の改修工事に関する件 4. 平成31年度 職員配置定数に関する件 5. 人事評価ワーキンググループからの提案に関する件 6. 平成31年度 GWの営業に関する件
［平成30年度 第11回、2月28日開催］ Ⅰ.法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 人事に関する件 2. 平成31年度　予算に関する件 3. 職員 懲罰審議に関する件	［平成30年度 第12回、3月28日開催］ Ⅰ.法人経営検討会議 Ⅱ. 審議・報告事項 1. 人事に関する件 2. 老健　設備投資（GHP更新）に関する件 3. 訪問　認定看護教育課程申請に関する件 4. 病院　修学金申請に関する件 5. 病院　WILMO共同研究に伴うリハビリテーション装具の購入に関する件 6. 在宅関連事業部　介護システム更新に関する件 7. 人事評価制度の改定に関する件

クラブ活動：野球部

記載者：吉田　潤

・代表：下谷　聡（がくさい病院）
・がくさい病院
　相馬　寛人、下谷　聡、正生　拓海、吉田　純、吉田　潤、髙田　賢悟、
　新谷　圭由、林　亮治、上野　有佐、遠藤　良太、井上　和哉、馬淵　拓実、
　中村　輝彦、小林　剛、蛭子　拓真、阿部　哲也、井上　拓也、浦田　雄史、
　水谷　幸奈、井上　歩美
・老健がくさい
　井上　洋一、平岡　良、久永　知広

部員数　23名

［主な活動］

野球部は発足して2年が経ちました。平成30年度の野球部は、病院職員と老健職員から23名で構成され、2カ月に1回程度の全体練習と、京都市立病院協会主催の病院対抗野球大会に参加をして活動しました。

京都私立病院協会主催の野球大会（4月22日開催、みどりが丘公園野球場）は、惜しくも初戦敗退となりましたが、全員野球で楽しく試合ができました。毎年、大勢の方々の応援と差し入れなどをいただき大変感謝しております。今年は新入部員も加わり、選手層も厚くなってきました。可能な限り活動回数を増やして、何よりも楽しく活動をしていきたいと思っています。また、それに伴って良い結果が出せるようになればと考えております。公式戦以外の練習試合や全体での練習は、なるべく多くの部員が参加できるよう、多くは勤務終了後の夜にナイターで行っています。野球経験がなくても、キャッチボールがしたい、思い切りボールを打ってみたいなどと思われる方、部に所属していなくても、ぜひ練習に参加してください。日頃の運動不足解消や、ストレス発散には打って付けですよ。また、活動を通じて、職員同士のチームワークの輪もが広がります。初心者も大歓迎。多数の方々の参加を、部員一同お待ちしております。

クラブ活動：フットサル部

記載者：新谷　圭由

・代表：井上由紀乃（がくさい病院）
・がくさい病院
　新谷　圭由、髙田　賢悟、井上　和哉、田崎亜友美、中川　恵介、蛭子　拓真、尾崎　翼、岡林　和歩、馬淵　拓実、森本　雅之、正生　拓海、相馬　寛人、下谷　聡、吉田　純、井上　拓哉、浦田　雄史
・老健がくさい
　遠藤　良太、久永　知広、松野　彰太
・法人事務局
　竹村　淳一

部員数　21名

［主な活動］

平成30年度の学際研究所フットサルチームは、病院職員と老健職員などから21名で構成されており、月1回程度の全体練習と京都市立病院協会のフットサル大会に参加をして活動しました。

京都私立病院協会主催のフットサル大会（11月3日/23日、サンガタウン城陽）では、今年も予選リーグを突破し、決勝トーナメントに進出を果たすことができました。予選リーグは予想を上回る接戦でしたが、持ち前のチームワークで接戦を制し決勝トーナメント進出を果たしました。決勝トーナメントでは参加できる部員が少ない中、団結して試合に臨めましたが惜しくも敗戦となりました。両日とも、沢山の応援の方も来て頂き感謝しております。来年は今年より良い結果を出し、チーム全員が楽しめるような試合ができればと考えております。

フットサル部では、部に所属していなくても練習だけでも参加することができます。部活動を通じて、法人内職員のコミュニケーションの輪が広がると良いと考えております。初心者や女性の方の参加も大歓迎です。沢山の参加をお待ちしております。

クラブ活動：バレーボール部

記載者：村本奈巳子

・代表：山田　美香　・会計：中井登代美
小牧伸太郎、日野　学、根本　玲、古川吏恵美、清水　真弓、橋尾　彩花、
鈴木　理恵、井上由紀乃、田崎亜友美、宮田　梓、米田菜々子、松下　歩惟、
蒲田　景斗、水谷　幸奈、松田　亜弓、柴山　美穂、新田　彩貴、下村由香里、
牛田眞基美、樫本　俊兵、村本奈巳子

部員数：23名

［主な活動］

平成30年度の学際研究所バレーボール部は、病院・老健職員から23名で構成されています。月1～2回程度の練習や練習試合と、京都私立病院協会主催 病院対抗女子バレーボール大会に参加しました。

第41回病院対抗女子バレーボール大会（8/5太陽が丘体育館、9/16横大路体育館）では、今年も予選大会を突破し、決勝大会に進むことができました。今年度は、今までよりも練習を重ねた結果、決勝大会でも2試合に勝利することができ、3位に入賞することができました。今大会では男性メンバーの参加も認められ、がくさいチームも男性メンバーが参加し、より力強いチームで戦うことができました。両日とも、法人内外からたくさんの方々が熱い応援に来て頂き、チーム躍進の原動力になりました。感謝しております。

来年も、メンバー全員が楽しんで勝ちあがれるような試合が出来ればと思っております。

バレーボール部では、クラブに登録していなくても、練習や試合への参加が可能です。部活動を通じて、様々な部署の職員のコミュニケーションの輪が広がるような、クラブにしたいと考えております。初心者も大歓迎です。男女問わず、新入職員の方も含め、沢山の参加をお待ちしております。

年　　表

<table>
<tr><th>年　次</th><th>月</th><th>事　　項</th></tr>
<tr><td>昭和56年
（1981年）</td><td>6

8
11

12</td><td>社団法人京都府医師会第108回臨時代議員会、財団法人京都地域医療学際研究所設立にあたり基本財産として1,000万円の拠出を承認
京都府医師会会長有馬弘毅、京都府知事へ法人設立許可申請
法人設立許可
初代理事長に京都府医師会会長有馬弘毅就任
法人設立登記</td></tr>
<tr><td>昭和57年
（1982年）</td><td>12</td><td>京都府・京都市へ施設設備補助金の交付を要望、次年度より交付

補助金交付一覧
<table>
<tr><th rowspan="2">区　分</th><th colspan="2">補　助　金</th><th>補助額（延納利息）</th></tr>
<tr><th>京　都　府</th><th>京　都　市</th><th>京　都　府</th></tr>
<tr><td>昭和58年度</td><td>125百万円</td><td>125百万円</td><td>34百万円</td></tr>
<tr><td>59年度</td><td>125百万円</td><td>125百万円</td><td>45百万円</td></tr>
<tr><td>60年度</td><td>125百万円</td><td>125百万円</td><td>24百万円</td></tr>
<tr><td>61年度</td><td>125百万円</td><td>125百万円</td><td>5百万円</td></tr>
<tr><td>計</td><td>500百万円</td><td>500百万円</td><td>108百万円</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>昭和58年
（1983年）</td><td>5

7
7

7
8

9

10
12
12</td><td>清和建築設計事務所へ京都地域医療学際研究所施設工事の設計・工事監理委託
済生会京都府病院より跡地の土地・建物引継
済生会京都府病院と土地・建物売買契約
ファクシミリシステムリース契約開始（最多契約数400台、昭和62年8月以降新規契約中止）
竹中工務店と工事契約
修抜式・工事着工
募金活動開始
寄付金総額
573件　158,912千円
内訳
医師会会員　504件　75,112千円
そ　の　他　69件　83,800千円

理事　藤和　大祐　初代研究所所長就任
施設工事完了
開所式
京都府知事へ病院開設許可申請
診療科　内科・外科・整形外科
病床数　50床</td></tr>
</table>

昭和59年 （1984年）	1	京都府立医科大学　講師　木谷　輝夫　病院長就任
	1	附属病院　開院式
		附属病院　開設許可（1月17日　診療開始）
	3	建物所有権移転登記
		土地所有権移転登記
		有馬　弘毅理事　理事長辞任（京都府医師会長退任）
	4	田邊　朋之理事　理事長就任
	6	附属病院　基準給食実施承認
	10	附属病院　病床数変更許可（101床）
		附属病院　基準寝具（病衣）実施承認
	12	全国高校駅伝競走大会の救急医療機関指定
昭和60年 （1985年）	1	全国都道府県対抗女子駅伝競走大会の救急医療機関指定
	4	運動時心臓障害の相談（心臓検診）事業開始
	7	「老人栄養生態調査」の実地調査実施
	12	「難病の治療・看護調査研究」の調査研究班加入、調査開始
昭和61年 （1986年）	8	スポーツ選手の筋力測定診断事業開始
	9	「高齢者の体力に関する調査」
	10	土地所有権移転登記
昭和62年 （1987年）	8	「高齢者の体力に関する調査」
	11	高齢者の健康相談会開催
昭和63年 （1988年）	1	難病相談会開催
	2	附属病院　基準看護一類実施承認
		附属病院　運動療法の施設基準実施承認
	2	高齢者療養相談会開催
	3	腎疾患相談会開催
	4	附属病院　基準看護（基本看護料）実施承認
	8	「高齢者の体力に関する調査」
	11	在宅治療難病患者の訪問指導事業の訪問開始
	12	難病講演会と相談の会開催
	12	高齢者の食生活調査と栄養指導開始（平成5年まで）
平成元年 （1989年）	2	寝たきり老人入浴サービス事業開始
	3	老人健康講座開始
	8	田邊　朋之理事長　京都市長就任により辞任
	8	大森　圭造副理事長　理事長職務代行
平成2年 （1990年）	1	附属病院　基準看護特一類実施承認
		京都府医師会長　松尾　裕　理事長就任
	4	附属病院　基準看護特二塁実施承認
平成3年 （1991年）	3	藤田　大祐　研究所所長辞任
	4	前大阪空港検疫所長　遠藤　治郎　研究所長就任

平成4年 (1992年)	9 10	厚生大臣　老人訪問看護ステーションに係る認定法人等認定 京都府知事　老人訪問看護事業者指定（京都府1号） 指定老人訪問看護事業開始
平成5年 (1993年)	5	附属病院　CT装置更新（東芝製） 附属病院　手術室改修
平成6年 (1994年)	3	松尾　裕　理事長辞任（京都府医師会会長退任） 横田　耕三　副理事長　理事長就任 附属病院　診療科目追加（神経内科・皮膚科） 開設10周年記念式典（京都全日空ホテル）
平成7年 (1995年)	3 4	「優秀自主防火事業所」京都市長表彰 スポーツ医科学センター開設 アスリート体力測定診断・相談事業開始
平成8年 (1996年)	9	京都市在宅介護支援センター開設 介護相談事業開始
平成10年 (1998年)	4	所長　遠藤　治郎　辞任 附属病院　病棟・改修工事開始（平成11年4月完成） A病3階病棟（21床）を「療養型病床群」改変
平成11年 (1999年)	4 10	前京都府立医科大学耳鼻咽喉科教授　村上　泰　所長就任 附属病院　診療科目追加（耳鼻咽喉科） 附属病院　診療科目追加（放射線科・リハビリテーション科）
平成12年 (2000年)	4	介護保険事業開始（京都府知事指定）
平成13年 (2001年)	4	評議員会設置
平成14年 (2002年)	1 3 4 11	全館内の禁煙実施 横田　耕造理事長辞任（京都府医師会長退任） 京都府医師会長　油谷桂朗　理事長就任 附属病院　診療科目追加（消化器科・循環器科） 館内BGM有線放送開始
平成15年 (2003年)	1 3 7 10 11	「京都府婦人消防隊等優良施設」京都府消防協会長表彰 A棟玄関自動的にドア設置 京都市介護老人保健施設整備費補助金内示 介護老人保健施設建設工事指名競争入札実施 竹中・田中特定建設工事共同企業体　最低価格提示 田中　偉晃　一級建築士事務所と介護老人保健施設設計・監理業務委託契約締結 竹中・田中特定建設工事共同体企業と工事請負契約締結 介護老人保健施設「がくさい」建設工事起工式・地鎮祭

平成16年 (2004年)	4	旧京都銀行紫野支店跡取得・改修工事開始（6月完成）
		附属病院　病院薬剤部　院外処方箋発行開始
	5	附属病院　CT装置更新（東芝製）
		附属病院　A棟1階事務室オープンカウンター設置・薬剤部移転等工事
	7	附属病院　放射線科デジタル画像処理システム導入
	10	設立20周年記念式典・祝賀会（京都ブライトンホテル）
	11	介護老人保健施設「がくさい」建設工事完成
	12	介護老人保健施設「がくさい」竣工披露式・祝賀会
平成17年 (2005年)	1	介護老人保健施設「がくさい」開所式
	3	駐車場管理システム設備工事（4月完成）
		北大路別館1階 改修工事（訪問看護ステーション、在宅介護支援センター移転）
		B棟1階 改修工事（スポーツ医科学センター）を移転
	4	駐車場管理システム（アマノ製）運用開始
		A棟1階・2階診察室等改修工事（4月29日～5月8日）
		B棟1階改修工事「スポーツ医科学センター」（4月23日～5月1日）
	5	A棟1階・2階診察室・処置室・点滴室・検査室改修工事完成
		駐輪場設備（日本駐輪）設置
		電飾看板2台新設（大宮通）
	6	自動体外式除細動器（AED）「フリップ社製　ハート　FR2」設置
平成17年 (2005年)	7	A棟4階・5階病室給排水設備・酸素吸引設備増設工事（7月1日～8月31日）
		A棟・B棟外壁塗装工事（7月1日～12月24日）
		A棟・B棟・北大路別館防犯カメラ増設工事
	8	介護老人保健施設「がくさい」第1回夏祭り（地域交流のため毎年8月に開催）
	10	敷地内禁煙実施
平成18年 (2006年)	3	油谷桂朗理事長　辞任（京都府医師会長退任）
	4	京都府医師会長　森　洋一　理事長就任（第6代理事長）
		京都市鳳徳地域包括支援センター　京都市から受託開始
		健康スポーツクラブ「がくさいウェルネス」事業開始
		附属病院　病棟改修工事開始
	6	附属病院　病棟改修工事完成
	7	学際股関節研究センター　設置
平成18年 (2006年)	7	附属病院　病棟改修キャンペーン実施（～10月）
	8	附属病院　患者満足度調査実施
	10	介護老人保健施設「がくさい」予防通所リハビリテーション開設
	12	附属病院　厨房・栄養科　床改修工事
平成19年 (2007年)	1	附属病院　開院23周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設2周年
	3	第13期理事会・第3期評議員会　役員任期満了
	4	第14期理事会・第4期評議員会　役員就任
	7	A棟4階一般病床（40床）を「障がい者病床」に変更
	10	全国老人保健施設研究大会研究発表
	11	附属病院　オーダリングシステム稼働開始

平成20年 （2008年）	1	附属病院　開院23周年
		介護老人保健施設「がくさい」 開設3周年
	3	木谷　輝夫病院長　退院
		スポーツ医科学センター休止
		寝たきり老人の入浴サービス事業終了
	4	村上　泰所長　病院長代行就任（兼務）
	7	A棟4階5階病棟ベッド休止（40床→38床）
	8	監査法人トーマツによる病院経営分析調査
	11	近畿老健大会
	12	経営改善審議会　開始
平成21年 （2009年）	1	附属病院　開院25周年
		介護老人保健施設「がくさい」 開設4周年
	3	腎疾患相談事業休止
		第14期理事会・第4期評議員会　役員任期満了
	4	第15期理事会・第5期評議員会　役員就任
		附属病院　平田　俊幸 診療部長　病院長就任
	9	近畿厚生局　施設基準適時調査
平成22年 （2010年）	1	附属病院　開院26周年
		介護老人保健施設「がくさい」 開設5周年　記念式典・祝賀会（大谷大学）
		インフルエンザワクチン一斉接種　実施
	5	A棟エレベーター改修工事（三菱電機ビルテクノサービス）
	10	国税調査実施
平成23年 （2011年）	1	附属病院　開院27周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設6周年
		地上デジタル放送対応テレビ導入
	3	第15期理事会・第5期評議員会　役員任期満了
	4	第16期理事会・第6期評議員会　役員就任
		北大路別館1階に防犯カメラ増設
	7	A棟3階　療養型病床（21床）を「一般病棟」に変更
平成24年 （2012年）	1	附属病院　開院28周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設7周年
	6	特例民法法人京都地域医療学際研究所　最初の評議員就任
	9	一般財団法人京都地域医療学際研究所　移行認可
	10	一般財団法人京都地域医療学際研究所　登記完了
		第1期評議員　就任
		第1期役員　就任
平成25年 （2013年）	1	附属病院　開院29周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設8周年
	3	村上泰所長　退任
		本庄　英雄副所長　退任
		A棟4階浴室増設

平成25年 （2013年）	4	森　洋一理事長　所長就任（兼務）
		小西　哲郎　病院長就任
	5	回復期リハビリテーション病棟開始（52床）
		一般病棟病床数変更（40床→38床）
	6	第2期評議員　就任
		第2期役員　就任
	9	健康スポーツクラブ「がくさいウェルネス」事業終了
	10	新病院内覧会
		建物引渡し
	11	病院移転
		近隣住民対象病院見学会
		新病院外来診療開始
平成26年 （2014年）	1	がくさい病院　開院30周年記念式典・竣工式典
		介護老人保健施設「がくさい」 開設10周年
	10	回復期ワーキンググループ発足・医療法人輝生会　業務支援開始
		介護老人保健施設「がくさい」 開設10周年記念式典
	11	がくさい病院移転1周年
平成27年 （2015年）	1	がくさい病院　開院31周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設10周年
	4	中・高齢者のための「がくさい健康塾」開催
	8	回復期リハビリテーション病棟責任者会議設置
	11	がくさい病院　図書室開設
平成28年 （2016年）	1	がくさい病院　開院32周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設11周年
	3	がくさい病院　トヨタ練習支援型リハビリロボット導入
		がくさい病院　島津製作所FPD搭載型回診用X線撮影装置
		がくさい病院　回復期リハ入金基本料Ⅱ取得
		介護老人保健施設「がくさい」 介護支援ロボット導入
		法人運営会議、部門代表者会議の会議形態を見直し
		がくさい病院　回復期リハ入金基本料Ⅰ取得
		介護老人保健施設「がくさい」通所リハ　利用者定員数拡大
		がくさい病院　島津製作所FLAXA VISTION透視撮影装置
平成29年 （2017年）	1	がくさい病院　開院33周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設12周年
	4	中期ビジョン策定（法人、病院、老健）
		目標管理制度、人事評価制度の導入
	6	がくさい病院　訪問リハビリテーション事業開始
		がくさい病院　回復期リハ病棟 体制強化加算取得
		がくさい病院　組織体制を部門制（マトリックス組織）変更
	10	法人理念新設
	12	育児・介護休業規程の改定

平成30年 （2018年）	1	附属病院　開院34周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設13周年
	2	がくさい病院　病院機能評価受審ワーキンググループ発足
	4	がくさい病院　回復期リハ病棟　体制強化加算取得
	6	がくさい病院　病棟改修工事（6月～7月）
		整形外科病棟（40床→44床）、回復期リハ病棟（50床→46床）
	7	職員満足度調査実施（日本経営㈱、ES navigator）
		介護老人保健施設「がくさい」 強化型老健取得
	8	子育て世代職員の働き方検討ワーキンググループ発足
	9	がくさい病院・訪問看護ステーション　専門職ユニフォーム変更
	10	がくさい病院　上島圭一郎　副院長就任
		人事評価制度再検討ワーキンググループ発足

平成30年度　年　　報

令和元年10月1日　発行

一般財団法人 京都地域医療学際研究所

〒604-8845
京都市中京区壬生東高田町1番9
電 話 (075) 754―7111㈹
FAX (075) 754―7101
http://www.gakusai.or.jp

印刷所　㈱吉川印刷工業所
電 話 (075) 691―8186
http://yop.kyoto

Kyoto interdisciplinary institute of community medicine